つたる大星が、斯のごときの心底にては我々が武運も盡果てたり、此うへは一同に山科に押しかけ由良之助に面談なし、いよ〳〵逆變に極らば渠等親子の首討落し、我々關東に馳下り、高野の館に亂入して狂死するの外はなしとて、おの〳〵大星が宅にいたり、義心を顯はして詰問へば、由良之助は嬉し氣に、先は變なきおの〳〵の御心底承りて滿足せり、抽者において聊も逆變はござらねども、去るものは日々に疎しと、月日の立つにしたがつて若や一味の其中に心變りもあるべきか、爾すれば密事の敵方へ泄れる事もあらんかと、實は各方の心底を探り見しに、二心なきありさまを見うけて安堵いたしたり、恁ては本意を達せん事最早間もなかるべし、必ず我等が胸中をも疑ひ給ふ事なかれとて、密事をつゝまず打明けて心隈なく咄き示せば、義士の面々勇立ち、天にも昇る心地して歡びあへるぞ理なりける。

（卷の四十終）

第八十一回

爾ればまた由良之助は、同志の者の心底を猶訝しく思ひし故、神文に事よせて窃に探り見しところ、案に違はずそのうちには變心の者あらて、連外なしたるやからもあり、殘るは金鐵同樅の二心なき者のみなれば、大星もはや心易しと最たのもしく思ひしが、夫につきても千崎が此程はる〳〵吾妻より來り、關東にある同志の若者、段々事の延びるを待ちかね、血氣にはやる心より、如何なる無謀のふるまひを做すべくもはかられねば、元老の速におん下り叶はずば、原霞田鉄寺の内いそぎ關東へ下られて、壯士どもの心をば鎖めさせ給はずば、大事を引出す事もやあらんといふに、大星、是もまた大切なる事ながら、その身は京都を今しばらく離れがたき譯あれば、名代として鄉右衛門を差下すべきに事きはまり、原を招きてしかじかと件の由を言聞かすれば、鄉右衛門は一議に及ばず、身不肖の某に御名代を命せらるゝは當りがたき事ながら、お見出にあづかりし事歡これに增すものなし、就いてひとつの願あり、某老母に弟をさし添へ、妻子もろとも古鄉なる赤穗の在に忍ばせ置きしが、此度關東へ赴けば、生きてふたゝび古鄉に立歸るべきやうもなし、せめて此世の見をさめに老いたる母に對面なし、夫と言はねど餘所ながら暇乞をば致したければ、須臾が程の御猶豫を下さるべくやと言出づれば、由良之助點頭きて、人みな親を思ふ中に

も、別けて老母に孝心ふかき其元の事なれば、寔に道理至極なり、古郷に趣かれ心殘りのなきやうに寛寛と暇を乞はれ、其うへ發足あるべしと言へば郷右衛門歡びて、頓て赤穂の在にいたり、兼て母をば忍ばせ置きたる家の邊に近づき見れば、昔世にあるそのときは、三百石の歴々ゆゑ家居も廣く構へしに、今はいぶせき白屋に母を住ませて閑く事かと、思へば胸もふさがるに、はや今生の暇乞を言ひに來し身の苦しさは、泣かじとすれどせきあぐる涙に袖を濕せしが、我と心を取直し、然あらぬ體にて進み行けば、女房のお衣といへるが今年僅に二歳なる房吉といふ悴を脊負ひ、戸口に洗濯して居たりしが夫と見るより歡びて　衣「オヤ貴公お歸りでございましたかへ、お母さんもどんなにかお案事なすッてゞございませう、モシお母さんへ宿で歸りましたヨト言ふ聲聞くより母は立出で　母「オヤ〳〵郷右衛門お歸りか、嘸まア殘暑の時分といひ、暑い事であつたらう、挨拶は跡にして、足を洗つて上へおあがりヨ　郷「ハイ、左樣なら一寸御免を蒙りませうト草鞋をぬいて座に通れば、お衣も洗濯を片よせて、つゞいて跡よりあがり來る　郷「扨お母樣には暑さのお中りもなく、御機嫌のよいお顔を拜しまして、こんな歡ばしい事はございません、私も欽から御安否を伺ひながら立歸りませうとぞんじましたが、色々用事が重りまして　母「オ、然であらうとも、假令お前がお歸りでなくッても、京師から度々文をよこしてお呉れだから、其方の無事も此方の無事も知れて安堵して居ました、半年ぶりばかりで顔を見たが變つた樣子もなくッて、こんな目出度嬉しい事はないヨ、夫にお前の留守中もお衣がやさしくして呉れますから、私は寔に樂隱居さ、那見な、房兒がある程に成長なつて蟲氣もなく、此比では片言を言つたり、つかまり立も出來て來て、どんなに愛らしくなつたか知れないヨ、オヤまだ目を覺さないのかへ、お爺さんの歸つたのも知らずに、氣樂な物だノウホ、、、

ホ　衣「ハイ、今がたまで春中で喋つて居りましたが、何時の間にか寐て仕廻ひました、房をお祖母さんが寔にお可愛がり遊ばすから、お膝の廻にばかり居て、晝の内は大體お祖母さんのお守でございますヨ　郷「然か、夫は仕合な小坊主めだ、トキニ弟が見えないが何樣ぞ爲たか　衣「イ、エ一寸近所までト言ふうち弟の惣三郎も歸り來りて、兄への挨拶種々あれど事繁ければこれを略す、看官宜しく推すべし、そのうちお衣が手料理にて、夫の歸りを祝さんと思ふ心の花松魚、つくね鱠も繕はぬ膳に盃とりそろへつつ、酒あたゝめてさし出せば、水入らずなる親子夫婦が久しぶりなる面會に、頓て酒宴に及ぶほどに母は殊更笑しげなる、機嫌を考へ郷右衛門が　郷「さてお母樣、私もしばらく京都に參りまして、身の落付を定めませうと諸方へ口をかけて賴みおきました所、此度關東のさる諸侯がたから召抱へやうと申す方が出來ましたので、急に吾妻へ下りませねばなりませんから、實は今日參りましたのも其譯をお咄しも致し、又お暇乞をも申上げて、明朝は發足いたす心得でございます、尤來春になりますと、お迎に參ります積でございますから、夫迄は惣三郎を私と思しめして、御機嫌よくお暮し遊ばすやうにお願ひ申上げます、惣三郎もお衣も今聞く通りの譯だから、猶またお母樣を大切にお慰めまうすやうに致すがよい、是は僅の金子ながら當分の手當に渡しおけば、成丈はお母樣にお不自由のないやうにして進げて呉れろヨ、ト懷中より金三十兩取出し惣三郎に渡すにぞ、弟も妻も久々にて無事な顔見て嬉しいと思ふ間もなく發足とは、餘り本意なき事とはおもへど、禁むべきにあらざれば、お母樣のおんうへはかならず氣遣ひたまふなどと言葉を揃へて答をなせば、母はつく〳〵郷右衛門の顔うちながめて形容を改め　母「怜や、お前が吾妻へ發足、此うへもない目出度い事と私はどんなにも嬉しく思ふがネ、おなじ歡ばせるなら實正の事を言

つて、安堵させて呉れるが宜いではないかへ　郷「エ、實正の事とは、夫は何様申す事でございますか　母「なる程是は迂闊には口外の出來ない事であらうが、爰に居るのは内輪の者ばかり、他人の聞くといふではなし、先私の推量では、諸侯がたへ召抱へられると言ふは全くの僞、實は大星殿と心を合せ御主人の仇を報はうために、關東へ旅立をするのだけれど、打明けて言つたら母が欺いて、萬一禁めでも爲やうかと隱すも無理はないけれど、女でこそあれ私も武士の母だものを、未練な心は出さないから、心殘りのないやうに、何事もうち明けて咄した方がよいではないか卜星をさしたる母の辭に、郷右衛門は駭きて、かく御推量あるうへは寧うち明けありの儘お物語を致さうかと、口まで出でしがイヤ〳〵〳〵、あのやうに母上が心強くは仰あれど、是が此世の御別と申上げなばいかばかりかお歎あるは知れた事、本意を遂げしその上にて、我切腹を爲たるよしを聞かせ給ふは是非もなけれど、成るべき丈は一日も遲くお耳に入れるにしかじと、思ひ直して平伏なし　郷「是はまた思ひもよらぬお疑、勿論城中に居りました時分には色色評議もございましたが、同意の者に心變りが多くございまして、とう〳〵其相談も整ひませず、只今では大星氏はじめ、思ひ〳〵に身の落付を定めるやうになりました、なか〳〵お母様をお欺しまうす譯ではございませんから、御疑念をお晴し遊ばし、春になつて私が目出度くお迎に參りますのをお待ちなすつて下さいましト口には言へど心では、親を欺く勿體なさ、許させ給へと念じつゝ涙かくしてさし俯向けば、つく〴〵聞いて母は點頭き　母「夫程に言ふには何か深い樣子もあらうから推しても聞くまい、そんなら春を樂に待つて居ますから、隨分道中も氣をつけて、殊更殘暑の強い最中、朝を早く立つて日中は休むやうにするが宜い、定めて勞れも爲たであらうから、今夜は宵からゆるりと寢て、翌の朝私が起すまで草臥を休めなさいト殘るかたなき母の慈愛に、有難き旨返答して、おの〳〵臥房に入りしとぞ。

第八十二回

偖次の朝は暗きより、母もとも〴〵起出て、手づから燒飯をこしらへつゝ、是を盃飯に爲給へなど心を添へて世話なすにぞ、見る事聞く事郷右衛門は胸の塞がる事のみなるを、忠義のためと思ひ直して面の色にも顯さず、老母をはじめ妻弟にも是今生の別と思へば、猶念頃に暇乞して、赤穗の在所を立ちはなれ七里ばかりも歩行きしに、はや盃飯の頃にいたれば其あたりの木陰なる涼し氣なる所に立ちより、ありあふ石に腰うちかけてかの燒飯をとり出し、はや母人の志を受くるもこれを限なりと、おし戴きつゝ燒飯の四ッありしを三ッ食して、既に腹に滴ちたれば、殘る一ッを此儘おかば、時分からの事なるゆゑ味の變るべし、いかゞなさんと見かへれば、わが休みたる木の梢に鳩の巣かけてありしかば、殘りたる燒飯を鳩に遣らんと、木の枝の程よき所にさし置けば、件の鳩は嬉し氣に飛下りつゝくはへ行くを、如何するやと見あぐれば、おのれは喰はで巣の中なる子鳩に喰はする體たらくに、郷右衛門は思ふやう、鳩は僅の小鳥なれども子を思ふ道は斯のごとし、況て人間でありながら、此度吾妻に趣かば討死するか腹切るか、いづれ命はなきものを、僞りかざりて別を告げ、後に實を聞き給はゞ、親は箇程におもふものを、子は夫ほどに思はぬかと恨み歎かせ給ふべし、是と速くも心づかばうち明け申上ぐべきにと、流石强氣の郷右衛門も、爰にいたりて勇氣もくじけ一足とても進まねば、寧の事に取つて返し、仔細具にうち明し、改めて今生の暇を乞うて出立せんと、元來し方へと足を早め、其日も既に暮るゝ比、再び我家に立歸れば、

母をはじめ妻も弟もうち駭きつ、様子を問へば、失念物を致せしゆゑ歸りし體に言ひなして、家内の者を安堵なさしめ、扨郷右衛門は一間にいたり母の前に頭をさげ　郷「私が立歸りましたも外の事ではございません、全くは箇様〳〵ト七里行きて休みし所、子をいつくしむ鳩を見しことありのまゝに物語り　郷「實に今更申上げますも恐入りますが、御推量にすこしも違はず、大星殿をはじめ四十餘人申合せ、高野の屋敷へ亂入いたし、師直殿のお首を申受けんといふ此度の企、さすれば再びお母さまにお目に懸る事は出來ませんお年寄られた一個の母うへ、いかにもお側に居りまして孝養が盡したうございますが、お主の御恩も又重く、忠孝二ツを全く致し得ませぬ段は是非もない事と思召し、不孝の私へ何卒お暇を下さいますやう偏にお願ひ申しますト聲うるませて物語れば、母は反つて涙もこぼさず、莞爾とうち笑ひ　母「お前がどんなに隠しても、私は然と思つて居たが咄を聞いて猶の事、こんな歎ばしい事はないヨ、お前は殿さまへ忠義を立て、惣三郎は跡へ殘つて介抱をして呉れば、私はそれで十分すぎる、假令夫までにゆかずとも、私の身は何となつても、連れな手柄をして名を後の世に殘すならば、其上の孝行はないから、他の事は何にも思はないで、一圖に本望を遂げやうといふ覺悟で發足するがよいヨ、此うへは改めて最期の盃を爲ませうト再び酒の用意をさせ、親子の名殘と取りかはす、面に憂の色も見えず、機嫌よげなる母の體に、郷右衛門は安堵して、思ひがけずも其夜も又我家の臥房に休みしが、むだに一日を過せし事ゆゑ、次の朝はきのふより猶逸早く起出て、いそがはしく仕度調へ、はや出立をなさんとするに、前の朝は我身より先へ起きたる母親が、今朝は何とか爲たりけんまだ目を覺せし體もあらぬを、暇もつげず出立のなるべき事にあらざれど、宜く察しづまりて在するを起すも本意にあらずとて、姑く覺むるを待つほどに、夜は明けたれど音もなし、餘りの事の訝しさに、母の臥房を覗き見るに、無想や床はあけに染みて自害なしたるありさまに、郷右衛門は狂氣のごとく、這は〳〵如何にと駭きさわげば、妻も弟も駈けよりて周章限あらざるのみ、何と辭もあらざりけり、其中に郷右衛門はきつと心を取鎭め、傍を見れば枕元に一通の書置あり、おし開きてよみ下せば、

一筆申殘し〳〵、常々孝心ふかき事は詞にも述盡しがたく、殊更母の事を思うて、七里行きて立歸る程の心遣ひ、我身にとりてはいかばかりか歎び入り候へども、先討入と言はんとき、風と母の身の上を思出し給ふならば、進む勇氣も忽地くじけて、敵に內兜を見られ給はんか、是全くは母の存命あるゆゑとぞんじ候まゝ、惜しからぬ老の命、今宵先立ち申し候、此うへは跡に心殘りなく、師直どのは亡君の仇、母の敵とおもひ詰め討入り給ふものならば、尖き手柄を致され候はんと安堵いたし〳〵、何事も最期をいそぎ早々申殘し候、惣三郎お衣へもよしなに申傳へ賴入り〳〵。

母

原郷右衛門どのへ

郷右衛門は讀終りて、聲を惜まず泣叫び　郷「世には不孝の者もあれど、此身のごときものはあるまじ、斯と夢にも悟るならば七里の道は歸るまじきに、よしなき事を申上げんと思なる事をせしゆゑに、此御最期は遂げさせたり、ふがひなき私を、御命を捨てられてはげまし給へる御慈愛の程、いつの世にかは報せんト流石に猛き郷右衛門も死骸にひしと取付いて、前後不覺にうち歎けば、おなじ思に惣三郎もお衣も倶に

取亂し、涙にあやもなかりしが、斯て果つべき事にあらねば、泣々母の亡骸を菩提の寺へ葬りつゝ、跡念比に弔ひなどする、是等の事に日數經てはや二七日に及びしかば、郷右衛門は母の事忘るゝひまはあらねども、大星に誓ひたる詞もあるを、いつまでか此儘にしてあるべきならねば、いまだ忌は果てねども、跡跡の事なんど妻と弟に言ひふくめ、一期の別をなしつゝも京都山科に立越えて、大星かたにいたるにぞ、山良之助は對面して　山「イヤ是は郷右どの、此程古郷に參られてから、約束よりも日數も延び、其うへ只ならぬ顔色と見請けますが、御不快とでも申すやうな事でござるかネ　郷「イエ、私の身に變りまする事はございませんが、思ひ寄らず母を失ひまして、夫ゆゑ箇樣に延引致しました　山「エ、夫は御急病とでも申す譯で　郷「ヘイ、至極の急症でございましたトありし次第を物語り、かの書置を見するにぞ、駭きながら大星は首尾を讀下し、餘りの事に感に堪へけん、忽地倒れ臥したりければ、郷右衛門は驚きて、力彌と倶に介抱做せば、漸うにして心づき　山「扨て〳〵御老母の御義心、かの立林唯七の母と一對にして勝劣なく、男子も及ばざる所、貴殿をはじめ御家内の愁傷さこそと察し入る、是みな師直殿一人の心から事起り、亡君の御最期數千人の者の難儀何程といふ限なし、是までの鬱憤を一時に晴すも今姑く、かならず年内は過さねば、貴殿吾妻へいたられなば、彼地の同志の面々へ抽者が所存をお咄しなされ、目出度く本意を遂ぐる日を彼所において待ち給へト勇めはげます大星が、詞に憂も忘るゝばかり、郷右衛門は心いさみて、一日山科に逗留なし、急ぎ吾妻へ下りしとぞ。

○爰にまた同じ山科の邊に住み藪井備竹といふ者あり、醫者とは言へど匕は利かず、人見せかけに玄關へ藥箱は飾りて置けど、或は嫁のはしわたし、地面の賣買金の世話、又は座敷の取持などを賴まるゝを業とせし、世にいふ幇間醫者なるが、生國は關東にて前の編にあらはしたるかのお蘭の叔父なるゆゑ、兼てお蘭の許よりして、山良之助の樣子をば近所の事ゆゑ心を付け、若仇討の體もあらば速く這方へ注進あるべし、功によつては師直より褒美は澤山あらんといふ文通度々ありしかば、素より慾に目のなき者ゆゑ、大星かたへ取入つて折々遊所の供などいたし、心をつけて窺ふところ、酒に生根を失うて取締りたることとてはなく、或ときは刀を間違へ、又は懐中物などを忘るゝ事は度々なるゆゑ、何か怪しき書物などの有るかと内々改め見れど、武器を拂ひし請取手形や、揚屋の書出ばかりにて、是はと思ふ事もなく、實に本心放埒にて仇を報ふ所存なんどはあるべきやうにも思はれねど、猶も實否を探り見んと、其身の縁類の者の娘ことし二十五歳になりて、その名をお針と喚ばれつゝ心刺したる女子ありしを、大星かたへ口入して下女奉公に住込ませ、内外の事に聞耳立て、變りし體のあるならば内通せよとぞ言付けける、此お針の事につきて又一段の物語あり、次の巻を見て知らん。

（巻の四十一終）

正史實傳 いろは文庫 巻之四十二

第八十三回

大星は敵方より廻し者のあらん事を兼て推せし事なれば、下女下男にも心をゆるさず、只遊興を專らとして、いよ〳〵放埒の馬鹿物と思はするやうにふるまへば、悴力彌も父にひとしく、近所の娘に戯れて文など贈る事もあり、又は筋わろき女にかゝり手切金をゆすり取られて、世間へ恥をさらす事も度々に及びしが、ある日力彌は只一個その身の部屋にて書物をして居る處へ、例のお針といへる下女が、縁側の障子を明けて顔を半分出しながら　針「オヤ若旦那さま、何かしんみりお書物でございますかネト言はれて力彌は机の上にもたれながら見かへりて　力「誰だと思へば針か、行形其處を明けたから膽を潰した　針「ホ、、、ホ、夫ぢやア何か内證のお書物でございましたかネ　力「ナニ流行唄を書いた物を借りたから寫して居た處サ　針「オヤ、貴公此頃ぢやアお學問なんぞは些も遊ばさないで、そんな事ばかり御精が出ますネト（此ことば遣ひのやうすにては、下女にまで心やす立をせらるゝものと見えたり）力彌は笑ひながら　力「夫はその筈だアな、叱言を言はうといふ親父はあの通りの遊所狂、お母堂は里へ歸されて内には居ず、誰も天窓の押へ人がないから、斯いふとき面白い事を爲ないぢやア、する時はありやアしないはな　針「ホンニ、旦那さまも速く御嫁公さまをお貰ひ遊ばせば宜うございますのにネエ　力「まアそんな物サノウ、年比になつた者に

女房も持たせず、自分ばかり婦女郎買をして居るのだものを、這方も手當り次第女をこしらへたからと言つて當りまへサ　針「夫でも貴公あんまり喰ひちらかしはおよし被成ましョ、世間で悪い評判をいたしますから　力「ナニサ、口では斯いふけれども、そんなに出來る物ではないノザ　針「イヽエ、然被仰いますけれども、那山出のお捨を貴公何樣かなさいましたネ　力「なんのあんな者が何樣なるものかな　針「アレまア人の悪い、喰ひがくしを爲て被爲入るヨ、夫も一寸した事なら宜うございますけれども、私が何樣も怪しいと思ひましたから、此間那嬢と同樣にお湯に這入りますとき氣を付けて見ましたら、お腹も餘程大くなつて乳が黑くなりました處では、最う大かた五月ぢかくなつて居るらしく見えますが、貴公あんな事をなすツて何樣爲やうと思召しますエ　力「エ、夫ぢやア實正に出來たのかノウ　針「實正の啌のと、御覽じまし、餘程目立つ程大くなりましたアネ　力「そいつは大變だ、自己の氣ではほんの空腹ときの不味ものなしで、放心手をつけたが、夫はとんだ事になつた、全體子の出來ない女を見立て掛合へば宜かつたツケ　針「ホ、、、ホどれが子が出來るか出來ないか、顔付で知れますものかネ、貴公は寔に氣樂な事ばかり言つてお在なさるヨ、何れにしてもあんなにお腹の大くなつた者を、這方のお宅へは置かれますまいが、何樣被成思召でございますネエ　力「何樣と言つて詮方がないから、暇を遣る分の事サ　針「貴公然手輕く被仰いますけれども、お捨の宿は八幡在の薪村とかいふ所の百姓で、筋者だと申す啌でございますから、娘を疵ものにされては引取られないなんぞと、宿から六ケ敷く申して參つたら、お困んなさいませうがネエ　力「然なつたら又手切とか足切とかいふ事だらうが、是迄そんな譯で親仁に度々金を出させたから、奈何なことでも些と氣の毒で言ひにくいノウ　針「夫だつて何れ丸い物を握らせないでは治りは付きませんハネ　力「若いよ〳〵

困つたら、内證で自己の刀でも質拂つて間に合せて置く分の事サ　力「夫だからあんまり喰ひちらかしを遊ばすなと申すのでございますヨ　力「ナニ、こんな事を怖がつて面白い思が出來るものか、其處で針なんぞは子が出來るか出來ないか　針「ホ、、、、何を被仰るかと思へば、私なんぞはそんな相手がございませんから大丈夫サ　針「ナニ、若も誰か相手があつた時は何様だと聞くのだはな　針「私共は子なんぞをこしらへは致しませんが、夫を聞いて何に遊ばすの　力「子が出來ずば相手になつて見やうかと思つてサト言ひながら、手をつかまへて引寄せる眞似をすれば　針「否な若旦那様だネエ、ホ、、、ト笑ひながら振切つて逃出して往くとて、袂より何やら反古の端の押丸めたるを落して行きしゆゑ、力彌は手速く拾ひとり、皺になりしを廣げて見れば、お針どのへ藪井よりと上書せし文の切端、怪みながら中を讀めば、

兼て申しふくめ候通り、先日より追々御内通御申越しのおもむき、一々承知いたし候、親子とも只不しだらの事のみにて、別に怪しき體も御見うけなきよし、左候へば關東へトばかり跡は破れてあらざるを、力彌はつく〳〵讀返し、獨り點頭き居たりける、お針は大事の文の端をとり落せしとも心づかず、その儘勝手へ立出れば、お捨といへる小女が張物をして居るを見て　針「オヤお捨どん、大さう精を出して張るの、そんな高い下駄を履いて轉ぶと胞衣がからむといふせ　捨「何だとへ胞衣とは　針「アレまア此嬢は知らないのかノウ、赤子がお腹に居るうちは、臍から長い紐のやうな物が出て、其先に付いて居る胞衣といふ物を天窓へ冠つて居るトサ、夫だから萬一轉びでもすると、其胞衣の紐が赤子にからみ付いて、産むとき骨が折れると言ふ事だヨト言はれてはッと顔赤らめしが、素知らぬ體にて　捨「オヤ否なネエ、私やアお腹に赤子なんぞは在りもしないものを　針「アレサお隠しでないヨ、私やア敏から知つて居るがネ、まア相手が悪くないから、そんな體になつても宜いやうな物だけれども、お前があんまり氣が宜いから、困るやうな事でも出來は爲まいかと、夫が案事られるから聞くのだアネト言はれて返詞に困りし體にて、さし俯向いて居たりしが　捨「お針どん、お前そんな事を誰にお聞きのだへ　針「誰に聞かなくッても大體様子でも知れた物だアネ、那若旦那はあんなおとなしさうな顔はしてお在なさるけれども、とんだ浮氣もので、方々の娘をつまみ喰をするのがお好だから、お前の事も何と思つてお在なさるかと、今がたの口うらを引いて見たら、若困れば暇を遣る分の事だと一向に平氣なものサ、お前だつてこんな體にされた曉に、些やそつとの手當を貰つて下げられちやア實にうまらない咄だが、然かと言つて此内のお嬢公さんに引上げられる譯にもなるまいから、何でも田舎の爺さんと相談をして、手切の五十と七十は取らないでは動かないと言ふが宜いせ、若お前がたの手際で往かざア、私も内證で智恵を貸して進げるから、ウンといふ程金をいたぶり取つて、身の振方を付けるが肝心だヨ　捨「然何もかも知つてお在ちやア、隠した處が詮方がないから言ひますがネ、實正はふとした事から、若旦那の御手が付いて、こんなお腹になつたのだがネ、何卒後生だから誰にも咄してお呉れでないヨ　針「そりやア私だつて隨分是まで苦勞も爲た者だから、お前のために悪いとおもふ人に、むやみと咄をするものかネ、そりやア宜いが今言つた手切のところは何樣爲やうと思ふのだへ　捨「そりやア最うお前の深切に言つてお呉れの處は寔に嬉しいけれども、私のやうな田舎者を、若旦那が何とか思召して斯いふ事になつたのは、冥加ない事だとおもつて居ますものを、

此うへお金を下さいなんぞと、そんな勿體ない事が言はれますものか　針「夫ぢやアその儘で下げられても言分はないとお言ひのか　捨「ハイ　針「イヤハヤ、お心よしにも程があつた物だ、呆れかへつて物が言はれないヨ、同所の國にか、さんざッばらなぐさまれて、腹にいはくまで出來て居ながら、物言なしに追出されて往くといふやうな痴氣な業さらしが、世間に二個とありは爲ない、側で聞くさへ齒がいゝやうだノウ、夫といふが、那若旦那の男ぶりにお前が惚れて居るのだらうが、若旦那の氣ぢやアほんの當座のなぐさみに手を出して見たら、お前がおつな體になつたから、今ぢやアよせば宜かつたと思つてお在なさらアネ、其證據は、ヤレ空腹時の不味ものなしだの、子の出來ない女をはじめから見立て掛合へば宜かつたのと、好な惡口を利いてお在なさるヨ、そんな男に這方からばかり義理を立てたつて何になるものか、お前は年が往かないから、今の所ぢやア跡先の考もお在りであるまいが、是なりに宿へ下つて御覽、爺さんや母さんだつて、宜く爺なし子を孕んで歸つたと歡びも爲なさるまいし、第一近所隣へ聞えても外聞が惡からうぢやアないか、その時になつて後悔を爲たつて仕樣がないから、私の言ふやうに、何でも金を並べて見せないうちは、石が舍利になつても妥の敗居は跨いで出ないと腹を居ゑて御覽、是丈の家臺骨だものを、急度相應の手當は爲てくれるに違ないから、夫でお前の體の落付は何樣にも出來らアネ側からやたらに焚付けても、正直一圖のお捨ゆゑ、何と回答もなしかねて、只もじ〳〵爲て居る折しも、エヘン〳〵ト咳拂して表の方より由良之助が立歸りたる樣子ゆゑ、若聞かれしかとあやぶみながらも、お針は故意とさあらぬ體にて、他の咄に紛らしつゝ、空笑して居たりしは、なか〳〵不敵の女と見えたり。

第八十四回

大星は、千鳥足にてひよろ〳〵爲ながら一間へ通れば、お針は跡よりついて來り、茶を汲んで出しながら　針「旦那さま、大さう今日はお歸りがお早うございましたネ　由「歸りは早くッても酒は大さう呑んだ、何樣ぢや醉つて居ると見えるか　針「ホヽヽヽ、宜いではございませんか、醉ふためにあがる御酒でございますものを　由「なる程、醉ふための酒だから醉つても苦しうないと申すのか、おぬしはなか〳〵物の分つた者だ、夫はさうと、自己の留守に誰も來はしなんだか　針「ハイ鉄寺さまが御出なさいまして、若旦那樣の事についてお咄があると被仰いましたが、お留守と申しましたら、夫では又參らうとお歸りなさいました　由「ハヽア、夫では關東下向の日取を相談に來たと見えるわい　針「エ　由「ナニサ、力彌めが內に居ると、むだ金ばかり費させてならないから、今度鉄寺が伊勢參宮から關東の方を遊歷に出かけるといふから、悴をもつけて遣つて、些と關東で稽古事の修行でもさせやうと思ふのヨ　針「夫は宜しうございますが、貴公はまア奧樣はお里へお返しなさる、若旦那樣は旅へお遣り遊ばす、跡にはお幼少お惹童さん（是は次男の吉千代と三男の大三郎をさしていふ）お二個ばかりで何樣遊ばしますへ　由「サア是には深い譯のある事ヨ、夫についてお兼ておぬしは小才覺もあつて、物の用にも立つ者と見拔いて置いたから、此一大事をうち明けて相談相手になつて貰ひたい事があるのだが、かならず人に他言いたしますまいと言ふ誓言が聞きたいものだト言はれてお針は腹の裡に、常に變つた主人の辭、一大事とあるからは若仇討の事ではないか、何でも宜いから聞出して慵竹かたへ內通なさんと、思へば故意と笑ひながら　針「何だか大さう六ケ敷い事を被仰いますネエ

由「イヤモウ至極むづかしい事だが、おぬしならば出來やうと思ふから頼むのだが何樣だらう　針「そりやア
もう旦那さまの被仰る事でございますものを人に言ふなとなら、神々樣を誓に立てましても申しますまい
が、私のやうな者に何の御相談がございますエ　由「是は早速の承知でかたじけない、實は怜がむだ金を
遣はせるとは言ふもの丶、自己も島原や祇園町では隨分馬鹿な事を爲て居れば叱言も言はれず、尤先頃嵯
峨の菌狩に怖い思をしてから、急に金の惜しい事を思ひついて遊所通を止めては見たが、堅くばかりし
ても居られず、かの女郎買の糟糠汁とやらで、内はひどく儉約をして外へ出ては金を遣ふが、是も實は馬鹿
馬鹿しい事だから、同じ事なら、自己が極々氣に入つて居る島原の柏木といふ太夫を身請して内へ呼取り、
手活の花と樂む方が、金はかためて出るやうだが、外へ出て遣ふより餘程儉約にもならうし、其うへ第一
宜い事にやア、嫉妬を燒かうといふ女房は、里の親仁が分らない事をいふから返して仕廻つたし、年頃に
なる怜は旅へ立たせるし、二個の子供も困るなら世話を爲て遣らうといふ親類もあつて見れば、何も遠慮
はないやうなもの丶、困るのは那若黨の孫左衛門だ、おぬしも知つて居る通り、律義一遍の男だから、自
己が遊所狂をするのをやかましく異見を言つて、其うへ世間の評判にも、赤穗の腰拔浪人が主人の怨を
晴さうともせず、自分の身樗ばかりする、揃ひも揃つた臆病者と噂をされるも殘念だから、叶はぬまで
も仇討の覺悟を爲ろと度々の勸サ、自己だつてその位な事は百も承知爲て居るけれど、名を取らうより
得の世の中、誰も頼みもしない事に骨を折つて、揚句の果にやア大事の命を捨てるやうな野暮な事は、昔
は隨分あつたらうが、今時そんな馬鹿律義な者があるものか、自己も國に居た時分は田舍堅氣な事も言つて
見たが、段々花洛の水が腹に染込んでからの了簡では、百萬年も長生をして、好な事をして樂むのが當世

かとおもふ、けれども兎角孫左めが舊世話をやくので困るのヨ、然かと言つて暇を出さうにも、渠は親共
の時分から使つた譜代の者だから、今更咎もないに追出す譯にも往かず、おぬしに頼といふのは爰の所だ
が、先自己の工夫では、那奴が歳は自己に二ツ上だけれども、まだまんざら女に用のない事もあるまい、
其處をおぬしのはたらきで何樣か居膳をして見ては呉れまいか、譬にも女の居膳を喰はない男はないと
さへいふに、あの男は宜い事には酒が好だから、一盃呑ませて醉つたところへ持掛くれば、否と冠を振る
事ではあるまい、必竟は那男が是迄面白い事の味を知らないから、堅い事ばかり言つて居るけれども、お
ぬしと内證に出來でも爲て見ろ、自分がうまい事をするに付けても、なる程旦那が女に現をぬかすも無理
はないと、思遣が出來て自と異見も言はないやうになるは必定、然すれば誰に遠慮もなく、好いた太夫
を内へ入れ、世間晴れて樂まれるといふものだ、此事をおぬしが首尾よくやつて呉れば、骨折には金三十
兩遣すが何樣ぢや、頼まれてたもるまいかト思ひがけなき大星の言葉に、お針はあきれ果てしが、何で
も金になる事と聞いては見逃す事の出來ぬ生付いての欲張にて、お捨が力彌と情曲あることを聞出してさ
へ、種々と人も頼まぬ入智恵をして、先手切金となつた時には、世話を爲たといふ處で、その上前をはね
やうと言ふ事をまで仗倆むほどの女ゆゑ、四十を越した孫左衛門、心には染まねども怖い夢でも見た積
で、少しの間我慢をすれば三十兩になる仕事、是まで男をあやなす事は隨分仕なれし所爲なれば造作も
ないと心では、思ひながらも困りし顏にて　針「貴公何を被仰るかとぞんじましたら、如何な事でも私に
そんな事が出來ますものかネエ、ホ、丶、丶、丶　由「サア是は至極迷惑な譯とは思ふけれども、枉げても是をや
つて呉れないぢやア、自己の望も叶はないと言ふものだから、何分どうか頼みたいものだ、若また熟く往

つたうへでは、約束の三十兩の外にも又別段の爲やうもあらうから、骨を折つて呉れるが宜いト十分過ぎた咄ゆゑ、お針はいよ〳〵乘地にして　針「そんなにまで被仰いますなら、何をするのも御奉公でございますから、私で出來るか何樣かまア遣つて見ませうト口には言へど腹の中では、はや三十兩せしめた氣ゆゑ、是よりうへは五兩呉れるか、三兩増があるだらうかと、貫ふ事のみ目算をして、主人の前は退きしが、夫より三日程すぎて、風呂にも這入り髪も取りあげ、常より身形を取繕ひて、少しばかりの酒肴を竊に自ら携へつゝ、孫左衛門が部屋に往きたる後の物語如何ならん、亦はまた次の編に綴るを見て知るべし。

（卷の四十二終）

いろは文庫第十五編叙

栴檀の林に入る時は、衣自から芳しと、實や四十七士の徒が、誠忠義膽は今更に、言ふもなか〳〵愚なれど、其家族にも烈婦あり、又從ふに義僕あり、所謂原武林の母の如き、乃に伏して子を勵し、或は片岡近松が僕に、元助甚三郎ありて、俱に忠死を遂げんとす、其他なほ許多あれど、夫が中にも鉞寺が妻は、女の道を正しくして、事に臨みて駭かず、眞の女丈夫と言ふべきか、殊更敷島の道を嗜みて、一世の秀吟尠からず、然るからに這編中には、十内より妻に贈るの數通の文を抄出してもて、眞情の細やかなるを婦幼の爲に示さんと欲す、看官宜しく味ひたまへ。

東都爲永春水誌

正史實傳 いろは文庫 巻之四十三

第八十五回

偖もお針は由良之助が眞顏になつて賴みしのみか、首尾よく往けば三十兩の褒美の金になる事ゆゑ、獨り心に歡びつゝ、ある夜少しの酒肴を用意なせしを携へて、孫左衛門が部屋にいたり、裡の樣子を窺ふに、折よく獨り淋しげに、火鉢にもたれて居る體ゆゑ、障子を明けて内へ這入り　針「オヤ、まだお臥房でなかつたネ　孫「誰だと思へばお針どん、旦那でもお召しなさるのか　針「イ、エ、旦那さまは少しお頭痛が遊ばすと被仰つて、早晩になく宵からお臥房遊ばすし、若旦那は昼からまだお歸りがないから、お奥に居ても御用はなし、あんまり退屈だから遊びに來ましたノサ、其替りに宜いお土産を持つて來ましたヨトかの酒肴をさし出せば、孫左衛門は額を撫で　孫「是はとんだ御馳走だの、併しお前のお振廻では氣の毒だ　針「ナアニ、此お肴は旦那さまのお寐酒に進げる積でこしらへましたが、御頭痛氣で召しあがらないから、次で喰べろと被仰つたのを、お前さんがお淋しからうと思つて持つて來ましたノサ、お厠もついて居ますから、さアまア一ツおあがんなさいヨ、ト酌を取つて勸め掛ければ　孫「夫は思ひがけない仕合だの、實は寐るに、は早し、斯いふときに一徳利もあつたら宜からうと思つて居た所だから別して有難い、夫ぢやアお辭義なしに頂かうト猪口を取つて二三盃續けて獨り呑むほどに　針「オヤ、私も些とお合を仕ませうぢやアないか

孫「ナニ〳〵、此身アそんな面倒くさい事をするより獨が勝手サ、何から其所へ開いて往きなせへ、手酌で呑むから　針「アイサ、お前さんもあんまり一國だネエ、私も退屈で仕方がないから、折角一所に呑まうと思つて持つて來たのに、開いて往けとはあんまりだネエ、お前が呑ませないとお言ひの程、猶呑んで進げるヨト言ひながら、孫左が半分呑んで下へ置きし猪口をいきなり取つてグイト呑む　孫「コレサ、夫は此身が呑みかけだがな　針「お前の呑みかけの方がおいしいノサト尻目に十分情を含んで、孫左の顏をじろりと見れど、這方は一向氣のつかぬ體にて　孫「ホンニ是は惡かつた、そんならお前は其猪口で呑みなせへ、此身アも面倒だから此茶碗にするト湯呑を出して手酌でつぐを、少し醉はすも宜からうト思へばお針は態と止めず、稍五六杯かたむけて、ほろ醉機嫌になりたる比　針「アレサ、そんな大な物であがつては毒になりまさアネ、此お猪口を進げるからこれになさいヨト言ひつゝ、そろ〳〵膝の側へすり寄れば、孫左は跡じさりを爲ながら　孫「コレサ、そんなに側へ來て呉んなさんな、此身アは女の髪の匂や白粉の匂を嗅ぐと、胸が惡くなるから　針「オヤまアきつい物だネエ、夫ぢやアお前さんは女はお嫌かへ　孫「嫌の段か、極の嫌サ、其證據は、國許に居た時分にも、女房を持たないかと勸める人もあつたけれども、女といふ者は何だか穢いものだから、とう〳〵貰はないで、此年まで獨身で濟せたのサ　針「啞々、そりやアお内儀さんはお持ちなさらないか知らないけれど、是迄方々の女を迷はせてお出なさるに違はないヨ、夫とも女の側へも寄つた事はおありでないの　孫「まアそんなものサ　針「ホ、、、、まアそんなものが可笑しいネエ、お前さんだつて木の股から生れたのでもおあんなさるまいから、口では嫌だと被仰るけれども、まんざら否でもありますまい、私の口からは言ひにくいが、お前さんの樣な堅いお方と一生連添つたら、他に浮氣をなさらうではなし、

どんなに氣が安くッて宜からうかと思ひますヨト言ひつゝ膝へもたれかゝるを、孫左衛門は取つて突退け

孫「男女七歳にして席をおなじうせずといふ教もある、座興かと思つて聞いて居れば姪千萬、きり〳〵奥へ往けばよし、うち〳〵すると摑出すぞト目に角立て白眼つくれば、這奴咄せぬ爺とは思ひながらも、三十兩になゝとならぬの境ゆゑ、お針は笑に紛らして　針「アレサ、そんな六ケ敷い事を言つたり、怖い顏をしてお呉んなすッては困りますハネ、私だつて惡い氣で言つたのではなし、折角こんな物まで持つて來てお前さんに腹を立せて歸つては、是から先も永いお突合をするのに心持が惡いではありませんか、さアさア機嫌を直して最う一ッあがつてお呉んなさいヨト言はれて這方も呑む口なるに、正直一圖の男ゆゑ、些氣の毒にや思ひけん、據なく苦笑をして　孫「ナニサ、お前が今のやうな事さへ言はなければ、何も腹を立てる事はないノサト是より再び呑みはじめしかば、餘程醉ひたる樣子ゆゑ、最うそろ〳〵と宜からんと、三十兩のほしいばかりに、襁にも懲りず側へ寄りて　針「エ孫さん、腹をお立ちでは惡いがネ、先刻私が言つた事を何とお聞きのだへ　孫「何とも聞かぬが、餘り姪に思ふから　針「アレまだあんな堅い事を言つてお在なさるヨ、私だつてよく〳〵お前さんの事を思へばこそ、女の口から恥かしい事を言出したのでありますものを、些たア不便だと思つてお呉んなさいな、トあつかましくもしなだれ掛れば、孫左衛門は顏色變り、物をも言はずお針が襟首ひつ掴むよと見えけるが、其儘廊下へ突出し　孫「穢らはしい酒肴、持つて參れト言ひながら、喰ひちらしたる皿砂鉢をも俱に廊下へ突遣りつゝ、障子ぴッしやり〳〵切れば、お針は突出さるゝとき、廊下で辷つて尻餅つき、腰をしたゝか打ちしかど、家内の者も寐しづまりしにや、此物音を聞きつけて出て來る者もあらざれば、人に知れては外聞わるしと、痛む腰をば堪へながら、突出されし酒肴を自ら手速く取片付け、おのれが部屋へと逃歸りしが、獨りつく〳〵思ふやう、さりとは分らぬ堅親仁、那奴がうまく手事に乘れば、三十兩のそのうへにまだ四五兩もねだり出さうに、大骨折つて酒を呑まれ、あげくの果が此樣な痛い思をさせられては、些もうまる所がない、と言つて此儘濟めるのもあんまり智恵のない咄、旦那の前は何處までも熟く仕とげた積に言うて、褒美の金をせしめるとも、昨夜の始末を誰あつて知つて居る者あらざれば、喧とは旦那が思ひもせまい、若此事が後にばれても、旦那の口から表立ち言ふに言はれぬ筋合なれば、貰うた金は猶の事返せとも言はれまい、爾すれば兎に角三十兩取つて置くのが上分別と、欲に目のなき惡婆の本性、速くも思案を定めつゝ轆て枕につきしとぞ。

第八十六回

次の日お針は由良之助の側に人なき折を窺ひ、邊近くさし寄つて　針「エモシ旦那さま、お約束の通り御褒美を頂きたうございます　由「フウ、夫ぢやア首尾よく孫左めに居膳を振廻つたか　針「ハイ、どんなにか大骨を折りました　由「や、夫は大手柄だつた、併し那奴なか〳〵片意地者だから、つひ烏渡した事では往かなかつたらうが、何樣いふ鹽梅に言ひかけたか、昨夜の樣子を委しく咄して聞せて呉んなト言はれてお針は爲すまし顏に　針「まアお聞き遊ばしまし、何れ素顏では出來まいとぞんじましたから、御酒を持つて參つて勸めながら、そろ〳〵口裏を引いて見ますに、堅い事ばッかり言つて居て持ちかけやうもございませんから、何でも酔はせないでは不良と思ひまして、思入れ強付けましたら、口では堅い事を言つても、酔ふとしだらのない物だと見えまして、又翌の晩も都合が宜くば來て呉れろと申しましたヨ、此樣子に往けば、なか〳〵

貴君に御異見をする氣遣はございませんから、何卒御約束の御褒美のうへに、骨折賃をも添へて頂きたい物でございます　由「フウ、夫程首尾よく爲おほせたのに、何故また襟首を掴んで突出され、廊下で轉んで腰をしたゝか痛めたのだト問はれてお針は肝を潰し　針「エ、貴君何樣してそんな事をば御存じのでございますエ　由「ハヽヽ、おぬしも考へて見たが宜い、三十兩といふ金を出す事だものを、放心して居られる物か、殊に相手があの通りの偏屈者だから、どんな事を言ふかと實は此身が立聞をして居たが、おぬしが色々言つても那奴が一向に受けつけないで、腹を立てる樣子の可笑しさ、吹出したいのを堪へて聞いて居たが、餘程苦しかつたぜト言はれてお針はむねギックリ、流石に面目なかりけん、顏赤らめてさし俯向き、須臾返答もなき折しも、次の間よりして孫左衛門がつか〳〵と找み出で　孫「イヤモシ旦那さま、此針と申します者は甚だ不心得な者でございますから、唯今直にお暇を遣はされまし　由「コレサ孫左、藪から棒に何故そんな事を申すのだ　孫「イエ、此女は一體身上の能くない者とぞんじて居りました處、昨夜私部屋へ參りまして箇樣〳〵のふしだらトありし次第を物語り　孫「私のやうな能い歳を致した者にさへ、婬りがはしい事を申し掛けますからでは、御勝手の若者にはいかやうな事を致さうも知れませんから、早速に追出してお仕廻ひなさるが宜しうございますト言はれて少し由良之助は困りし體にて額を撫で　由「なる程道理な申分だが、夫には譯が、イヤサ何も譯のあるでもなく、ほんの戯談に言つた事であらうから、此後左樣な不作法な事を、假にも申さぬやうに叱り置いたら宜からうではないか　孫「イエ〳〵夫はなりませぬ、私は此お家の取締を致すやうにと仰付けられてございますに、箇樣な不埒な心得を致す者が居りましては、以來の示しにもなりませんから、たツた今お下げなさいましし、夫ともたつてお針を下げる事がならぬと被仰いますならば私にお暇を下さいまし、迚も渠のやうな者が居りましては、お宿の取締は出來ませんから　由「然六ケ敷言はれては詮方がないから、針に暇を遣ると爲やうヨト聞くよりお針はやつきとなりて　針「モシ旦那さま、貴君もあんまりな事を被仰るではございませんか、何も私がすき好んでこんな爺さんに唾でも仕かけたい事はございませんけれども、貴君のお賴みゆゑ、怖い夢でも見た積で參つたのでございますのに、何が私に咎があつてお暇をくださるのか、さア其譯を被仰いまし　由「コレサ。そんなに兩方から理窟を言はれては、困る者は此身一箇だアな　孫「モシ、お辭の中でございますが、左樣なら針が私の部屋へ參つて婬な事を致したのは、貴君のお差圖でございましたか　由「斯なつては面目次第もない譯だが、實は箇樣箇樣如此〳〵ト お針を賴みしはじめより、渠が詐り三十兩の褒美を貰受けんとせしこと、我又立聞せし事まで、ありつる儘に物語れば　孫「イヤハヤ呆れて物が申されません、貴君はそんな御了簡のお方ではございましなんだが、お心が狐狸とでも入替つたのでございませうか情ない思召、夫につけても憎いのは此お針め、假令旦那の仰にもしろ、左樣な事は出來ませんと言ふべき筈を、女の身で大膽にも、金鐵のやうな孫左衛門の心を惑はさうと爲たのみか、此身にさん〳〵恥しめられたを面目ないとは思ひもせず、旦那さまを謀つて御褒美まで貪らうとは、何處まで野太い根性だか、丈の知れない僻者だト苦りきつて白眼つくれば　針「孫さん、そんなに怖い顏をお爲でないな、お前も私の持つて往つたお酒を呑倒して居るぢやアないか、私だつてお金が欲しいばッかりで仕かけた仕事だものを、爲そくなつたからと言つて只濟されちやア、辷つて轉んで痛い思まで爲たのが埋るまいぢやアないか、夫ともに暇を出すなら出すで宜いノサ、ナニ爰の内ばかり日は照りやア爲ない、何處へ往つても當り前の給金は貰へらア、さア出すなら出すやうに道

をつけて出してお呉んなはい、旦那が若黨に居膳を爲ろと言付ける内が何處の何國にありますへ、這方もお持遊にされた替りにやア、言ふ丈の事は言はねへぢやア置かねへ、旦那何様被成て下さいますト執柄返しに誣賴かくれば、孫左衛門は腹に居ゑかね　孫「コレ、無言て聞いて居ると思つて、口から出る儘の事をぬかしをるな、腮が過ぎると打ちのめすぞ　針「こりやア可笑しいネエ、擲つ譯があるなら擲れやせう、女を擲つたら嘸手柄になるだらうト冷み笑へば堪りかね　孫「其爽げたをト言ひながら、拳をかためて打たんとするを、大星周章ておし禁め　由「これはしたり孫左衛門、たかが女の事ではないか、立騒いで聲高になつては、家内は素より近所の聞も宜しくないはサ　孫「イエ、貴君がそんな氣のい、事を被仰るから、這婦がつけあがつて、種々な熱をふきます　由「サア、然ではあらうけれど何分此身の外聞にも拘はる譯だから、腹も立たうが勘辨をして呉れるが宜い、其替り貴様の顔のたつやうに、何れにも暇を遣はすから、針が身分はしばらく此身に任してくれろト百般〳〵に言ひこしらへ、漸う孫左衛門に納得させ、其座をば立せ遣り、跡にて針に金五兩内々に握らせて　由「おぬしに咎のあるでもないが、孫左衛門があゝ言出しては、迚も此儘にしては置かれないから、下宿して呉れずばなるまい、其うち折を見合せて、又呼返す事もあらうからト是をも色々和むれば、お針は迚も此内に居ない積で過言を言うたるのみか、大星を欺して褒美をせしめんとせし身に誤もある事ゆゑ、所詮何程言うたればとて、此上金の出るでもあるまい、五兩の金でも取得と胸算用を做しつゝも、承知のよしを答へしかば、頓て暇を出せしとぞ、是みな大星が方寸より計りなしたる方便にて、兼てお針の心底を怪しく思ひ居たりしかど、故なく暇を遣はしては猶疑はるゝ事もあらんと、孫左衛門にも心得させ、何處までも由良之助が阿房をつくす體にもてなし、金まで取らせて追出せしかば、流石のお針も方便と知らず、案に違はず宿へ下りて、ありし様子を悉々とかの傾竹に物語れば、夫程白痴な大星とも知らず心を盡せし愚さよ、其様子ではなか〳〵に敵討は思ひも寄らずと、仔細委しく背面に認め關東へ言送りしが、奸智にたけし傾竹、猶大星が住居の様子に心を付けて居たりとなん、嗚呼難いかな大星の苦計、正義を躱して阿房を盡し、他に誘られ笑はれて、敵の聞者の耳目を防ぎ、又反間の方便を設けて躬方の義士の志操を探る、只その父のみならずして、子息力彌も親にひとしく、外面に墮弱の色を顯はし、或は遊里の酒に耽り、近所の處女をそゝのかしてあられぬ浮名を立てられても、本心放埒ならざれば、此程お針が袂より取落したる反古の端に、怪しき文體あらはれたるを急ぎ父に見せたりしに、由良之助も兼てよりお針を不審に思ひし故、かの方便にて追出せしなり、然れば力彌が種々なる女に戯れたる中にてかのお捨といへる者のみ、顔貌こそ然ばかりならね、賤しき水仕奉公をする者には珍らしき心やさしき性質なるに、何時しか懐胎したりし様子を由良之助は泄聞けど、更に驚く氣色なく、是も一時の策略と思へば、お捨が腹のふくだみて人目に立つも厭ふ事なく、世間の悪評高くなる比、親里へ内々掛合ひ、金子の外に衣類萬端殘る方なく手當して、生涯不通の約束にてお捨に暇を取らせしに、素より渠が親といふは、前の編にも記せしごとく、同國八幡在なる薪村の百姓にて、佛小平と仇名を取りし正直一圖の爺なる故、誣賴がましき事はさらなり、莫大なる金銀衣類を贈られたるに肝を潰して、再三辭めど聞入なければ、かの品々を受頂き、娘を引取り立歸りしが、主人の胤を妊せしは娘ながらも手柄者、些も恥ぢる事はないと世間の手前も憚らず、兎角するうち月滿ちて男子出生したりしかば、小平が歡大方ならず最大切に養ひしが、其後力彌が讐を討つて切腹なせしと聞くよりも、お捨は深く歎き悲み、終に尼法師と姿を

變へて、大星親子の亡跡を明暮弔ひけるとなん、偖またお捨が産みし子は、折から小平に男子あらねば成長の後跡を嗣ぎ、大星方より恵みし金にて許多の田地を買調へ、その子孫連綿として今なほ那地にありといふ。

（卷の四十三終）

正史實傳 いろは文庫　卷之四十四

第八十七回

爾ればまた由良之助は、京洛にありて關東の樣子を竊に窺ふところ、最早敵の用心も少しは怠慢りたるよしなるに、躬方の用意整ひたれば、時いたりぬと歡びて、その身は跡より關東へ下るべきの所存なれば、兼て手筈を定めしごとく忰力彌を先へ下して、鎌倉に居込みし者に安堵させんと思ふにぞ、鉞寺十内と侶俱に伊勢參宮と言拵へて、花洛山科を發足なさしむ、爾ればまた十内方には、娘お伊與と喚ばれしが俄に病に侵されて、終に此程世を去りたるに、うち續きて老母さへ近き比身まかりて袖も乾かぬうちなれど、鐵石心の十内ゆゑ須臾も猶豫做すべきやうなく、妻のお丹に跡の事など細やかに言遺して、力彌と俱に出立なすにぞ、並々の女ならば娘におくれ姑を先立て、今また夫を旅立す哀別離苦の悲しさは、如何ばかりありつらん、さらぬだに死別より生別程悲しきはなしと常言にさへ言ふなるに、是は一端別れては、盲龜の浮木に會ふ日はありとも、又再會のなるべきならねば、絶えも入るべき事なるを、貞烈無類のお丹ゆゑ泪一滴眼に持たず、夫の首途を祝しつゝ俱に勇んで出し遣りしは、又有りがたき賢女といふべし、是より下に記せしは、十内が吾妻下の道中にての詠歌と、關東に逗留の間に妻に贈りし數通の文の、中にも要と思はるゝを撰みて抄錄なせしなり、此文體を味ひ見ても、夫婦の中に實情あるを看官宜しく察す

べし。

十内秀和が吾妻下の紀行和歌一卷、京都なる妻方へ關東より贈る、

元禄十五のとし都を立ちてあづま路に下るとて、

おきわかれ今朝うち渡る賀茂川の水のけぶりはむねにたちそふ

あふ坂を越えて、

わかれても又逢ふ坂と頼まねばたぐへやせまじ四手の山越

志賀の浦にて、

古郷にかくてや人の住みぬらんひとり寒けき志賀のうら松

都の空しだいに遠ざかれば、

ふるさとは心あてなる大ひえの山もかくるゝ跡のしら雲

日々時雨ふりければ、

別れ行くおもひの雲のたちそふやけふもしぐるゝ東路のそら

所々にて詠む歌の中に、

より〳〵に都にかへる旅人の數にもれなん身の行くへかな

わすれ得ぬ都の空もおもかほに道行く人にたぐへても見る

吾妻に至りて尋ぬるに、ふるき友の殘れるは少し、

まくらかるゆかりの草も枯れはて、霜に起伏すむさしの原

然て兩人は吾妻に着きしかば、力彌は垣見左内、十内は仙北又四郎と變名して旅宿をもとめ、專ら同志の面々と會合なし、仇家の樣子を窺ふうち、京都なる妻の許へ贈りし文の内を抄出す、

一筆申入候、そもじ息才にて暮し申され候や、便もなく心もとなう思ふばかりにて候、我等一段無事にて候まゝ、先々心易かるべく候、幸右衛門、新兵衛、久太夫親子、拙助もそく才にて候、

註に曰く、大鷲文吾變名和久屋新兵衛という本庄に借宅し、俳諧の點者となり仇家を窺ふ、幸右衛門は十内の養子にて文吾の弟なり、爾れば新兵衛とは大鷲氏の事にて、久太夫は早稲、又拙助とは若村の事と知るべし。

一我等立ちて十日ばかりして、文も頼みて御越し候へと申置き候、けふこの比は文來るかと、その傳手約束の方へたづね申候へども、きのふ迄は參らず候、さだめて頓てとこそ屆き候半と待ちかね申候へ、便聞き申度待ち申事に候、

一相宿もしていよ〳〵元の宿に居申され候や、さもなく心細う外へも御越しあるかと思ふまでにて候、我等ふだん手廻りに在りし小道具も今はなく、家も廣きやうにて、次第〳〵に物すくなになりてかんそなる有さま、訪ふ人もれん〳〵に絶々に成りて、心ぼそく暮しめされ候半と、其有さま思ひやり見るやうにて候、夫は互に覺悟のまへの事、今さら心ぐるしとも思ふまじき道理にて候、只息才に身のくづをれぬやうに心得申さるべく候、此上のわれら心入にて候、

一藤三より金子返り申候か、せりつけて取り申さるべく候、取らぬが大そんにて候、

一藤助より銀子元利定めて濟み可申と存じ候、とかく人に物取られぬやうに用心めさるべく候、

一廿八日九日にはは、様四十九日かと覺え候へども、忍びての事なれば寺へも參らず心にておもひ出し奉りて、せめての御事に久太夫、勘助、孫九郎、幸右衛門、おなじ宿に居申候故、われら參りてその宿にて酒給べて申出し候までに候、其元にて兼て申合せ候ごとく、お寺へ香典あげて寺參めされ候はんと、心ひとつにておもひ出し申候、

一是まできのふの書、人の透に斯書きて置候處に、夕部美濃屋より十五日六日の文二通屆き申候、廿七日に參り候へども、我等居所知らせ不申候ゆゑ、取りに下され候を待ちて居り候と申して、きのふ取りに遣し申候人取つて參り候、十六日迄の便くはしく珍らしく、逢見たる心地にてまき返しそろ〳〵見申候、そもじ以前のごとく左の胸下痛みて、左を敷きては寐る事ならず、脈も勞れたるとて、慶安殿藥たべ申され候よしもつともにて候、氣の勞れ無その筈にて候、何事も思ひても身よわりてならぬ事にて候、便すくなき身に成り候へば、健にて世を渡る事肝要の覺悟にて候まゝ、病をおす事なく、よく〳〵藥呑み可被下候、心からいかうおとろへ申さるべくとすもじ致し、一入痛ましく思ふ計りにて候、

一二條へ書付上げ候とて、我等行先町代よりたづね申候とて家主申候よし、藤助挨拶尤にて候、萬一重ねて尋ね申候者候はゞ、立歸りに關東へ直に逃有つて下り申したると聞え申候と申さるべく候、最早爰元へ入込み候へば其ぶんの事にて候、由良之助どの事も餘所ながら問ひに來る人あつて挨拶もつともにて候、とり〴〵の沙汰あるよし無とすもじ致し候、

一十四日に寺まわり、直に非時も振廻のよし過分に存候、お石塔もおいよの程にて恰好能く候よし悦び申候、

一兼ての覺悟も違ひ、手もちからもなく、書は紛れ給へど、夜の目もいね給はで思ひめぐらし申され候よし、さこそと思ひやり、此かたとても同じ事にて候、水ばなれと申誤り候御申のごとく、月が立つにしたがひ、憂は增候半事見るやうにて候、常々申すごとくに、人間の榮え衰へ常なき事、道理をよく〳〵悟り候はゞ、うきも却つてまことの道に入るたねに成り〻〻、かやうのことは荒增合點のまへにて候、尙又心ある人に出合ひ、咄も聞き、勸も聞きて悟り給ふより外の心得も慰もあるまじく候、過ぎしあとを思ひ出し、往くも殘るも、其有樣を思ひくらして盡きることあるまじく候、互に身のさまをも心のうちをも斯こそとせめて思ふを忘れぬたね、命ある內の心ゆかしとも思ふより外はすべきかたなく候、只いたましく思ふばかりに候、

一此方の歌、とりわき逢坂の歌あはれのよし、能く聞き給ふと存じ候、其元の歌、さて〳〵感じ入り〻〻、中略是に付きても必ず歌を捨てなくて、絶えず詠み可被申候、歌ども透間に書きておくり申し〻〻、道中にては草臥ても、外に紛るゝ事なくて歌をも案じ候へども、是に着きては五十人にあまる同志の人々、入替り〳〵毎日出會ひて心のひま一寸もなく、獨り靜にして居ることなくて、歌もとりしめて案じならず候、只見ること聞くことにまで、そこもとの有樣を思ふばかりに候、次第にかんそに成行き候はんと思ひ遣りて、いにしへ世にありし時、中島文龍が留守を見るやうにこそと思ひくらべ申候、思ひても言うても盡きまじく候、筆にも及ばぬ事に候、

一爰元の有樣一日〳〵と暮し申候、若き者ども殊更いきりて、扨々いさぎよく見え申候、忠左衛門、

郷右衛門、久太夫、我等年寄にて、萬事申合候、朔日にも芝居面見世（今いふ顔見世なり、むかしは面見世と言ひしとぞ、時に十月朔日なるべし）とて若き者、幸右衛門も見物に参ると見え申候、内の者もなくて自ら何もかもするにて候、若き者ども骨折申し、我等老人とて殊の外かはゆがりて、朝夕の通ひまでして呉れ申候、名をも若き者寄りて、腎者にて候とて仙北十庵と付けて、十庵様十庵様と申候、殊の外馳走申候、

按ずるに、十内は惣髪なりしと聞ゆれば斯いふならんか。

骨折る事もなくて、酒呑み肴喰ひて一日をくらし申候、はや着物の袖口も切れかゝり申候、裾も少々破れ候へども、誰に頼むべき方もなく今少しの間と思ひ着申候、裏のほころびは今日幸右衛門に縫はせ申候、夜は寒さに着物どもを取重ね着申候、畳はたゝみて置き、入用の時ばかりの晴にとたしなみ申候、そもじ着る物今一ツ持ちて往けと御申に、持ちて参りよかりつるものをと今思ひ申候、さりながら親子の裝束きれいにて、せめて心よく候、

一羽を此比寄合ひて料理致し候とて、自ら鳥屋へ買ひに参り候、餘り見事に安く候ゆゑ、一羽買ひ申候、そもじへ贈り可申ためにて候、味所鹽しておくり申候、珍らしく賞翫めさるべく候、跡は幸右衛門方へ贈り申候、扨此料理早々めさるべく候、あま鹽にて候まゝ、久しく鹽を出し不申ざつと水に入れ、大根いてふをつまにして、薄味噌にて汁にめさるべく候、藤助に頼みてこしらへ振廻ひ可申候、慶庵脈に御出候はゞ、吸物にして酒一ツ進じめさるべく候、物をおませ候限りともなるべきかにて候、

我等方彌どの、宿へ移り申候、今迄の所にてはなく候、幸右衛門とは少々隔たる方へ参り候、先々今日迄達者にて候まゝ、心易かるべく候、其元何かも悟り心つよく暮し申さるべく候、いつの日如何なる事を聞かんとのこと尤にて候、今も如何なる事を聞きたると思ふ心に成りて居可被申候、又又文遣はし可申候、人多く候まゝ、此文も幾度にか認め申候、そろ〳〵見可被申候、返事とても此方より言遣りたることを、皆片端より返事に及ばず候、其元の入用のみを御申越候事に候、しゝ

十一月三日　　せんぼく　又四郎

右に記せし文のうちに、猶數箇條あれど省きたる條もあり、中略下略なせしもあり、是より下に寫し出すも大約斯のごとくなり、紙員薄小冊中に記しがたき故と知るべし、猶具なるを知らまく欲せば、吉田小野寺遺書歌と表題なせる古寫本あり、看官幸に求め得ば其委しきを知り給ふべし、予も其書より抄錄す。

第八十八回

おたんどの

極月十二日、北洛の妻方へ贈る十内の文なり、十二日は討入より三日前と知るべし、

一筆申入れ〻〻、此ほど登せ候文屆き申候まゝ、此元の左右今や〳〵と待ち給ふらんと、其心のうちおし計り〻〻、此許の事やう〳〵時至り〻〻、此上いかなる大變あらんは格別、かはりたることなければ最早けふより三日は過ぎ申すまじく候、二年のうち我人幾ばくの心づくし、身をくだき申候

甲斐ありて此時節にいたり候事、先々是迄をも本望と悦び勇ましく、先にも無心あるべければ、勝負は互の天運次第にて候、兼ても申すごとくに、公よりいか様の御咎にて、たとへ尸をさらされ候ても、少しも恨とも物うしとも思ふ間敷候、忠義に死したる骸を天下のものゝふに見せて、人の心も剛まさん事却つて本望にて候、斯のごとくの心さしにて候まゝ、ゆめ〳〵氣遣ひめさるまじく候、心安う思ひ給ふべく候、そもじ兼々の合點の程もぞんじ候ゆゑ、たとへ萬一いか様の難儀かゝり來り候とても、見苦しきやうには有るまじく候、又何事もなき世の中にては、猶もつていかやうとも渡世めさるべき心のはたらきおはしますと覺え候ゆゑ、中々心易くぞんじ候、今更思ひ殘る事もなくて心よく打立ち候まゝ、そこもとにてもせめての本望と思ひ給へかしにて候、此度の事我身ひとりにはあらずとも、箇様に珍らしきわざにて成果つる者に添ひてうきを見給ふ事、いつの世の惡緣かとおもふにかひもなく、是非に及ばぬ因果の程、たがひに思ひあきらめの外なく候、爰元の埒明きたるとの便候はゞ一番に玄溪か

註に曰く、玄溪は寺井氏にて、京都に住せし鹽谷家の醫師なり、討入の以前より關東に下り、本町一丁目七文字屋彌三右衛門といへる者かたを旅宿とし、十二月二十六日京都へ歸ると或書に見えたり。

知らせ可申候、世の沙汰も聞きつくろひて、此程も申入れ候ごとくの心得をよく〳〵めさるべく候、中略時節も近づき、あたりも銘々に仕度の申合なぞとて人多く、此文も夜明に二階へのぼりて漸う書き候ゆゑ、何方へも文遣はし不申候、慶庵どのはじめ西方寺了賢坊へなほ〳〵頼み申候、ゑかう院様なほ〳〵頼み申候、荷物も一兩日中に下し可申候、夫には文も成り次第にて候、詠歌たんざく遣はし可申候、見て慰み給へかしにて候、はや〳〵人々わやつき、筆を留めまゐらせ候、跡の事頼み入り〳〵。

極月十二日　なのでら　十内

おたんどの

猶々書上略末代まで天下に名を書きとどめん事、誠の本望これに過ぐべからずと、そもじ見ても嬉しく思ひ給ふべきと、せめて夫をそもじへ名のかたみとも覺え給へかしにて候、此もとの左右なきうらは沙汰なしにて候。

おたんの歌一首左に記す、

筆の跡見るに涙の時雨來てゆひかへすべき言の葉もなし

僕這文を抄錄なし、此歌を寫すにさへ、貞烈義膽に感じ入りそゞろに涙の催されて、しば〳〵筆を閣く事あり、卷を開くの婦幼等、十内夫婦の心の底をよく〳〵汲みも分けんには、かの樂んでいんせず哀んでやぶらずといふ、聖の敎に違ふ事なき夫婦別ある趣を知らんか、爾はれ唯その文のみ寫さば讀倦かるべき事もあるべし、下の卷には十内が討入の日まで妻におくりし短き文を抄出し、例の俗語の咄に移して、淫婦お蘭が物語の編殘したる所より、和七の倉橋全助が智勇の傳を綴らんかし。（卷の四十四終）

正史實傳 いろは文庫 巻之四十五

第八十九回

鉞寺秀和は鹽谷家の藩ながら、久しく京都の留守居を勤めて、年來那地に在住せしかば、堂上方にも出入して、その名は雲の上まで知られし名譽の歌詠なりしかば、妻におくれる文の文體、咄のやうに認めあれど、自からに俗ならで、しかも眞情のあらはれたる、至り盡さずと言ふ事なし、至極の文才なりと見えたり。

十二月十三日妻へ贈る文（討入の一日前なり）

十二日の文玄溪ゟ屆き可申候、夫に中入候通りの事にて候、最早言ふべきふしもなく、只そこもとの事思ひ遣るばかりにて候、挾箱一ッ、寢まき、ふとん、上下、羽織、其外小道具たくし込みしたゝめ、美濃屋左兵衛迄のほせ申候、御受取あるべく候、短冊も遣はし候、大星力彌殿十五にてせい五尺七寸、よろづ是にて相應の働、扨々珍らしき事故短冊かゝせおくり申候、手も達者に御座候、幸右衛門、九十郎、新兵衛も同じ事に心掛候まゝ心易かるべく候、大へんなくば又便も聞かせ申し[illegible]。

十二月十三日　　十内

おたんどの

逢ふときは語りつくすとおもへどもわかれとなれば殘ることの葉　　大星力彌　良金

十二月十四日妻方へ贈る文（討入の日なり）

かやうに書き申す所へ、文美濃屋店より受取申候、折ふし嬉しく候、一金弐兩美濃屋へ御渡し、妥元にて取れと御申候へども、最早入不申候、また太兵衛（みの屋なるべし）より返させ候まゝ、そこもとにて太兵衛より取り可被申候、心入過分にて候、一歌ども扨々感じいり涙をうるぼし候、心の内いたく敗存候、殊の外取込み候砌にて、何事も委しく申入れず候、思ひあきらめ給へかし、太兵衛店にては明日妥元を立ちて京へ登ると申候、頓てあらはれ可申と存候、もはや此度にて心のかよひも是限りにて候、妥元の事心安かるべく候。

以上

十二月十四日　　十内

おたんどの

返事

辭世の歌

わすれめや百にあまれる年を經てつかへし代々の君がなさけを

此文の文體にては、十三日の文書終りし所へ、美濃屋より妻の文屆きしゆゑ、書添へて贈りしやうに思はる、猶考ふべし。

大星由良之助良雄浪人の内花洛山科に住し、十内と熟懇にせしかば、關東より

暇乞のため、秀和の妻方へ大星より贈る十二月十日の狀、

家來左六幸七いとま遣はし戻し候まゝ、一筆申入れ〻、けしからぬ寒さに成り申候、いよ〳〵御息才のよし、折々十内殿に便承り珍重ぞんじ候、爰元十内どの彌御無事に、拙者相宿にて晝夜御心安く申談じ大慶にぞんじ候、少しもわづらはしき事御座なく候まゝ、御氣遣ひ被成まじく候、嘸嘸日々の御案じと御心底の程おしはかり〻、御噂のみ申す事に御座候、爰元へ下り候うて、ぞんじの外永逗留にて困り申候、併しながら此方首尾一段よろしく、兼てその元にてとなへ〻とは格別ちがひ、大慶申事に候、頓てのうち首尾よく打明け可申候、先只今までのしゆびも殘る所なく候まゝ、御安堵可被下候、最早間もこれあるまじく候、前々申すごとく、十内殿御一家大勢御揃ひ、此度忠死の事誠にもつて御信切の御心ざし、後代までの御外聞と御浦山しく候、我等一家も大腰拔どもにて、我等父子同名とては瀨左衛門一人ばかりにて面目もなき事どもに候、家來孫左衛門事、去る三日に立退き候、元來輕き者の事に候へども、われら外聞ともぞんじ悅び申候所、しごく不屈に存候、

孫左衛門は譜代の家賴にて、律義一遍の堅爺と聞えしに、如何してか變心なしけん、尤奥野將監はじめ、佐々小左衛門、進藤源四郎、小山源五右衛門等がごとき正義第一と思はれつるも、異論を言立て連外せし事、大星だも力及ばずと言ひけるよし、堀内氏の筆記に見えたり、況て陪々臣の孫左衛門ゆゑ、渠等に比すれば論ずる事なし。

併し高きも賤しきも、珍らしからぬ此一事にて候、先申進ずべく候は幸右衛門どの、源吾どの、其外も御無事にて隨分とすくやかなる事どもにて候まゝ、御氣遣ある間敷候、次第におし詰め申候得ども、何時年の暮とも春とも更にわきまへず、うか〳〵と月日を送り、此ほど季節候なぞ參り候うてこそ、としの暮とは驚き〻、扨も〳〵をかしき身のさまと、十内どのと申笑ひ申候、在京の内は度々參り御目にかゝり御馳走に成申候も、何も〳〵昔夢の心地とぞんじ候、餘程居なじみ候ゆゑか、ともすれば都の事のみ申出しなつかしく殘り多く、打寄り一笑の事に候、此度いとま遣はし候兩人の者ども、むかし鬼王團三郎同事におもはれ笑ひ申候、兩人事、此せつまでつゝがなく書夜身ををしまず相勤め候心ざしの程、淺からず過分の事どもにて、輕き者どもにて候へども、孫左衛門とは雲泥の違、用にも立ち可申ものども、一入不便にぞんじ候、左六立寄り申すべくと承り候ゆゑ、十内殿御無事の由申進じたく、又は御暇乞のため旁かくのごとくに御座候、もはや御返事被下候事御無用に存候。

十二月十日

十内殿御内儀

尙々せつ角御無事に御淩ぎ被成〻、十内殿事は御氣遣被成まじく候、晝夜うち寄り酒など給候てその日を樂み、却つておもしろくぞんじ候、猶左六くはしく申〻、以上。

葭田忠左衛門兼充關東より秀和が妻へおくりし歌、

大ぼし　ゆらの助

おもひ捨てし夕なれどもふる里の便とや聞くはつ鴈の聲

原郷右衛門元辰吾嬬下の道中にて詠みつる歌とて、

秀和が花洛の妻へおくる、

ながらへば命ともなれ夢の世に越ゆるや名殘佐夜の中山

義士の妻女許多あれど、大星及び原瀬田等より書ふた歌などおくりしもの、十内が妻の他に聞かず、これのみにても、心ばへの貞烈なるをおして知るべし、猶おたんの身のをはりは姑且後の編に讓りて、次の回より物語兩頭に分れば、宜しく前後を合せ見給へ。

第九十回

閑「エ和七さん、お前心持でもわるいのかへ、何だか鬱氣でばッかりお在だネエ、併が夫も其筈サ、今まで熟くはなし込んで、可愛いの、いとしいのと言ひ合つて居た小雛嬢を、無理むたいに高野様のお屋敷へ上げたのだものを、嘸今比は師直さまのお手がついて、何様だらう斯だらうと考へたら堪らないノサネエ、私も最う少し歳が若くば那嬢のやうに思はれやうに、口惜しい物は歳だネエト一寸言ふにも嫉妬らしく生いやらしき、お蘭の言話の胸悪けれど、爾あらぬ體にて　和「ハ、、、又解らないことを被仰いますネ　閑「アイサ、私は解らないノサ、どうせ那嬢の様に種々の座敷を勤めて、酸いも甘いも知つて居る者とは違ひますヨト反身になつてツントするゆゑ　和「モシ、そんなに腹をお立ちなさる事はございません、私が分らないと申したのは、まア考へても御覽じまし、小雛は主人の娘でございますものを何様致されませう、若また那嬢と情曲のあるのなら、假令誰が何と言ひませうが、連れて逃げるまでもお屋敷へ上げさせは致しません、夫を私が口を利いてあげるやうに爲たのだから、情曲のない事は分りさうな物だと思ふのを、何かにつけて貴女がおつなことを被仰るから、解らないと申したのでございます　閑「實正に然なら嬉しいけれども何様も疑はしいやうだから、ツイ愚痴を言つたのだから堪忍してお呉れヨ　和「貴女のお心さへ解ければ宜しうございますが、私に他のお使はおさせなさいますけれども、高野様のお屋敷に限つて遣はされないのは、やッぱり那が居るからでございませうネ　閑「ナニ然いふ譯でもないが、近比ぢやアあのお屋敷の御門が嚴しくなつて、假令お出入の鑑札を持つて往つても、顔の見馴れない者は決して入れるなと、重役のお方から堅く言付けてあるさうだから、御門番がやかましい事ばッかり言ふヨ、夫だからお前を使に遣らないノサ　和「イエ、然ばかりではございますまい、私をお使に遣はさらうと思召せば、貴女が松原様か其他のお役人さまの所へお出なさるとき、お供にお連れ被成て、是から御用の節は此者をお使に差上げますから、お見知り置かれて下さいましと被仰れば、御門へも其事がお差圖になつて何も障りはあるまいと思ひますのに、夫をなさらないのは、萬一お奥のお口へでも往つて、小雛に内證の咄でも爲やうかといふお疑でございませうが、積つても御覽なさいまし、那はお側向のつとめを致す者でございますものを、いくら逢ひたいと思つたからと申して、ひよこすかお口なんぞへ出られますものか、何も私が斯申すからと言つて、高野様へ是非御使に參り度といふのではございませんけれども、那の事で貴女に何時までも疑はれて居ては、爰のお内に居ても面白くございません、お暇を頂いて宿へ下りませう　閑「アレ、又そんな事を言つて私に氣を揉ませるヨ、私の心持では、最う些し爲たらお前を爰の内の後見に表向披露して、お屋敷の御用も

お前に任せて仕廻はうと思つて居るのだけれども、實はお前のお言ひの通り、若も小雛嬢に通路でもされてはと疑つたのは悪かつたヨ、最う〳〵決してそんな氣も出さず、お前をもお屋敷へ出入の出來るやうにするから、必ず悪く思つてお呉れでない、ヨ、ヨ和七さん、何故無言てお在のだへ、夫ともにまだ腹が癒えずば、私を擲つとも敲くともしてお呉れなネエ　和「モシ、めつさうな事を被仰います、貴女は御主人さまでございますものを、そんな勿體ない事を致すと側が當ります　閑「アレサ、私はお前の女房の氣で居るのだものを、もつと辭を存在に言つて、名をもお蘭何様爲なと呼捨に言つてお呉れの方が嬉しいのだヨ　和「とんだ事を被仰います、人の聞く手前もあつたものでございますに、何様してそんな口上が申されますものか　閑「サア夫だから人前では丁寧に言つても、今日のやうにさし向の時は、私の言ふやうにお言ひといふ事サ　和「ヘイ、夫はマア先へ寄つたら段々に申しても見ませうが、只今の處では何だか不躾らしくッて申しにくうございます、夫はさうとお内儀さん、他に御用がなくば一寸逢老町まで往つて參りたうございます　閑「五兵衛どんの所へかへ　和「ヘイ　閑「そりやア宜いけれども、最う今に日が暮れるから明日にお爲なネエ　和「イエ、畳はお宿の御用もございますし、其上急に頼まれました事を忘れて居たのでございますから、是非參らないでは義理が悪うございます、近い所だから日が暮れても構ひません　閑「急な用なら御出だけれども、そんな事をかこつけに情人廻りでもするのではないかへ、泊つて來ると聞かないヨ　和「何様致しまして、泊るどころではございません、遅くも四時には急度歸りますから、少しの間お隙を下さいましト漸うにして側を離れ、羽織引掛け裏口より、そこ〳〵にして出行く折しも、向より來る八百屋傳八、何か氣のせく様子にて、和七と袖を摺違つて通れど心づかざる體にて、お蘭の住居へ這入りしありさま、合點ゆかずと思ふゆゑ、和七も其儘小戻りして、勝手知つたる庭口より足を爪立ちて忍入り、縁先近く身をかゞめて、様子いかにと立聞くとも、内には更に知らざりけん、傳八は勝手より奥の一間に赴くを、お蘭は見るよりうち笑みて　閑「オヤ、誰だと思つたら傳八どん、何をそんなに急いでお出のだか、息をはずませてサ、まアお湯でも一ッお飲りヨト鐵瓶の湯を酌いで出せば　傳「ヘイ有難うございます、大變に急いだら此寒空に汗をかきましたト言ひながら茶碗の湯を一口呑んで　傳「トキニお内儀さん、私が周章て來たのも他ではございません、兼てお前さんのお頼みだから、若も鹽谷の浪客が何所ぞに忍んで居て、高野様を敵とでも覘ひは爲まいかと色々手を廻して聞きました處が、近比石町の貸座敷へ、花洛から下つたといふ武士が逗留を爲て居ますが、何でも言立は、宮方の御貸附の御用で下つて來たと申すさうでございますけれども、實は鹽谷の浪人で、其内に大星といふ人も交つて居るらしいが、名を變へて居る様子だから分りかねると咄して聞せた人がございますから、夫が實正なら大變だが、夫程の事を傳竹さまから知らせておよこしなさらない筈がない、若飛脚屋にお手紙が滯つて居る事もあらうかと思ひまして、例の飛脚屋へ往つて聞きますと、丁度昨日着いた御狀があると言つて渡しましたから、扨こそと思つて宙を飛ぶやうにして參りました、速く封を切つて御覽じましト錢財布の中へ入れて來たる件の手紙をさし出せば、お蘭の許へ傳竹よりの名當を爲たる狀なるゆゑに急ぎ認めさし送る、委細の事は松原様への書面に認め置いたれば、早々御屆け下さるべしとて、別に松原左仲へ送る一封の書狀を卷込めあるにぞ　閑「オヤ〳〵、餘程急いで書いたと見えて、私の所へは何とも言つてよこさないから分らないけれど、夫ちやアお前の聞いた石町の一件に違ないヨ、此間から叔父さん（傳竹はおらんの叔父なるゆゑかく

いふなるべし）の所から、大星親子は思つたとは大違の、箸にも棒にもかゝらない阿房者だと言つてよこしたのに、お屋敷から花洛へ出してある間者とやらも歸つて來て、中々敵討なんぞを爲さうな樣子も見えないと言ふので、近比ぢやア御親類から來て居たお附人も段々減つて、高野の殿樣をはじめ松原樣も、最う敵討はないと大安心をなすッて、御用心も餘程薄くなつた樣子だのに、其處を附込んで萬一その浪人がどんなかことをすると大騷動だネエ、何にしても此手紙を速く松原樣へ進げたいものだが、今日はあいにく內中の者がみんな留守だのに、たッた今和七さで宿へ遣つて呉れろと言つて出て往つたから、內を明けて私が往く事にもいかないから、迎もの事の御苦勞序に、松原さまで持つて往つて屆けて進げてお呉れでないか、お前は常からお出入ではあるし、內證の事を頼んだ譯も左仲樣が御存じだから、私も同樣に思召してお在なさるに違ないヨ　傳「ヘイ、左樣なら私が持つて往つて、お前さんがお留守がないのでお出なさることの出來ない事まで申しませうが、夫にしてもお內儀さんエ、私が是程大汗になつて駈けて歩行て、石町の譯も聞出し、此手紙も取つて來たのでございますから、何卒骨折丈の事はお前さんから松原樣へ被仰つて、一元手にも在付くやうにお願ひ申します、何れ夫が先立たないでは骨も折られませんから　閑「そりやア言はずと承知だヨ、その手紙を持つて往つたら、大かた左仲さまが只はお歸しなさりは爲まい、急度夫相應な事はなさらうハネト言はれて歡ぶ傳八が、大事の手紙とかの一封を以前の財布の中へ入れ、その儘首へ引掛けて、暇乞さへそこ〳〵に、又裏口より出往くを、和七は始終立聞して、扨こそ違はぬ一大事、譯は知らねど那一通を敵に渡さば味方の手違、然だ〳〵と點頭きつゝ、跡追つかけて走往きける。（卷の四十五終）

いろは文庫第十六編序

僕年來文庫の裡へ、いろは文字にて抄錄しつ、秘置きたりし義黨の傳の、耳新しく思ひし事は、はや大方は綴り盡して、編むべき條の拂底なるを、コレ兄さんあるぞへと、側から囁く阿輕も居らねば、憶ひ付きたる延鋭に、讀取らすべき文章さへ、ろくの夫ならねど、果敢どり兼ねたる長案じも、凝つては思案にあたはず、と是をちよつくら一寸斯うやつて、と諫六小鰐の小傳に、浮世めかせし艶語を演べしも、こいつはえらいえら趣向、とお笑を取る迄にはいたらず、遲いと酒を飲すぞへ、と傍で書房に促され、風雅でもなく洒落でもなく、詮方なしに佗びつゝ、記しつ。

東都作者　爲永春水

正史質傳 いろは文庫 巻之四十六

第九十一回

偖も和七は傳八お蘭の囁く體を洩聞きて、うち駭きつ其儘に、周章ふためき傳八が、跡追つかけて走往くを、夫と知らねど傳八も、心急ぎのせらるゝ儘に足を速あて往きかゝる、處も高野の長屋下、日もはや入りて薄暗がり、折しも四邊に人も來ざれば、天の與と悅ぶ和七、窺ひ寄りつゝ後より拳を堅めて突出す、急所の當身に傳八は、何かはもつてたまるべき、ウンと仰けに仆るゝを、爲すましたりとさし寄つて、傳八が懷なる例の財布を奪取り、跡をも見ずして逃去りしが、薄暗がりの事なれば幸にして人も咎めず、終にその場を逃延びて逢老町に走りゆき、頓て五兵衛に對面なし、ありし樣子を物語りしうへ、件の書狀を取出し、封をはがして披き見るに、

以飛札申述候、兼て内々御賴に付、鹽谷浪人の樣子無油斷探索致居り候處、大星事は此程伊勢參宮より東國へと罷越し、其外鹽谷家の浪士共所々に住居致し候面々、何國へ立退申候哉、京地には壹人も相見不申、此上之御心遣と存候間、不敢取御知らせ申上候、猶又委敷樣子聞出し候はゞ早速後便可申上候、何も差急ぎ要用のみ得御意度如此御座候、恐々謹言。

十二月二日　　藪井備竹

松原左仲樣

ト謂むより二個はうち駭きたる、中にも五兵衛は吐息をつき　五「イヤ最う斯いふ事があるから油斷も透もならないのだ、併し貴公のはたらきで、此書狀が松原とやらの手に渡らない先に這方へ取揚げたのは、天道我々の忠義を憐み給ふと言ふものだらう　和「ホンニ然だらうネエ、兼て此備竹といふ奴は師直の間者になつて、ある事ない事注進をするといふ事は元老のお咄でも聞いたし、又お蘭や傳八がその仲繼をするといふ事も、薄々勘付いて居たから、若やと思つて立聞を爲たのが實に神の助サ　五「マア何に爲ても此手紙を大星氏の御覽に入れて、此うへの御賢慮を伺ふが宜からうぢやないか　和「夫は素よりの事だが、又つくづくと考へて見ると、那傳八が大事の手紙を取られた事を左仲が聞いたら、手紙のないので事柄は分解ないでも、備竹から火急に知らせてよこしたのは、何か仔細のある事に違ないと、折角少し油斷を爲かけたところを、元より嚴重に用心をされでもすると、本意を遂ぐる邪魔になるではあるまいか　五「なる程そりやア貴公の言ふ通りだが、今となつて用心をさせないやうにする工夫もあるまいぢやアないか、夫とも他に妙計でもあれば重畳だが　和「妙計と言ふではないが、此手紙を宜くお見なさい、京地には壹人も相見え不申、此上之御心遣と存候間と書いてある、此之の字をば者の字に直し、御の字を無の字に書き直すと、京地には壹人も相見え不申、此上者無心遣と存候間と讀めますだらう、斯直した手紙を元の通りに封じて傳八に返して遣ると、左仲が見て是では安心だと、いよ〳〵油斷をするは必定、其處へ附込んで本望を遂げたら、首尾よく成就爲やうかと思はれますのが、餘程六ケ敷さうな譯だネエ　和「ナニそりやア爲やうがありますから、お案じなさる事はありません、

夫にしても速く爲ないと其方便が出來ないから、一寸私が細工をして見ませうト言ひながら硯箱を引寄せて、件の二字を書直すに、神佛忠義を感納ありてか、筆法と言ひ墨色まで、直せし文字とは更に見えず、素より書いたるごとくなる故、五兵衛は見つゝ横手に打ち　五「イヤ妙計と言ひお手際といひ、實に是には恐入つた、序に元老へ御目に懸ける爲に、寫を一通書いてお呉んなせへト言はれて和七は一議に及ばず、件の手紙をさら〳〵と寫取りしを五兵衛に渡し、又這方なる一通を元の通りに堅く封じ、財布と倶に懐中なし　和「夫ぢやア私は跡の譯があるから直にお暇と爲ませうから、元老にその寫をお目に懸けて、又も傭竹から密書の來ないうちに、速く討入の御評議をお取極めなさるやうに申上げて下さいましト言捨て稍立ちあがり、足を速めて歸りゆく、恁るべしとは毫知らぬお鬮は襖に傳八をもて傭竹よりの書狀を送れば、翌日はかならず左仲が許より厚き謝禮の來るべし、今宵は折から寒さも強し、先前祝に酒買うて、和七が戻らば例の通り渠を相手に樂まんと肴拵へなどしつゝ、待てども和七は戻り來ず、那程言うて遣つたれば、泊つて來やう筈はないが、夫とも何處ぞに面白い穴でも出來て歸らぬのかと、獨り氣を揉み居るところへ、勝手口より傳八があわたゞし氣に入り來りしが、挨拶もせずさし俯向いて溜息ついて居る體を、お鬮は見つゝ訝しげに　鬮「オヤ傳八どん、お前まア往なり這入つて物も言はないで、只ならない顔をしておいでだが鹽梅でも惡いのか、又は何樣ぞお爲のかへ、定めて松原樣がお歡びで私の所へもお禮でもお遣はしのかへ、アレサ無言て居ては分解ない、私も色々他に氣の揉める事のある所だから、速く咄してお聞せなト言はれて漸う顔をあげ　傳「イヤ最うお前さんにお目に懸るのも面目ないやうでございますが、寔にとんだ目に逢ひました　鬮「エ、とんだめとは何樣いふ目に逢つたのだへ　傳「然ればサ、聞いてお呉んなせへ、先刻此お内を出て松原樣へと急いで往く途中、高野樣のお長屋下で、誰とも知れず後から私に當身をくはせた者がありましたから、ウンと言つて仆れたまでは覺えて居ましたが、夫からは丸で夢中のやうな心持で居ると、頓ての事に遠くで私の名を呼ぶ聲が耳へ這入つて氣が付いて見ると、私の内で長屋の衆が大勢來て、水だの灸だの氣付だのと騒いで居るから、樣子を聞くと、私が往來端に仆れて居たのを、近所の人が見付けて内へ荷ぎ込んで、色々介抱をして呉れたのだと言ひますから、ヤレ嬉しや、命が助つたのかと思ふに就けて、探つて見るに財布がありませんから、肝を潰して段々の樣子を咄し、中の錢金は詮方がないが、大事の手紙を入れて置いたのをなくしては、賴まれた人に濟まないと言ふのを聞いて、長屋の者も氣の毒に思ひ、俄に手分をして尋ねて呉れましたけれども、彼是と時刻も過ぎた事ではあり、其處等に落ちて居やう譯もなく、盜賊の行方は猶知れず、よし又其處等に居た處が、どんな奴が爲た事だか、形風俗をも見留めて置かないのだから、捕へて吟味をする當もなく、實に私は氣拔の爲た樣にがツかり爲ましたが、此事をお前さんにお知らせ申さないでは濟まないと思つて、駈出しては來ましたが、あんまり馬鹿なめに逢ひましたのだから、言出しかねて居りましたト言ふにお鬮は惚りして　鬮「そりやアまア大變な事をお爲だネエ、どんな事が書いてあつたか知らないが、大急ぎで贈越したやうに私の處へ言つて來て見ると、何れ一大事を知らせてよこしたに違ないのに、夫が屆かないでは松原樣の御心配なさるは素より、萬一また那手紙が何樣かいふ傳手で、鹽谷浪人の手にでも這入ると猶の事不都合だから、最う一遍尋ねて見る事は出來まいか、夫がならずば京都へ急飛脚でも立うて、手紙の樣子を聞きに遣るより他に詮方はないが、何にしてもお前にも似合はない事をお爲だネエト言はれて、いよ〳〵傳八は當惑面にあらはれつゝ、天窓を掻く

より外はなく、須臾回答もならざりけり。

第九十二回

恁る處へ息せきと和七は急ぎ立歸りしが、傳八が居る體を見て素知らぬ顔にて内へ入り　和「へイ只今歸りました、五兵衛も宜しく申上げます　閑「オヤ和七お歸りか、思ひのほか速かつたネエ　和「へイ、イエ大きに急ぎましたが、つひ遲くなりましたト言ひながら傍を見返り　和「イヤ傳八さんお久しいネ、何樣だへ相替らず儲かるかネ　傳「イエ儲かる所ではない、とんだ目に逢ひました　和「ナニとんだ目に逢つたとは何樣爲たのだへト問返されて心付き　傳「ナニつまらない事でお咄にもならない譯サ　和「然うかネ、夫に爲ちやア何だか顔の色も常と變つて居て、餘程心配な事でもあるやうに思はれるヨ、心安くする私に隠しなさるのは怨だせ、併し斯は言ふものゝ、何か内々お咄の處へ心なく歸つて參つて、お邪魔になつては濟みませんから、私は一寸藥湯へでも這入つて參りませうトお蘭の方を尻目にかけ、氣をもたせつゝ立たんとすれば　閑「アレサ何もお前が居て邪魔だといふ事ではないヨ、全體傳八どんが惡いヨ、隠さずといゝ事をかくすやうにお言ひだから、此人がをかしく思ふのだハネ、夫ぢやア私が咄すからお聞きヨ、實はこの傳八さんが今がた途中で財布を取られたハネ　和「イヤア、夫は大變な事を爲なすツたネ、金でもたんと入つて居たのかへ　傳「ナアニ、小玉が五ツばかりと錢が七八百も這入つて居ましたらう　和「夫ぢやア何時までもそんなに愚痴らしく思つて居る事もない、厄落しを爲たとおもへば宜いぢやアないか　傳「ナニ錢金計りなら構やア爲ませんが、其財布の中へ大事な手紙を入れて置いたのを取られたから、預つた人に何分濟まない譯だから、

夫でこんなに心配を爲ますのサト言ふに和七はうち案じ　和「ヤ、其お咄で思出した事があります、今私が逢老町から歸りがけに、手拭で顔を隠した怪しい男が、何だか財布のやうな物を懐から出して、中の錢ばかり出して跡の財布を通水の溝へ投込むのを、月の明でちらりと見ましたが、私の見た樣子を其男も氣が付いたか、あわてた樣子をして横町へ逃込んで仕舞つたが、萬一お前の取られた財布ぢやアなかつたか知らん　傳「ハテネ、夫は耳よりなお咄だが、そして其財布の縞柄はどんなだか覚えておいでなさるかネ　和「ナニ夜の事ではあるし、氣を留めて見たのでないから、縞柄までは見留めなんだが、投込んだ溝は覚えて居るから、むだと思つて何なら往つて尋ねてお見なさへ　傳「左樣サネエ、何樣いたした物だか知らんら、むだでも往つて見るが宜いハネ、和七、お前が投込んだところを知つて居るなら、御苦勞ながら同道に往つてお遣りな　和「エ、〳〵、遠くもない處でございますから參りませうとも　傳「夫ぢやアお氣の毒だけれども往つてお呉んなさるか　和「ナニ氣の毒も何も入るものぢやない、其處で傳八さん、溝の中を探すのだから挑灯を二人が壹張づゝ持つて、杖の長いやうな物を一本持つて往くが宜いせト俄に二個は仕度調へ、和七が案内に傳八は逢老町の方へといたり　傳「和七さんまだ先かネ　和「左樣サネト少し考へる振をして入れて、那方這方と尋ねながら　傳「オット見付けた　和「あつたかネ　傳「イヤア大間違だ、骨を折つて棒の先へ引つかけたら、財布ではなくツて古草鞋だやつサ　和「何を云ふのだハ、、、ト、此うち和七は懐より例の財布を取出し、傳八の氣の付かぬやうに件の溝へ投込み置き、其身もともに捜す體をなしながら　和「傳

さん爰に何かあるから、其棒を持つて來なせへ　傳「ドレ〳〵ト言ひながら挑灯の火にすかし見て　傳「違へね へ、こりやア本物のやうに見える　和「夫ぢやア吾儕が灯を見せるから、お前其棒で取んなせへト言ひつゝ挑灯をさし出せば、傳八は兎角して棒の先に引掛けつゝ引揚げたるをうち詠め　傳「有難へ吾儕の財布だ、錢と小玉はなくなつたけれども、大事な手紙が這入つて居たから、是で言譯は立つと言ふものだ、併しぐッすり溝の水で濡れたから始末においねへ　和「假令濡れやうが、あつたのが見付物ぢやアないか、其儘そつと破れないやうに持つて歸つて乾すが宜いはな、夫にしてもそんなに大事な手紙を誰に事託つたのだへ　傳「エ、ナニこりやア何サ　和「コウ、そんなに深く隱す事もないぢやないか、吾儕が見付けて知らせざア何樣爲さる　傳「夫も然サノウ、實は他人に咄の出來ない譯だが、此手紙は花洛から來たので、高野樣のお屋敷の松原左仲さまへ急に屆けないぢやアならないノサ　傳「ハ、ア、夫ぢやア何か內證の御用と見えるネ　和「マアそんな譯だらう　傳「ヘン熟くするネ、內證の事ぢやア定めてずッしりお禮があるだらう、些たア吾儕の見付賃に其譯口がおりさうな物だ　傳「ナニ多分の禮は貰はれるといふのではないが、何れにしてもお前のお蔭で此手紙が手に這入つたのだから、其內酒でも買ひやせうト咄しながらに歩行ほどに、頓てお蘭の家にいたれば、待ちかね居たりしお蘭は立出で　蘭「何樣だへ知れたかへ　傳「御安心なすッて下さいまし、宜い鹽梅に見付かりましから持つて參りました　蘭「夫は宜かつたネエ、是といふのも和七のお蔭だから宜くお禮をお言ひヨ、和七は別して御苦勞だつたネエ、お前が寒からうと思つたから、湯豆腐を拵へてお燗をつけるばかりにしてあるヨ　和「夫は有難うございました、サア傳八さん、お前も寒かつたらうから火鉢の傍へ寄んなせへ　傳「エ、私は此手紙が手に入つたからは、些も速く松原樣へ持つて參りませう、併しこんなに濡れて居ては始末が惡いから、少しお火をお借りまうして乾して參りませうト件の手紙を取出し、火鉢へかざしてあぶるを見て　蘭「オヤ、夫でも濡れたばかりで封じめが破れなかつたから宜かつたネエ、大體に上が乾いたら、どんな急用だか知れないから、些も速く屆けて進げるが宜いヨト言はれて傳八一議に及ばず、生乾きせし書狀を携へ松原方へ赴きしが、あからさまに言ふときは、其身の麁忽を叱られて褒美の邪魔になりもやせんと、よしなき事まで考へしかば、是まで持つて參る途中つひ水溜へ取り落し濡せしよしに言ひ拵ゆれば、左仲は疑ふ心なければ、濡せし事を咎めもせず、おし開きつゝ讀下すに、大星は伊勢參宮より東國へといたり、其外鹽谷浪人は京地に一個も居らずとあるは、合點のゆかぬ事ながら、此上は心遣なくと傭竹から言送りしからは、さのみ氣遣ふ事もあるまじと主人師直にも斯と知らせ、いよ〳〵用心を等閑しとぞ、然ればまた大星は松屋五兵衛（相原江助の變名）が持參せし、かの和七（倉橋金助の變名）の寫をつくづくと讀下し手を打つて驚歎なし、誠に藪井傭竹といふ者は、よくも〳〵我輩の進退を探索して斯內通はなせるものかな、併しながら倉橋が卽智にてかの一通を奪ひしのみか、加筆なして文意を變じ、敵に油斷をさせしこと天晴の働なり、此上は日を延べがたしとて義士の面々評議のうへ、終に其月十四日の討入とはなりしなり。

（卷の四十六終）

正史實傳 いろは文庫 巻之四十七

第九十三回

偖も極月十四日、かの討入の夜にいたり、例の八百や傳八は四辺で火事といふ聲に駭き覺めつゝ起出で見るに、近所に火の手も見えねども、高野の屋敷のうちと覺しく、泣叫ぶ聲討合ふ物音、最すさまじく聞ゆるにぞ、扨は鹽屋浪人の夜討に亂入せしならん、乗て左仲が言付には、屋敷に事のありと聞かば、御親類の御屋形へ注進せよとの頼もあれば、此事速く注進せば一聚の褒美もあらんと、直様草鞋引掛けて一もくさんに駈出し、三町ばかりも行きしと思へば、黒裝束せし武士が、忽地四五人現はれ出て、前後左右に立塞り

武士「ヤイ待てト言はれて恟り、傳八は其儘大地に平太張りて　傳「御免なさいまし　武士「何だ、御免なさいと言ふからは胡亂な奴だな　傳「イエ〳〵、全く左様な者ではございません、高野様の御門前に住居を致す八百屋でございます　武士「名は何と申す　傳「ヘイ、傳八とまうします　武士「其又八百屋があわたゞしく何れへ參るのだ　傳「エ　武士「何處へ往くのだといふのだ　傳「エ、、アノウ何でございます、オ、それ〳〵神田の市へ買出しに參ります　武士「馬鹿を言へ、朝市へ往くには刻限もあつたものだに、何時だと思ふまだ眞夜中だぞ、殊に買出しに參るなら野菜籠でも荷いで往きさうな物だのに、空手で往くとは怪しいぞよ　傳「エ、ナニ籠も問屋に預けてございます、夫に少し急ぎの品を注文されましたから　武士「何様やら疑はしい詞の端

端、併し費用で參るといふを差留めるも如何故、神田の青物問屋まで此方どもが送つて遣はさう　傳「イエ、ナニ夫には及びません　武士「イヤ其方は送られずと宜からうが、此方に不安心な事があるからだト四五人のうち兩人が傳八が左右に附添ひ、さア〳〵參れと急がすにぞ、思ひがけなき人に送られ、往く所へも往きがたく、是非なく神田の多町にいたり、得意の問屋を呼起し、門明けさせて内に這入れば、かの兩人の武士も俱に見世先へ進入り　武士「此者は此家に青物の買出しに參るとまうすが、些疑はしい仔細がある故、態々我々が送つて來たれば、夜の内は其方店へ疑と預け置くぞ、尤夜の明けしうへは何方へ遣すとも勝手にいたすが宜いが、夜の間は張番して、門三寸も出す事は相ならぬぞト亭主に嚴しく言置きて、二個はその儘立去りける、什麼傳八をさゝへ留めたる黒裝束せし者どもは、是いかなる輩なりけん、既に初編に記せしごとく、義士討入のありし時、黒裝束をせし面々が高野の屋敷の四方を固め、緣者へ通路の隔をなして義士の忠戰を助けし事、若大星等が仕損じなば、一二の目を討たんと扣へしといふ奥野將監等が類なるか、又は織部安平が門弟なりとの説もあり、本家の加勢なりともいふ、何れが是なるか考ふべし、然れば多町の問屋にては、とんだ人をば預けられ、亭主は大きに心を痛め、先傳八に仔細を問へど、一大事故傳八も明白には譯を語らず、程よくその場を言ひこしらゆれば、亭主も不審に思へども、嚴しく二個の武士より言付けられし事なれば、夜の間は寐もやらで傳八を張番なし、夜明けて出しやりしとぞ、然れば義士等亂入して師直は討取られ、高野の家名斷絶したれば、傳八は大切なる出入屋敷を失うて、家業にはなれしごとくなるゆゑ、是より段々間が悪くなり、其上永の大病を煩ひ、世渡る事のならざるより、終に乞食となりさがり、道路に仆れ臥せしといふ、偖またお閨は、戀しと思ひし和七は義士の一人にて、本名倉橋

全助と傳聞きしに驚くのみか、お蘭の夫が世にある時より、高野の屋敷の金元をして、多くの金を貸込み置きしに、此度の騒動より家斷絶に及びしかば、是まで貸したる金銀は一文にても戻る事なく、其金とても總てみな自己が金といふにはあらで、その中には筋惡き金などを引出して、口入なしたる事などあれば、貸方よりは強く促られ、是非なく家を分散して、しがなき暮しに落ちぶれしが、終に其處にも住みかねて、果は如何なる死を遂げたりけん往方知れずなりしとなん、基此お蘭は身行宜からで、夫が世にあるときよりして密淫など爲たりしが、死したる後はうち晴れて、例の和七がごとくなる男妾に類せし者を幾人となく家に引入れ、其うへ高利の金を貸して諸人の難儀を顧ず、促るに用捨なかりしのみか、松原左仲に頼まれて、出入屋敷の事とはいへど、利慾のために種々に義士の本意をさまたげんとせし、夫等の陰惡身に報いて斯零落はなしたるなるべし、ひとり藪井備竹のみ終るところを定かに知らねど、渠はお蘭の親族なりとて、由緣もなき師直より褒美の欲しさに間者となり、忠義無二なる大星等がある事ないこと內通せし報のあらで果つべきか、傳八お蘭が身の終に引競べて察ひ見るに、行末榮えんやうはあるまじ。

第九十四回

茲にまた義士同盟の一豪傑に近松諫六といふ者あり、基は江州の產なりしが、後に鹽谷家の臣とはなりたり、その召仕に甚三郎とて又是稀なる忠僕有りけり、然れば鹽谷家滅亡して諫六は浪々せしより、頓て東に走下り、保久町の貸座敷に住居、森清助と變名して敵の樣子を探り居しが、折しも極月十二日、ちらつく雪の門口にて、今割り仕舞ひし薪をば、甚三郎があくせくと取片附けて居る處へ、年頃二十歳ばかりにて、水際立ちて美しき婦多川風の唄女を跡に待たせて、箱廻しの喜八といへるが莞爾〳〵爲ながら　喜「イヤ甚三さん、寒い物が降出して來やした、よく例もおはたらきなさるネ、トキニ旦那は御宿で被爲入ますかト言ふを見返る甚三郎が、苦々しき顏付にて　甚「アイ、旦那は御在宿だが、此師走の算日に、お前がたに構つておいでなさるお隙はないから、今日は歸つて春にでもなつて來なさい　喜「そりやア然でもありやせうが、御用多のお中をお手間を取らせる譯ではございません、一寸御目に懸りさへすれば宜いのだから、何樣か旦那へ其譯を　甚「ならないヨ、此野狐めらが、旦那が少しお宿におみ足が落付くかと思へば出掛けて來て、又化して誘出さうとしても、此甚三がお附きまうして居るうちは、奴等が勝手に大事の旦那をされて堪るものか、ト腹立まぎれの大聲を奥に居たりし、諫六が聞付けて門口へ立出で　諫「誰だと思つたら喜八か　喜「イヤ旦那、先御機嫌宜しうございましてたから、一寸雪中の御見舞に　諫「夫はよく來て呉れて辱い、さア〳〵這方へ上るが宜い　喜「へイ〳〵左樣なら御免なせへ、さア〳〵小露さん、旦那のおゆるしが出たから遠慮はねへ、大びらでお這入んなせへト甚三を尻目に懸けながら、小露と俱に奥へ通るを、甚三郎も主人の前ゆゑさすがにさゝへ止めかねて、獨り何やら口の中にてぶつ〳〵叱言を言ひながら、以前の薪を片付けて居る、奥には諫六機嫌よげに　諫「宜く來て呉れたノウ、夫は宜いが今門口で何を言合つて居たのだ　喜「ヘイ、ナニ例の堅藏先生が　諫「アハ、、、然か困つた奴だ、併し那奴は惡堅いばかりで、氣に毒のない正直者だから、何を言つても氣に懸けないが宜いはなト言ひながら、俄に手紙を一通さら〳〵と認め、甚三郎を呼んで　諫「大儀ながら此手紙、本庄の織部氏まで持つて往つて返事を取つて來やれ、然のみ急ぐ事でもないから他に手前の用でもあるなら、道寄

りをして隨分遲く歸つても大事ないから、緩りと爲て來るが宜いト言はれて甚三は少し考へ　甚「へイ、御用とございますれば御使には參りませうが、私の居ない留守に又此野狐どもにたぶらかされて、むだ金でもお遣ひなさらない樣に被成まし、世間は節季だとまうして騷いで居りますのに、如何に御浪宅でお天窓の推手がないとまうしまして、少しは御勘辨なさるが宜しうございませう　諫「宜いはサ、何も心配には及ばぬから往つて參れト言はれて、是非なく甚三郎は澁々ながら立上りしが、再び其座へ立戻りて　甚「旦那さま、何れ御酒を召上るでございませうが、外へ出て飲るよりお宿の方が浮雲氣がございません、何なら私が往きがけに言付けて參りませうか　諫「然ヨノウ、夫では酒と他に肴を三品ばかり見繕はせて來るが宜い　甚「へイ〳〵ト言ひながら、勝手より酒の道具を次の間まで運出し、酒さへ來れば何時にても燗の出來る樣に做し置き、竹の子笠に赤合羽、雪踏分けて出て往く、跡を喜八が見送りて　喜「夫でも宜く氣が付いて、御酒の道具迄出して往つたうちが可愛らしい　諫「あゝ、言ふ氣立の奴だから遣つて居るノヨ、偖是で邪魔は拂つたが、妙な譯で小露を供をして來たと言つたのは、何樣した譯だのト問はれて小露は莞爾笑ひ　小「ナアニネ、妙な譯といふ程の事でもありませんが、私やア今日脇にお座敷があつて佐屋町の河岸まで船で來ましたノサ、然すると急に雪が降出して來たので、其お座敷があぶれになりましたから、其處でネエ喜八どん、　喜「左樣サ、實は旦那の前だが、此間からさッぱり貴公がお在のないのを此お孃が苦勞にして、何樣なすッたのだか、便が聞きたい物だと言ひ拔いて御出の處だから、今日のあぶれを幸に此お宅をお尋ねまうして、お留守なら詮方がないが、若お宿なら一寸でもお目に懸つてお出なさるが宜いと、私が勸めてお連れまうしましたノサ　小「私やア先刻あの人が憤怒つた樣な顏をして居たから、寔に怖かつたけれ共、推を強く爲て居たんだヨ、今日斯いふ味い都合でお目に懸られたのは實正に喜八どんのお蔭だヨ　諫「なる程是は妙な都合だつた、併し此雪に佐屋町から爰まで廻り道は實に信切な事であつた、ト鼻紙袋から貳分金を一ツ紙に捻つて遣れば　喜「へイ有難う、併し是では　諫「ナニサ、勘いが莫でも買つて呉んな　喜「左樣なら、一寸參つて後程お迎に上りますから、小露さんは其内旦那に思入れ惡痴でも竝立つてお聞せなせへまし　小「オヤ私やア惡痴を言ひに來たんぢやアありませんヨ　喜「ホイ是は出そこないました　諫「ハ、、、、ミア喜八、今酒が來るから、一盃氣を付けて用事があるなら足しに往くが宜いではないか　喜「なる程、御酒と聞いては見逃しても參られますまいか　小「あゝ意地がきたないのだヨ、直に腰が拔けるのだものを、夫だからお内儀さんが叱言を言ふ筈だネエ、ホ、、、、　喜「直に今の意趣返しをされやしたト咄のうちに酒肴も來れば、喜八は頓て燗をつけ、是より姑く酒盛に互の雜談種々ありて、はや微醉になりし頃、程よく喜八はその座を外し、用あるふりにて立つて行く、跡は二個が差向の、遠慮なければ小露はさし寄り　小「エ、清さん（諫六が變名を森清助といへばなり）お前はんはあんまりでありますヨ、何ウか比良清でお目に懸つたッきり、呼んでお呉んなさらないから、其後も人を賴んで手紙を進げた事も幾度だか知らませんのに、一度の返事も贈越してお呉んなはらないから、どんなに氣を揉んだとお思ひなはい、今日は宜い鹽梅に佐屋町まで來て座敷があぶれになつたから、雪の降るのに廻り道は氣の毒でありましたけれども、あんまり久しくお目に懸らないから、何樣ぞしておいでなはるのぢやアないかと、喜八どんを賴んで來たのでありますヨ、氣まづい事を言ふ樣でありますが ネ、私の推量かは知らないが、何でも何處へか面白い所がお在んな

はるのだヨ　諫「さア其恨も無理ではないが、何を言ふにも節季の日になつて氣樂らしく遊び歩行も出來ず、その上些と譯があつて、品に依ると急に旅へ立たないぢやアならないので、種々用があつたから　小「エ、旅へお出でなはるとへ　諫「そんなに仰山に肝を潰さないでも宜いはな　小「夫だつて肝が潰れやうぢやアありませんか、出拔にそんな事をお言ひなはるのだものを、お前はんの氣ぢやア、私が今日來なんだら、沙汰なしに旅へ立つて仕舞はうと思つておいでのに遲ないヨ、人の氣も知らないやうに、夫ぢやア私がこんなに苦勞をする甲斐がないぢやアありませんか　諫「ナニいよ〳〵出立と極れば、おぬしにも逢つて暇乞をするつもりで居たノサ　小「否だネエ、そして遠い處へでもお出ので、急にお歸りにならないんでありますかへ　諫「まアあんまり近い所でもないから、先の樣子に寄つたら是切り歸られなくなるか、何にしても早急に歸る事にはなるまいヨ　小「アレサ、心細い事をお言ひなはるヨ、若是切にお前はんに逢はれなくなつたら、私やア何樣爲やうネエト少し泣聲になつて　小「後生だから、旅へ立つ事なんぞは止にしてお吳んなはいなければ、一生斯しても居られないだらうぢやアないか　諫「此身だつて見ず知らずの國へ往きたくもないけれど、知つての通りの浪人暮し、何れ何處へか主取を爲るぢやありませんか　諫「氣の狹い事を言つたものだ、此身ばかり男でもあるまい、他に宜い旦那を持つといふものか、夫でなくば是から生涯大丈夫といふ男を見立てゝ、夫婦になつて身をかためるが宜いはな　小「そりやア然でもありませうけれども、私が困「オヤまア氣樂な事を言つてお在なはるヨ、私やアお前はんに見捨てられると、生きちやア居ませんヨト言ひつゝワツト泣出せば、よしなき事を言出せしともてあましたか諫六が、さま〴〵に言ひなしてすかし慰め居る所へ、姑くあつて箱廻しの喜八は門より入來り、次の間にて二ツ三ツ咳拂して、中仕切の襖を明けつゝ顏さし出し　喜「イヤア、何だか泣いたり笑つたり千話狂ひの御最中、些お邪魔いかはぞんじませんが、雪は段々降つて來る、歸りの道も心遣ひ、其上あんまり遲くなつちやア都合の惡い譯もありやすから、時分を見計つてお迎に參りやした　小「何だネ喜八どん、宜い氣な事ばかりお言ひでないヨ、私やア此内は歸らないのだヨ　喜「是はしたり、又そんなやんちやんを言つて、私を困らせちやアいけませんゼ　小「夫だつて淸さんが遠い國へ往つて、最う逢はれないとお言ひだものを　辛「エ、夫は實正でござざいますか、イヤ〳〵然ではありやすめへ、是はてツきり旦那がお前さんに氣を採せて、千話の種に爲やうと思しめして、からかひに被仰つたに違はございません、ネエ旦那爾でございませう　諫「ナニ、實に旅立をする積ではあるが、まだしツかり何時と極つた事でもないノサト言ひながら又紙入より、駕賃より餘程餘分に金を出せしを紙に包みて　諫「小僧、おぬしの恨も無理とは思はないが、這處で彼是言つて居ると駕屋も難儀だのに、第一深切に連れて來て吳れた喜八が迷惑をすると言ふものだ、何れにも此身が今夜か、夫が間違へば明日は急度和歌町へ往つて、おぬしの腹に落付くやうに咄をするから、今日は世話をやかせずと歸る事とするが宜い、是はほんの駕賃丈だが持つて往つて吳んなト包みし金を手に握らすれば　小「私やア否でありますヨ、そんな氣休をお言ひなすツても、來てお吳れだか何だか當になりますものかネ　諫「ナニサ、おぬしを出拔いて往く位なら、旅へ立つといふ事を咄すものかな、ノウ喜八積つて見ても知れさうなものではないか　喜「左樣〳〵、何れにも旦那がお出なさると被仰るからは間違もありやすまい、丁度お燗も付いて居やすから、機嫌を直して一つ飲つて、中直りに旦那へお上げなせへ、私は此茶碗で一盃いたゞけば、雪の中も苦にはなりやせんト小僧に酒をついでやり、其身も手酌でグツト引つかけ、猶立兼ねて遊々する小僧

の手を取り引立てつゝ、想にうち乗せ出行きける。

第九十五回

什麼近松諫六は、與谷家繁昌のその頃は、一藩にても指を折らるゝ財主にてありしかば、浪々の後までも貯の金渺からず、然れば同志の面々の困窮なせし躍には、財を分ちて甲乙と助けし者も多かりしが、諫六は過ぎし頃ふと朋友の勸により、婦多川なる八幡へ參詣なせしが喰付となり、例の小露に馴染めしに、素より金には乏しからず、其うへ今にも時至らば、命を捨てる覺悟の身にて、永くも居らぬ浮世なるを、一日なりと快く遊んで死ぬが得と思へば、金銀にいとめを付けず、頻に小露を寵愛なすにぞ、男が宜うて金持で、其處に情のある人と、彼ざれ唄にも言ふごとく、渠は一個の美男子なるに、金銀の遣振にきたなげなる事をせざれば、小露も大事の客と思へば、浮氣ならずはもてなせど、命を懸けてといふほどに深く契りし和合にもあらず、諫六も斯とは知れど、正直正路の生付ゆゑ、假初ながら二年越し、馴親みし者なるを、只一言の別もつげず、我死したりと聞くならば、浮世の義理をも知らぬものと恨みられんもうしろめたし、おなじくは遠國へ趣く振にて體をよく別を做すにしくはなしと、斯のごとくは言出せしなり、果して諫六が本望を遂げ、後に切腹なせしと聞き、小露は駭き悲みしかど、猶唄女を止めもせず、又他の客に枕を重ね、後は如何なる夫を持ちけん、終る所を知らずとぞ、素より浮氣を常とする歌

妓なんどの境界にしては罪となすべき事にもあるまじ、然ればまた下奴甚三郎は、織部方へ使に行けとの主人の辭に默止がたく、雪の道を厭ひなく、本庄さして赴きしが、留守の樣子の心に懸れば、往きも戻りも足を早めて、頻に道を急ぎしゆゑ、喜八が迎に來らぬ以前に立歸りつゝ、窺ふに、奥には小露と主人とが何事やらんしめやかにうち語らへる體なる故、獨りつく〴〵思ふやう、旦那も壯の歳なるに、奥樣とてもお在なされず、稀には少しのお遊樂も被成ずばお氣も晴れまい、織部さまの御返事も急ぐ事ではないとあれば、今何やらんお話最中、お邪魔をするでもあるまいと粹を通して甚三郎は、竊に自己の部屋に入り、草鞋作つて居る程に、姑くあつて喜八が來り、小露を連れて歸りし體ゆゑ、甚三郎は胸撫でおろし、ヤレヤレ嬉しや、那奴等が今日は旦那を誘出さず、お内ばかりで濟みしかと、歡ひながら部屋を立出で　甚「へイ旦那さま、只今歸りました　諫「オ、甚三郎か、大儀たいぎ、織部氏は在宿であつたか　甚「へイお宿でございましたが、何れ這方から參つてお咄をするから、別段お返事は遣さらぬと被仰いました　諫「よし〳〵夫で譯つた、何にしても此雪に嘸寒かつたらう、酒の殘があるから一盃と言ひたいのだが、貴樣は下戸だから、殘つた肴で飯でも喰ふが宜い　甚「へイ有難うございます、まだ欲しくございませんから、晩程頂きませうト言ひつゝ取散したる酒肴を片付けて、再び一間に入來り、何やら言度き事あるを言ひかねて居る風情にて、手をもじ〳〵と爲て居たりしが、思切つて小膝を找め　甚「エ、モシ旦那さま、斯まうしましたら異なことを聞くと思しめすでもございませうが、貴方は那小露とか申す女中を、眞實宜いとおぼしめしますか　諫「アハヽヽ、何を眞貌になつて言ふかとおもへば、妙な事を聞くではないか、那はほんの當座の慰み、氣晴しの爲に酒の相手に呼ぶばかりサ　甚「左樣なら宜しうございますが、若もあんな者に深くおはまり被成ますと、果はお身の破滅にもならうかとお案じまうしますから、入らざる差出たやうなれど伺ひますのでございます　諫「ナニサ、深く心配をする事はない、その證據は、此頃では一向那方へ往かぬのも大かた爾も考へて居るであらう、其うへ此身も遠からぬうち旅へ立つ積だから、小露の事などは思ひ絶えて居るのだ　甚「へヽエ、旅立を被成ますとは、夫は何方へ　諫「然ればサ、此事は爾にもとツくりと言つて聞せやうと思つて居たが、序がないので言後れたが、醫にもいふ座して喰へば山も虛しとやら、この身も永々の浪人暮し、少しの貯もあつたのも大方は遣ひ減し、此儘放心〳〵爲て居ては、主從二個の腮も干上る道理だから、種々考へたうへで急に奥州へ往く積だが、夫に就いては榮耀らしく、家來まで連れては往かれないから、倆には暇を遣す積だ、國許を立退いてからは取別浪人暮しの不自由な所を、種々苦勞をして奉公を致して呉れたのだから、何の樣にも爲て遣したいのだが、知つての通りの不如意ゆゑ何事も心に任せぬ、爰に金が十兩あるから、不足ではあらうが之を元手の足にして、なになりと渡世を致して呉れろ、今別れては又逢はれるやら逢はれぬやら、再會の程もはかられねば、差古しではあるけれど是を爾に遣すから、記念とも見て呉れるが宜いト兼て準備をなせしと思しく、金十兩に取添へて、脇差一腰取らするを甚三郎は手にだもふれず、忙れ果てつゝ、主人の貌を須臾見つめて居たりしが　甚「モシ旦那さま、夫は貴君のお辭ではございますが、下郎奴には解せませぬ、私も永くお側に居りますが、つひぞ是まで奥州筋に、御親類やお知己のあるとまうすお噂も承りませんが、此鎌倉でさへ今日のお暮しが被成かねます程の處を、見ず知らずの奥州の果なんぞへお出なすツたとまうして何樣なりますものか、夫とも他に思召でもあつての事なら兎も角も、只お葬しの出來かねるばかりの譯なら、憚ながら私が此上身を粉にいたしても、貴方

お一個は御不自由のないやうに致しませう、一寸お目に懸けたいものがございますから、御免下さいましト言ひながら、其身の部屋より手箱を一ッ持來り、其中より一冊の帳面と紙に包みし金を取出し　甚「爰に金が五兩あまりございます、トサ箇樣にばかりまうしたら、下郎の分際で何で金子を持つて居ると、御不審にも思召しませうが、是は私のではございません、皆旦那樣のお金でございます、其譯は是迄御客さまなどがございます節、御酒や御肴をおとり被成ますのに、壹升五合あつたら宜からうとぞんじますのも二升買へと被仰います、扨其殘つた御酒を、翌日になつても召しあがる事がないと、味が變つて酒しほにも遣へなくなります事がございます、けれどもそんな穢びれた事をさうするのは御嫌な御氣性で被爲入ますから、御止めまうしては御意に障るとぞんじまして、一升のお代は頂いて置いて、内證で五合か三合の儉約を致して置く事もございましたし、其外お肴の樣な物に致しても、萬事おむだになる事は、私の取計で、手殘しを致して置きましたのに、御用の間に草鞋を造つて賣りました錢を退けて置きましたのが、塵も積れば山とやら、何ぞのお役に立たうかと是丈溜めて置きました、箇樣に申上げますと、何樣やら旦那樣のお目をかすめて、陰くらい事でも致したやうに思召しませうが、最初から纔の端多錢をも帳面に留めて置きましたから、御覽遊ばせば御疑念も晴れませうか、扨此金を元手に致しまして青菜小菜を賣りましても、その日のお暮しの出來る位の事は儲のないことはございますまい、若夫ともにお葬しがつかないときは、奥州なんぞへ被爲入程なら、私の在所の江州へお供を致ます、在所には親仁も達者で居りまして、疲百姓ではございますが、五反や八反の田地はございますから、味い物さへ召しあがるまいと思召せば、貴君を一個位はどんなに致してもお養ひまうしますから、他國へお出なさる事はお止に被成方が宜しうございませう、併し斯まうしあげても是非お出被成ねばならぬ譯なら、私もお供にお連れ遊ばしまし、其替りにはどんな眞似でも致して、一錢でも旦那さまの御厄介になりません樣にいたしませう、國を出ます時から御恩を請けた旦那樣、私の命のあらん限りはお側を離れず、御先途を見屆けろと親仁に吳々申付けられましたのを、今更お暇になつたとまうして、どの面さげて在所へ歸られませう、お脇差やお金は有難い と申上げたうございますが、お慈悲が反つてお恨しうぞんじますト心の眞うち明けつゝ、涙を流して演べたるは、又有りがたき忠僕なりけり。

第九十六回

つくゝ聞いて諫六は、武士も及ばぬ渠が心底、甲斐なき主人を斯までに思うてくれる深切は、忘れは置かぬ辱いと、思へば涙せきあげて胸うちせまれば、姑くは答も做さで居たりしが、然れども近きに討入と既に覺悟を極めしうへは、不便ながらも暇をば取らせずしては慥ひがたきに、心弱くてなるまじと、氣色を變へつゝ、聲荒らげ　諫「コレ甚三郎何とまうす、主人が他國致すについて入用のない家來ゆゑ、些少ながらも金子等を遣して、暇を吳れるとまうしたら、有難いと一禮いたして早速下宿もすべき筈を、金も脇差も有難くない、是迄買物の上まへをはねて、くすね溜めた金を元手にして、商を爲て主人をすごすの、若其上にも葬しがつかずば江州の在所へ參れ、養つて遣らうのと主人へ對して不禮千萬、浪人しても鹽谷の家來、下郎ごときに養はれて命をつなぐ者と思ふか、常から倆は出過者、主人を主人と思はぬ仕方、日比心に慥はねど、年來遣つたよしみを思ひ是迄は勘辨も爲たが、最う片時も用捨はならぬ、たッた今出て

参れト常に變りし主人の辭に、いよ〳〵駭く甚三郎が、壁に額を摺付けて　甚「モシ旦那さま段々の御立腹、寔に恐入りまして申譯もございませんが、お買物の手殘しを致したのも、全く惡氣ではございませず、夫を元手に貴君樣をすごさうと申したのも、何樣がなしてお側をば離れまいとぞんじまする心の餘りで、不躾な事と思ひながら心底を包まずに申上げたので、是とまうすが幼少の時分から、お側に居つたお心易立が過ぎました故とぞんじますれば、どの樣なお叱りに預りましても、一言の申披きもございません、此上は心を入替へまして、何事に寄らず旦那さまの仰は少しでも背きますまいから、何卒御慈悲に是迄の通りお遣ひ被成て下さいまし　諫「主人の辭は背かぬと申すか　甚「ヘイ〳〵決して背きは致しません　諫「背かずば暇を遣るとまうしたら、何故畏つて出て往かぬ　甚「さア、其事に就きましてお願ひ申しますのでございますれば、何卒御慈悲お情にお暇のことばかりは　諫「無言れ這奴が、主人の言付を用ゐず、我意をのみ申募る僭い下郎奴、武士が一旦暇を遣ると言出したからは跡へは引かぬ、まだも辭に背くなら手は見せぬぞト睨まへつゝ、刀引寄せ膝立直せば、此時迄も甚三郎は只ひれふして居たりしが、腹を定めて容貌を改め　甚「是程お詫を申上げてもお聞入がございませねば　據ございません、今更旦那樣の御意をそこなつたと申して、國許へ參りましても何面目に親仁に顏が合されませう、迚も此世にある甲斐もない私、せめては旦那さまのお手討になりますれば、死ぬとも本望でございます、其お刀でツばりと、さア遊ばして下さいましト首さし延せし覺悟の體に、諫六素より伐る氣にあらねど、何と言うても聞入れねば、おどしてなりと術をよく下げて遣らんと思ひし故、刀を取つてひけらかせしに、案に違ひし巢が氣色に、いよ〳〵困り果てたりしが、猶も心を鬼にして　諫「迚も斫得は爲まいと思ひ、主人に對つて其難題、許しがたき奴なれど、犬畜生にも劣しき者を手に懸るのも刀の穢、きり〳〵出て往きをらぬか、面を見るさへ忌はしいト言ひつゝ立つて、甚三郎が襟がみ掴んで引起し、勝手の方へ突遣りつゝ、以前の金と脇差をも巢が邊へ投與へ、隔の襖をぴゝ切れば、不便やな甚三郎は、突出されし儘平仆して、聲を忍びし男泣、須臾涙にくれけるが、何思ひけん涙をはらひ、與へられたる脇差と金を諸手に携へつゝ、すご〳〵として身を起し、その身の部屋へ赴く體を、襖の透より諫六は見送り果て嘆息なし、輕き者には珍らしき適れ得がたき忠義の魂、夫と知りつゝ、無義道に是を非に曲げて追出すを、嘸や無慈悲な主人ぞと怨みもなさん歎きもせん、是みな餘儀なき事にして、我も主君の御爲に盡す忠義の故なるを、我なき後に樣子を聞かば、今の恨も晴れやせん、毫塵ほども越度なき家來をとらへて、種々と心にもなき雜言過言、許して呉れよ甚三郎と、今まで堪へし溜涙、瞼を餘りてはら〳〵と膝に落つるを拂ひもあへず、獨り歎に沈みしが、ふッと氣がつき涙をとゞめ、然るにてもあの甚三郎、力を落してその身の部屋に至りし樣子に見受けしが、其後何の音汰沙なきは、思ひあきらめ出行きしか、夫に就いても何とやら胸騒のせらるゝは、心ならずと身を起し、靜に襖をおし開きて、足を爪立てひそやかに男部屋の口にいたり、破障子の透間より内の樣子をさし覗けば、甚三郎は持合せし座紙の皺おし伸して、硯引寄せ何やらん書認めて居たりしが、筆を止めて卷納め、襖に貰ひし十兩に、我が手殘しをせし金を取出しつゝひとつにして、今認めたる一通と倶に傍にさし閣きつゝ、かの脇差を手に取りて再三度おしいたゞきしが、忽地すらりと拔きはなし、諸肌脱ぐよと見る間もなく腹を斫らんとするありさまに、臍を潰せし諫六が　諫「ヤレ待て甚三速まるなト言ひつゝ、障子を蹴開きて、躍入りつゝ、甚三郎が刄持つ手を取りとめて　諫「這は物にばし狂へるか。

何故あつての生害ぞト言へど、這方は必死の勢　甚「覺悟究めた上からは、許して死して下さらまし」諫「這は聞分なし甚三郎、死なでも事は濟むべきにト禁むれど更に聞入れず、素より渠は在所にて小角力のひとつも取りて力量勝れし者なるが、死力を極めてもがく事ゆゑ、流石の諫六もてあまして、須臾揉合ひ居る折から、蓑と笠とに身を堅めて、かの立林唯七と、跡に續いて織部安平、雪を踏分け入來り、兩人戸口に徨みて　兩人「近松氏お宿かト言へども内には回答もなく、何事やらんどさくさと物音するに訝りて、案内もなく内に入り、見れば主人と下部とが、白刃を振りひらめかしつゝ挑み爭ふありさまに、先に進みし唯七が物に堪へぬ氣速者、會釋もなさず駈上りて、有無をも言はず甚三郎が襟首つかんで忽地に、簀の子の下へ投出すを、跡より入來る安平が　安「何か仔細は知らねども主人に刃向ふ不屆者、手は見せぬぞト駈寄れば唯「イヤ其許の手は借りぬ、此唯七が新身の切味、振舞呉れんト立ちかゝりし此形勢を見るよりも、肝を潰せし諫六が　諫「ア、コレ御兩所早まられな、是には深き譯あるをト言ふをも聞かず兩人が、刀の柄に手を掛けて最も危く見えにけり、此をさまりは如何ならん、扨は次の巻を見て知らん。（巻の四十八終）

いろは文庫第十七編序

戯墨の机に頬杖突きて、日ぐらし硯に對ひつゝ、こゝろに移り行くまゝの、よしなし事を綴るといへど、かのつれ〴〵の法師めけど、所願皆妄想なりと開悟なすべきやうもあらねば、下戸ならぬこそをのこはよけれと、言ふ語を只管あまんじて、呑む刻限になる頃は、夕魚賣の聲耳をさへぎり、杉葉立てたる門へなん、人走らする便宜もがなと、請なる事胸に浮めば、玉の巵そこはかと、筆に憶を凝らすにいたらず、然るをはる〴〵浪花より、書肆の來りて嗣輯を請ふにぞ、今半醉のちらつく眼をもて、此端書を記すになん。

魚賣ぐ夕聲の
郭公より待たる、頃

爲永春水演

正史實傳 いろは文庫 巻之四十九

第九十七回

案下近松諫六は、頻にはやる兩人を稍にして推鎖め　諫「トキニ御兩所、手前の召仕を譽めるも如何だが、此者は實に奇體の忠僕だから、かならず手荒な事をして下さるなト言へども唯七は合點せず　唯「近松、貴公は異な事を言ふた物だ、家來が主人に及物を持つて手對をするのを、忠義だの忠信だのと譽めさッしやるのは一圓解せない咄のやうだが、織部其許は何と思はッしやる　安「我等にもとんと分解ないが、何か深い譯があるとの事だから、夫を聞いたら腹に落ちる事もあるだらう、ノウ近松　諫「然ればサ、今の樣子を脇から見たら、此身に手對を爲て居るやうに思ひなさるのも無理はないが、實は箇樣〳〵云々の譯で、腹を切らうとするのを止めやうとして組合つて居たのサ、トありし次第を物語れば、兩個は聞いて感じ入つたる、夫が中にも唯七は不覺に催す泪をば、一王の樣なる拳にて拂退けつゝ聲くもらせ　唯「實にそりやア感心な男だ、夫なら然とはじめから言ひなされば、手ひどい事は爲なんだ物を、一圖に憎い奴と思つたから力任せに投出した故、何處ぞ打ちは爲なんだか、可愛さうに痛かつたらう　安「全體此方共が譯も聞糺さずに、手荒な事を致したのが惡かつたト實の子の下に投付けられ蹲踞つたる甚三郎を、兩人にて助起し種種にいたはりつゝ、麁忽を詫などする程に　共「是は〳〵御勿體ない、何處も痛みは致しませんから、何卒私にはお樣ひなく、先お座敷へお通り被成て下さいましし　唯「然らば座敷へ參らうが、夫に就いても側の心底近松氏から承つて、我々兩人とも實もつて泪を落して感心致した、何れにも近松と談合して、個の心に落付くやうに取計つて遣すから、かならず短氣な事を致すまいぞ　共「へイ〳〵有難うございます、旦那樣方のお執成で、何卒一生涯旦那のお側に居られますやうにお願ひ申上げます　安「ヨシ〳〵其處は兩個で宜樣に咄合をするから、氣遣はぬが宜い　諫「何にしろ色々御相談の致したい別儀もあれば、御兩所共にまア奥へ　安「何さま端近で咄もなるまい、しからば立林、御同道まうさうかト言ひつゝ三人座敷へ通れば　安「參り早々彼是の事で取紛れ御挨拶も申さなんだが、先刻は態々御紙面、仰の通り一件も最早明後日となれば、其前に御一會いたして快く一盃を傾けたい存寄ゆゑ、立林を引張つて來た譯サ　諫「此雪中と言ひ、殊に唯七殿まで御同伴とは、御厚志千萬辱い、其明後日になつたに就いて家來に暇を遣し、心殘りのないやうにして名殘の一獻を催さうと存じた、處で右の譯だから、是には實に當惑サ、何卒各方の御はからひで、術よく出して遣る御賢慮はあるまいか　唯「迚もお咄の樣子では一通りの事で暇を取らうとは申しますまい、ノウ織部　安「然ればサ、此身も色々考へて居るが、こりやア寧一大事を明して聞せるより他はあるまいヨ　諫「エ、夫では神文の面に　安「ハテサ、親兄弟たりとも決して他言は爲まいといふ、神文を取交したもかの一大事を他へ泄すまい爲ばかり、然るを御家來甚三郎が忠心義膽、人の心は表面から見えぬものとは言ひながら、切腹をして死なうとするのが、啞や僞に出來るものではない、其誠心を見たうへは明したからと言つて、他人に泄す樣なことを爲やう筈がないと思ふが、立林は何と聞かッしやる　唯「是は織部の言はれる處至極の高論と思はれる、跡で元老にお咄があつた處が、大星殿迚も夫は

明したのが悪かつたと言はれは爲まい、若又濟まぬとあつたなら我々兩人が勸めて言はせましたと申披きは請合つてするから、打明けてお仕廻ひなせへ　諫「何さま御兩所が左程までに被仰つて下さるうへは　安「ハテサ、最う明後日となつて居るものを、べん〳〵と長評議を爲ては居られない、早く冥へ呼出して、那男にも安心をさせてお遣んなさるが宜いト素より氣速き兩人が、右左より勸むるにぞ、諫六も納得して軈て甚三郎を呼出し　諫「其方に極密々にて申聞せる事があるから、若も門邊に人でも參らはせぬか能く見廻つて來るが宜いト言はれて甚三は裏表の口を篤と見て、戸締をして一間に來り　甚「誰もお氣遣な者は參りません　諫「然らば宜いから近く參れト遙へ呼寄せ言葉を密め　諫「扨々爾は仕合者だぞ、親子兄弟にも決して言はぬ一大事なれど、其方が赤心を愛て申聞せろとある御兩所の仰ゆゑ、泄すまじき密事ながら今其方へ明し聞せる、實は最前奥州へ參ると言うたは僞、全くは御主君の讐高野殿の御館へ我々甲乙推參して、お首を申受けんと去年以來種々さま〴〵に心を勞したが、時至りてはや討入も遠からず、然すれば家來を何時までも召仕つて居られぬ故、下奴には似合はぬ古今無類の忠義者と知りながら、心にもない雜言過言、無理の限を言つたのも何卒術よく暇を出し、後安く本望を遂げたいばかりの事だから、必ず惡く合點をせず、暇を取つて下つて奥れト言ふを聞くより甚三郎は、躍り上つて大きに歡び　甚「モシ旦那さま、然なくては協ひますまい、私も幼少の時からお側に居て、御氣質も知つて居りますが、殿さまの御無念を餘所にして、浪人爲たから宜いはと思召すやうな貴君とは存じません、斯うして被爲入には何か深い御思案のある事と思ひましたが、今の御樣子を承つて、日頃疑つた此胸が日本晴が致しました、其お咄を聞くうへは猫の事お暇は戴かれません、何卒下郎奴もお供にお連れなすッて下さいまし、お役には立ちますまいが、貴めては堀の埋草にでもなつて、此年頃の御恩報じが致したうございます　諫「イヤモウ、聞けば聞く程健氣な心底、過分には思へども冥を宜く聞分けよ、主君の讐を報ずるに、嫡孫を召連れたとあつては、鎌谷の家にはよく〳〵人がないかと世間の者に沙汰せられ、我々の恥辱ばかりか亡君のお名まで出るやうな譯だから、元老大星殿でさへ家來は一個もお連れなさらぬのを、我等風情が供をつれて參られやう筈はない、冥の道理を考へて故なく暇を取り、國へ歸るとも又は當所に居るとも、何れにも身の有附を定めて奥れろト言はれて須臾甚三郎は、首を傾け思案せしが　甚「なる程下郎の分際で大事の御場所へ參つては、お殿さまのお名前に拘はる事でございましては、推してもお願ひ申されませんから、お暇を戴きますでもございませうが、是迄に思込んだ事でございますから、貴めて敵の御門前迄お供にお連れなされて下さいまし、左樣致すと旦那さま方のお荷物でも引負いでまゐりますと、縱ひ御先途は見屆けませんでも本望にぞんじます、其替りお屋敷へは一足も踏込みませず、御門前から直にお暇を頂きますから、何卒お慈悲お情に、お召連れ被成て下さいましト思ひ入つたる一言の、なか〳〵止まる氣色にあらねば、如何はせんと諫六も思案にあぐみて見ゆるにぞ、側から安平找み出で　安「何さま渠が言ふ處、ひとつとして無理とは聞えぬ、苦しうござらぬ、望の通り門前までお連れなさい　諫「貴殿が左樣被仰るなら召連れると致さうか唯「宜い段ではない、我々が急度請合つた　諫「此うへは御兩所のお辭に任せ、甚三郎爾を門まで召連れるぞ、宜くお禮を申上げろ　甚「へイ〳〵、誠にはや有難い仕合でございます、そして　凡何日頃の思召立でございます　諫「先明後日のつもりだ　甚「へヽエ、夫ではお聞もない事でございますから、些お宿の取方付でも致しませうか　諫「ナニサ、こんな諸道具は此儘捨置いても宜いはサ、併し立退いた跡の見苦しくない

やうには爲て遣くが宜からう、トキニ御兩所、折角の御出だから一獻さし出したい處だが、宿で呑んだ處では氣も浮かず、殊には御同然に今日あつて明後日はあるかないか知れない命だから、何と遊納に何處ぞへ往つて、浮世めいた酒を呑むと爲ては何樣であらうネ　安「又例の婦多川か　唯「恍惚られるのを聞くも難儀だが、是も突合納だらうから何處でも構はない、往くと爲やうト頓て三人うち連立ち、婦多川さして出行きしは、小露が許と察しられたり。

第九十八回

斯て討入の夜にいたり、約束の如く甚三郎は主人の鎗を引つかつぎて高野の門前にいたる程に、或は屋根に綱階子を掛け登越ゆる者もあり、又は門の戸うち破りて勇み進んで込入るありさま、最目ざましく潔きを、目前見る甚三郎が、飛立つばかり羨ましけれど、門の裡へは一寸も足踏入る丶事恊はねば、拳を握り齒を喰ひしばりて、須臾徨み居る程に、屋敷の裡には忽地に泣叫ぶ聲討合ふ物音、さながら鼎の如く最すさまじく聞ゆるにぞ、さてこそ事の始りたり、旦那方のお働を一目なりとも見まほしと、邸のぐるりを打巡り伸上りては覗き見れども、四方は高塀外長屋に最嚴重に構へたれば、爭でか裡の見透さるべき、諺にいふ、沓を隔て痒きを掻くの心地はすれど、詮術なさに外面より裡を白眼んで立つたる折しも、塀を乘越え邸より逃出でんとする武士あり、雪の明に甚三郎は速くも夫と見出して、腹の裏に思ふやう、這奴かならず高野の家來、臆病未練の心より逃去らんとするならん、果も儻の片割なるを、みす〳〵夫と知りながら取逃さんは殘念なり、衛こそあれと點頭きつ丶、ありあふ雪を引掴み礫の如く握堅めて、窺ひ寄りつ丶打付くる、覘違はず彼武士の眉間に發矢と打當てられ、叫と一聲さけびもあへず、膽を潰しつ仰さまに邸の裡へ轉び落ちたる、這人は是別人ならず、例の松原左仲なり、此者常には世才ありて宜く師直の心に恊ひ、出頭竝なきのみか、日頃間者を入置いて、義士等がうへを探索せんとて心を碎きし程もなく、卒討入といふに及びて急地心の臆したりけん、主人の大事を餘所に見て身を逃れんとは爲たるなるべし、斯てその次の日に官府よりの沙汰として檢使の役人入來り、師直の骸をはじめ、家中の手負死人を一々に見分なすに、彼小林平八郎が如く、其身に數箇所の疵を被り、相手にも手を負せしならん、持つたる刀は血に染みながら仆れて死せしは天晴なれど、中には薄手ひとつもなく、身は重役にてありながら無疵であるも多かりしを、檢使の役人うち見遣りて　役「各位には御主人の斯る最期の際に臨み、小疵ひとつ請けられた體も見えぬが、奈何の譯でござるな　師直家來「へイ、私共は昨夜は非番でございました故、よく寐込んで居りましたので、始は一向にぞんじませず、後に聞付けて駈付けましたが、最早狼藉者は逃去つた跡で、甚だ殘念にぞんじました　役「是は又怪しからぬ、然のみ廣い邸とも見請けぬに、是程の騒動を寐て居られて知らぬとは、よく〳〵寐坊な人達と見えるト冷笑はれて一句も出でず、赤面なしつ丶退けば、今の恥辱を言ひくろめんと例の左仲が找み出で　左「只今の面々は何れも臆病者なれば論ずるに及びませぬ、併し當屋敷の者は皆那樣な白者ばかりかと御推察有つては殘念に心得ます、私抔は非番で長屋に居りましたが、狼藉者と聞きますより一番に伐つて出で、敵兩人に渡り合ひ渠等を難なく追ひまくり、一息吐いて居る處を半弓にて眉間を射られ、致命所なれば眼眩きて、傍の泥溝へ轉び落ち、這上りて働かんにも惣身泥になりました故奈何とも致方なく、是非なく長屋へ歸りまして、衣裝を着替へて又駈出して見まし

たら、渠等は速くも逃去りまして、邸に敵は一人も居りましなんだ、那時泥にまみれませずば、相手の四五人も戰つて取り、私も討死を致しまして、死出三途までも主人の供に立ちませうものを、よく〳〵武運に蓋果てましたものと思はれます　役「夫は然こそ御無念で御座らう、矢疵とあれば定めて深疵、見分を致さうから、近く寄つてお見せなされヘト言はれてギョットしたりしが　左「イヤ、御覽下さる程の疵でもございません　役「ハテ、疵の深淺は兎も角も、見分致すが檢使の役目、是非に疵所をお見せなされト再び言はれて詮方なく、仰山らしく額を卷きたる白布を取退くれば、昨夜茲三が打付けたる雪礫の其中に、小石にても交り居たるか、少し眉間を摺破りしに卽功紙をば張付けたるにぞ、檢使は可笑しく思ひながらも渠の口の惜ければ、かの卽功紙を會釋もなくめり〳〵と剝さるゝ、痛さに顏をしかめながらも、否とも言はれず堪へて居るを、檢使はつく〴〵打見遣りて　役「半弓で射られながら、その矢が眉間へ立たぬとは、貴殿は餘程の石天窓、是許の少疵に眼が暗み泥溝のなかへ落ちるとは、扨々足元の惡いお人、殊更主人の大事と思はば、着類は泥に塗れやうとも、其儘駈付けて往かれさうな物を、長屋へ歸つて着替へて出るとは、餘りと言へば優長千萬、事を巧に言はれやうより、寐て居て知らぬと言つた方が、まだしも有體で宜うござらうト言はれて左仲はなまなかに、恥辱を塗隱さんとして反つて檢使に恥しめられ、よしなき事を言うたりと後悔すれども詮術なく、是もおなじく赤面して逃ぐるがごとく退きしとぞ、却て義黨の面々は思ひの儘に本意を遂げ、高野の屋敷の玄關前に齊しく人數を纏めつゝ、一個〳〵に名を呼びて、爰に都ての人別を改め、四十餘人が一同に表門より引拂ふ比は、夜はほの〴〵としらみ渡りて、昨日の空のみか心も晴るゝ東雲の、紫立ちし曙に最勇しく引上ぐるにも、若や讐の緣者より討隊の人數の對はんかと、先無緣寺まで退きつゝ、爰の寺内に屯なし、敵きたらば深く一軍して討死せんと、寺の大門をうち叩き、仔細を演べて明けよと言へども、心狹き住僧なるか、または渠等の打扮を見て恐懼きたるやらん、拒みて門を明けざるにぞ、氣速なる壯士等が、然あらば門を打破らんと、例の柳槌を振りあげて門の扉を打たんとするを、大星急に推しとゞめ、無法の振舞すべからずとて、皆門前に居並びつゝ、列を直して控ゆる折しも、かの下奴なる茲三郎が何處にてか買求めけん、二籠の橘柑をば天秤にして荷ひ來り、諫六は言ふに及ばず、四十餘人の面々に各是を分與ふるにぞ、何れも咽の乾きし事故、時に取つての珍味なりと、大星をはじめとして皆その卽智を感心なし、譽めざる者はなかりしとぞ、恁て義士等は稍暫く這門前に屯せしが、敵押寄する體もあらねば、何時までか爰におらんと、是より人數を三隊に備へ、圓覺寺へと引上ぐるにぞ、茲三郎も跡に附いて酒名和迄見送りつゝ、圓覺寺の門前にて主人をはじめ其外にも、日比目を懸けられたる人には最念頃に暇を告げ、涙にくれて別れしは又有難き義僕なりけり、然れども茲三郎は主人の先途を見屆けんと思へば、鎌倉の地を離れず、如何成行き給ふやらんと餘所ながら窺ひしに、義士等は四家へお預けとなり、翌年切腹仰付けられ、骸は都て圓覺寺へ同穴に埋葬せられし、此趣を聞くよりも、兼て覺期の茲三郎も又今更に思はれて、愁傷限りなかりしが、終に髻を切捨てつゝ、身は墨染の姿となり、義士等の後世を弔はんと、諸國の靈場を拜しつゝ行脚する事年を經しが、後は何地へ至りけん終る所を知らずといふ、是を片岡が僕元助なりといふ說もあれど最訝し、元助が傳は既に前輯にあらはしたる元助稻荷の奇談あり、是も一個の忠僕にて、是を茲三郎に競ぶるときは、何れか勝り何れか劣らん、實や勇將の下に弱卒なしと、四十餘人の義士あればその下に又義僕有つて、末世の美談となれる事、和漢未曾有の物語にな

ん、其比誰が吟せし句にや、

鑓梅や雪をつらぬく花の意地

這もまた義士等がうへを詠じたるよし、最面白き句作なる故因に記しおくといふ。

（卷の四十九終）

第九十九回

花の雲鐘は上野か淺草か、と詠せし山を向に見、不忍の池を前に受けて、三間間口の格子作り、廊には小道具書畫の掛物品々を飾り立て、最手綺麗に暮せしは、是なん鍔屋宗伴とて其比聞えし鑑定者なりけり。

這宗伴といへる者は、基は鹽谷家譜代の家來、前名服部右内と喚ばれ高二百石賜はりし身が退身なして、此樣なる市人となりたる仔細、次の本文に綴るを見て、一奇人なるを味ひ知るべし。

或とき伴の宗伴が、おのれが居間に獨り在りて、小道具の入りたる箱を膝の廻に取りひろげ、光澤布にて念頃におし拭ひなど爲て居る處へ、一個の下女が遽しく次の間より顔を出し　下女「旦那樣、お客さまが被爲入ました　宗「誰殿だかお名前をお聞きまうしたか　下女「ハイ私には讀めませんが、お名札をお出しなすツて、旦那がお宿なら御内々お目に懸りたいと被仰いますが、隨分立派なお武士さまでございますト言ひつゝ手札をさし出すを、宗伴手に取り讀下せば、風間素曉と認めあるにぞ　宗「ハテ妙な人が尋ねて來た、何に爲ろ這方へお通しまうすが宜いト言はれて下女は立つて往きしが、さァ那方へとの案内につれて、入來る一個の武士は、年齢五十餘なるが次の間に刀を閣き　武士「喜兵衛でござる、御免なさいト徐々として一間に通るを、宗伴は見るよりも　宗「イヤ是は風間氏、一別以來お替りもなく、御壯健の御樣子を見て大慶に

ぞんじます、手狹の住居、さア〳〵ずッと御進み下さい、能く御尋ね下すッた　喜「何様でござる服部氏、先年貴所が赤穗表を退身致されたのも何の譯とも一向に分らず、兼々別して御懇意に致した拙者の事ゆゑ、實に心配にぞんじて、何處に何樣してござる事やらとお案じまうして居るうち、此度御當地へ勤番を仰付けられ、先々月到着致した處、ふと其許が當所に住つて居られる事を聞出した故、久々にて御面會をとはぞんじたが、出國せられた貴所であれば、お尋ねまうすも主君へ對して憚のない譯でもないと、少し見合せては居ましたが、何分舊友の事故お假顏しく、俳名を手札に認め、一僕をも召連れず極々忍んで參つたが、失禮ながら斯見た處が結構なお住居で御不自由もない御樣子、先々安堵致したが、御家内もお替りはござるまいなト言ふとき遣方の一間より　女房おさめ「オヤ、お珍らしいお聲がなさいますネエト襖を明けて立出づれば　喜「是は〳〵御内方、先御堅勝で　さめ「ハイ貴君にも御機嫌よう、私もお國を出ましてから、お心易く爲た皆さんがお假顏しくッて、毎度お噂ばかり致して居りましたが、御新造さんやお子さん方も御丈夫で被爲入ませうネエ　喜「ハイ皆無事で、先達て怜にも嫁を貰ひ最う孫までが出來て、イヤハヤ賑かで過ぎて困りますハ、、、　さめ「オヤ、重さんが最うお聟さんにおなりなのでございますかへ、速いものでございますネエ、私共が御國に居る時分迄は、竹馬だの凧だのと隨分おいたの方でお在なすッたが、嘸立派な若旦那におなりでございましたらう、夫に就いても自分の年の寄つた事には氣が付きませんヨ、併が喜兵衛さんは些もお變ん被成ませんネエ　喜「ナニ老込んで意氣地はなしサ　宗「久しぶりのお出だからなんぞ御馳走を爲たいが、喜兵衛さんは御酒を呑らないから、穴鰻へ大串所を然言つて遣つてお飯とでもするが宜い、其前に圍に丁度釜が掛けてあるから一ぷく進げなせへ　喜「樗つて下さるな　宗「ナニ切手の貰ひ合せがあるから、夫丈の御馳走サト言ふうち、女房が薄茶を立つて持出で、口取の菓子など出す　喜「是はお器とまうしお茶のお服合、寔に結構だ、今一ぷく頂戴致さうト茶を二杯飲んだるうへにて　喜「トキニ右内さんではない宗伴大人、斯言ふと異な事を聞くやうだが、御自分お國に居られた時には二百石といふ祿を御頂戴で見れば、何も御不如意な譯とも思はれず、然かと言つて上を怨む事もあるまいに、何で出國をなされたか自己には一圓合點が往かない、お心易く致す中にお隱しなさる事もあるまい、御所存に寄つては及ばずながら御歸參の道をも盡して見たい心底だが、何樣でございますネト言はれて宗伴は額を撫で　宗「イヤモウお尋ねに預つては赤面の仕合だが、實は持病が差重つて急に武士が嫌になり、其處で赤穗を出國爲た譯でありますが、其病根を知つて居る人は、元老の大星氏ばかりかと思はれますノサ　喜「ハテネ、貴公に何も御持病のあるといふ咄も承らなんだが、何の御病氣で　宗「イエサ、例の道具好の病サ、夫も人のやうに道具を買集めて樂むのなら仔細もないが、私のは誰に習ふともなく鑒定が上手になつて、道具屋にある品を見ても、中には急度十兩になる物だと思はれるのが、言直が五兩だの三兩だのといふ事があるから、つひ買つて置くと果して夫に望人が出來て、思ふ通りの相場に賣れるから、何樣も面白くッて堪へられないノサ、所であるとき殿さまから、古書畫の類を尋ねて求めて來いと仰付けられたが、お上が又書畫の方は中々お目が肥えて被爲入から、爰でこそ何か掘出物をして、流石は右内だとお譽のお詞を頂かうと、諸方を探索に駈廻つた處が、折よく唐宋から明のはじめあたりの極出來の宜い書畫を二三幅見付出して、書畫屋仲間の買直段より少し安いと思ふ位に買取つて差上げたら、お上でも至極御意に入つて、格別骨を折つたらうと御袴を頂戴爲たのは宜かつたが、殿樣がお歡の餘りに大星氏をお召遊ばして、御

自慢心でお見せなさると、元老は拜見して、是は結構なお品とばかり言つて下らうとするのを、お呼留なすッて、何様ぢや其方の目鑑では、此三品の直段どの位で求めたと思ふとあると、元老が私はとんと不案内でございますればとばかり答へられるから、お上では猶お具を高く遊ばして、個は常々古畫なぞを好むやうに聞及んだが、其處等の辨のないといふは如何致した物だ、此品は出入の道具屋から求めたら凡是是の直段とまうす處を、是々の直段で手に入れたから、餘程の掘出物と思ふが何様ぢや、とあると大星氏が容貌を改めて、是は御意ともぞんじません、都て直段の高下を論じますのは商人等が致す事、お大名の御身にて、右様の鄙しい事は仰せられる物ではございません、御入用のある節には、矢張お出入の畫畫屋から相當の直段で御買上になりますれば、渠等も何程か利を得まして家業にもなりませうが、諸侯たる御身分で掘出物を遊ばすやうでは、町家の者は立行きません、勿論尊君が御自身に道具屋へお出も遊ばしまい、是は何者に仰せ付けられてお求め被成ました、と言はれて上でも御赤面遊ばしたが、お隠しなさる事にも往かず、服部右内に言付けて買はせたとあると、夫は以ての外の事でございます、重ねて箇様な事は決して御無用に遊ばしましと、苦々しい貌で御異見をまうしあげ、御前を下るや否や元老が、私を呼付けて、貴様は常から道具屋の眞似をして目の利かぬ町人をたぶらかし、掘出物などと唱へて内職同様にするとの事だが、士官の身分でありながら怪しからぬ事だ、殊更此程殿よりの仰付けられとは言ひながら、古書畫の類を不相當の安直で買上げて差上げた様子だが、必竟貴様が其様な事を致す故に、直段の高下などを御ぞんじ被成やうになつて、お大名にはお似合ひなされぬ鄙劣な事を被仰ることにもおし移つて、萬一御同席さまなどお打寄の中で右様のお咄でも出ると、五萬八千石の御瑕瑾にもなる事だから、以來は屹度省慎ましやいと、大きに油を取られましたト咄の中に女房が煎茶をこしらへて持つて出る。

第百回

宗「其後程すぎて鎌倉勤番を仰付けられたに付いて、大星殿へ屆に參つたら、一寸奥へ通る様にとの事だから何用かと思ふと、元老の被仰るには、今度鎌倉へ勤番との事結構な首尾合、隨分精勤をされるが宜い、併し貴様を彼地へ遣したら、又例の癖がはじまらうと夫が甚だ心配だが、先達ても奥々申入れた通り、帶刀を致す身分で商人同様な事を爲ては、世間へ聞えてもすまないから、必ず道具の賣買はさッしやるな、と留釘をさゝれたから、鎌倉へ下つても好な道具を買ふ事が出來ず、然すると又あいにくな物で、たまたま町へ出ると種々な物が目について、ぞく〳〵する程買ひたくなるから、こりやア自分獨りで買ふまいと思つても、堪らなくなつてぶら〳〵と買ふ様になるかも知れないから、家來に言含めて置くが宜からうと、其比五助といふ、極一國な親仁を飯焚に遣つて居たのを呼近づけてや、扨其方に些頼度い事があるが、自己にひとつの病があつて、道具さへ見ると買ひたくなつてならないのだが、夫を買つてはならない譯があるのだから、道具屋は此身の敵だと思つても、其店へ往き掛ると例の病がきざして、頻に買ひたくなるには貧に困るノサ、其處で大儀ながら、此後自己が町へ用向があつて往くときには、お主を供に連れて歩行から、道具屋の前へ來たら敵の内でございますと、自己に氣を付けて決して、店先へ立寄らないやうに止めて呉れるが宜い、夫で自己の持病が直りさへすれば、藥代だと思つて個にも骨折賃を遣るから、隨分氣を付けて放心物を買はないやうに爲て呉れろと、是から餘所へ往く度にかの五助を召連れて出ると、這奴が骨折賃を貰

はうと思つてか、自己より四五間づゝも先へ歩いて、道具屋とさへ言へば天道干でも何でも構はず、敵の店がございます、お氣をお付け被成ましと言はれる程、猶見たいのを目を塞いで通り拔けるので、其當分は我慢も出來ましたが、ある日芝邊へ參つた歸り掛に日蔭町へ通りかゝると、例の五助が、旦那こりやア大變な所へ參りました、門並敵の店ばかりだから、眼を眠つて私の肩へつかまつてお歩きなさいましと言ふから、夫はとんだ所へ來たちやアないか、此長い町を眼を眠り通して歩かれるものかと言ふと、そんなら冥は片側町だから、右を見ずに左の泥溝の方を向いてお通んなさいと、自分が先へ立つて往くから詮方なしに跡へついて、成丈店の方を向かないやうにして歩きながらも、腹の内では冥は小道具類を多分出して居る所だから、宜い物が隨分あるだらうと思ふと堪へられなくッて、五助の氣の付かないやうに、店の方をちよい〳〵と見て歩くうち、小柄が一本ふいと目に付いたから、其店へ立ちかゝると、五助が驚いて、モシ旦那冥は敵の内でございますのに、お立寄なすッてはなりませんと、手を取つて引摺にかゝるから、コレサ一軒位立寄つて見た迚も買ひさへせねば宜いから、そんなに引張るなと、小さな聲にて五助をなだめ、彼目に付いた小柄を手に取つて見ると、地金が鐵で枯枝に梟が一羽とまつて居る圖サ、ちよいと見るとさつぱり見立のない代物だが、極時代があつて上作の家彫だから、捨賣にしても五兩、相手に寄つては金一枚には物言はずなる品だが、何價と言ふだらうと聞くと、三分二朱だと言ふから驚いたネ、扨々年中商賣に爲て居ながら、眼の利かない道具屋もある物だ、今にも仲間の道具屋で目の明いた者が來ると、开奴に買はれて錢まうけをされるのだが、可憐相に敎へて遣らうか知らんと思つて居ると、道具屋の亭主が如何さまでございませう、隨分出來も宜しうございます、お直段は極決着の處をまうしあげましたが、是を御緣に又外品をもお願ひまうしたうございますから、少々の事は見切つても差上げますから、思召さまの處をお付け遊ばしましと言ふうちも、五助が氣を揉んで頻に袖を引張るから、迚も買ふ譯には往かず、然かと言つて直を付けずにも別れにくいから、先で賣らないやうにと思つて、半分直壹歩三朱に付けッ放しに爲て二三間往過ぎると、モシ〳〵と跡から呼ぶから、萬一負けられては大變だと、早足に往きかゝるのを追ひかけて來て、實に損のまゐる商でございますが、まだ口明も致しませんから差上げませうと、小柄を持つて來て押付けるのを、然なつては否とも言はれず、詮方なしに買取るのを五助が見て、ソレ御覽じまし、夫だからとう〳〵敵を脊負込んでお仕廻なすッたと、目に角を立て言ふから、ハテそんなに腹を立てるな、今日はお主に御馳走を爲るはと、近所の料理茶屋へ這入つて一盃呑みながら、扨五助、儞の氣ではつまらない物を買つたと思ふだらうが、此小柄は後藤祐乘の細工で、捨賣にして五兩、宜く往けば十兩にもなる代物を、壹歩三朱で賣るとは實に盲目千人目明千人サ、併し此事は決して屋敷へ歸つて言ふまいぞと、金を壹歩遣ると五助が歡んで、夫ぢやア貴君は商人の上前取を被成のでございますネ、そんな味い仕事を御ぞんじでお在なさるのを、何故敵の内だと目を塞いでお通りなさるのでございますと聞くから、イヤサ帶刀を致す身分で儕樣な事を爲ては濟まないと、さる人に堅く留められたから、飯より好な道具の賣買を止めたのだと言ふと、ナニお止めなさるに及びますものか、お屋敷の人にさへ咄さなければ、誰も知る者はございません、是からお供をして道具屋とさへ見るとお知らせ申しますから、思入お買ひなさいまして、其度毎に自己にも壹歩づゝ下さいましと、宜い了簡の男で、夫から後は町へ出る度に、道具屋の前に往くと引張込むやうにして勸めるから、つひ買ひたくなつて、人の知らない金まうけを爲て居ると思ふうち、一年の勤番を半

年餘も勤めると、俄にお國から代の人が來て交代を仰付けられたから、不思議な事と憶ひながら、早々鎌倉を引拂つて赤穗へは歸つたが、腦に疵持つ心地故、姑く病氣と披露して引籠つて居て見たが、作病樣へて長くも居られず、出勤を爲た當日に元老方へ屆に往くと、別に叱言も言はれなんだが、貴樣は鎌倉が性に合はぬと見えて兎角持病が差起る樣子だから、矢張赤穗に居る方が無事であらうと言つて笑はれたときには、實に穴へも這入り度いやうで、扨は此譯がお國へ聞えて交代をさせられたのかと閉口をして內へ歸り、其當分は道具の事も思切つて見たが、生得好な道故に、是を久しく止めて居ると實正の病氣が出さうだから、獨りつくゞ考へるに、今度の勤番をしくじつては、二度と再度鎌倉へ往く事はならず、此ま、病氣でも出て死んではつまらないもの、是といふのが面倒な大小を差して居るからの事だ、町人になりやア氣儘にどんな事でも出來るといふ了簡で、二百石を打捨つて赤穗を缺落サ、併し殿さまへ對しては恐入つた事と思ふ所から、天窓を剃丸めて、扨こそ鍔屋宗伴とは名告りますト過來方を物語れば　宰　なる程それで樣子が分解つた、私も好事の癖があつて刀劍器物の類を好みますが、御自分のやうに家まで捨てやうとは思ひません、併し當時鎌倉一番の鑒定者と言はれ、何不足なく好な道を樂んで暮して居なさることだから、貴所の身に取つては本望かは知らないが、武門においては餘り本意な譯でもありますまいから、何か一功立て、、歸參の蔓に取付くやうに被成ては何樣であらうネ　宗「寔に御心切辱い、私も折々お國の事を思出して、ア、濟まないことを爲た、第一は主君へ不忠元祖へ不孝と、今では大きに後悔をして居ますが、惡い病に取付かれて、何樣も振拔くことの出來ないには困ります、寧て快でもあつたら、縱ひ五十石三十石でも、故主の御家來に願ひたいものだが、娘ばかりで夫も協ひませんト嘆息しつゝ、咄すうち、

跳の鍛が出來たりとて女房が持出すにぞ、喜兵衛は寢て馳走に預り、食後には又餘談に及び、時を移して戻りしとぞ。

（卷の五十終）

正史實傳 いろは文庫 巻之五十一

第百一回

觀世音の奥山なる、軒を並べし水茶屋に、腰うち掛けたる二個連、ひとりは年齢二十二三、如何にも大家の若旦那と見ゆる、人柄のよき好男子（名は瀧治郎）今ひとりの寸白とて醫者を表に出しては居れど、匕を取つては葛根湯の盛方も些覺束なく、然れども江戸座の俳諧がすこしばかり出來るのと、落咄と聲色で座敷を持つが上手ゆゑ、夫で暮しを立て居る、世にいふお幇間醫者なるが、烏芋天窓を振立てながら　寸「トキニ若旦那、何樣でげす此櫻の咲いた處は　瀧「寔に滿開だネエ　寸「爰でさへ此位だものを、乗て僕がお勸めまうす花街へ往つて御覽じまし、仲の町は一面に櫻が植込んであるのに、花の物言ふばかりなる美しいのが居並んで、どれでも寄取見取に自由になると言ふのだから、實に人間界の樂は青樓一夕の遊に極りやすゼ、徐々往けば刻限も丁度よし、是から廓中の花見物とは何樣でございませう　瀧「夫は私には不良せん　寸「僕が面白い事をお勸めまうすと、何を言つても君は不良せんと被仰るので困りやす、一體此間から些お鰈梅のお悪い御樣子、夫と言ふが餘りお學問にお凝りなすつて、分解も爲ない六ケ敷字をお讀みなさるからの事、夫もお好の道なら宜しうございますが、親御さまが大さうお案事なすつて、愚老へ其御病氣の愈る丁夫は在るまいかとのお賴サ、素より愚老は樂で病を愈す事は不得手だが、若旦那のやうな御病症には、別にひとつの法組がございますと、家傳の秘事をお咄しまうすと、大旦那がお歡びなすつて、何卒悴が女郎のひとりも買つて見やうといふ了簡になれば夫で安心、物の入ることは些も厭はないから、寧て居續の二晩と三晩もするやうに仕込んで下さいと被仰るぢやアございませんか、世間の親は息子が遊に往くと言つて叱言をいふ處を、頼むから連れて往つて呉れろと被仰るやうな結構な親御樣が、又とふたりありやア爲ませんゼ、昔二十四孝の孟宗は、雪の中から竹の子さへ掘出したと言ふのに、親御へ孝行だと思召したら、お否でも一晩位の御辛坊は出來さうな物ぢやアありませんか、まア欺されたと思つて往つて御覽なさい、一度味をしめると堪へられた物ではございません、ノウ貴嬢さん、今どきこんな堅い事を言つて居るお息子さんはありは爲まいト見かへれば　茶屋むすめ「ホ、、、、然でございますヨ、時々はお遊も御保養になつてお體のお藥でございますネエ、ト程をよく相槌を打てば、瀧治郎は困り果て、手をもじ〳〵遣りながら　瀧「皆さんの御深切は有難うございますけれども、女郎を買ひますと第一癖をかきますから　寸「アハハ、、お前さんもつまらねへ事を被仰るぢやアねへか、都て醫は人相を心得ねば出來ないもの、私などが一目見れば、此女には癖氣のあるないは貌の色艶でも直に分解りやす、憚ながら愚老がお附添申して、是なら癖を請ける氣遣なしといふ娼妓を見立てお買はせまうしたら大丈夫でございませう、夫ともお否なら女郎は揚げず、唄女ばかりでわッさり騒いで歸るは何樣でございませう、是が實正の江戸ッ子遊と言ふ奴で、艶冶がなくッて宜しうございませうト言へども、瀧治郎は返事もせず急に煙管を筒へ納めて　瀧「寸白さん最う歸りませうト言はれて寸白腹の裏では、今日親仁から賴まれて、十五兩といふ金を預り懐に持つて居れば、今夜連込みさへすると、娼家の掛りは遣ひ次第、美味い酒をば飲んだうへで、儲もあつてお禮

も貰へる、近比にない仕事と思ひ、大骨折つて漸々と此奥山まで誘出し、茶を一杯呑んだばかりで歸つて はつまらぬ譯、何樣がなして引留める宜い分別はあるまいかと、思ふ折しも此店先へ、年齢四十に近いと見える母親が先に立ち、下女に日傘をさし掛けさせて歩み來りしひとりの女兒、年は二八の上を出ぬ、莟の花の南風にほころび初めんとする風情、美しき事得も言はれず、跡に四五間引下りて道草して居る丁稚小僧を、件の下女が見返りて　下女「オイ〳〵吉どん、何故見せ物の看板なんぞを立つて見て居るのだえ、今日はお供だヨ、此人込の中ではぐれでもすると宜けないハネ　小僧「ナニはぐれても道を知つて居るから獨で歸らア、いくら花見に來たのだと言つて、花ばかり見て居ちやア面白くもなんともねへ、花より團子とせへ言ふものを、稀やにア這等で醴の一杯も呑んで往けば宜いに　下女「アレサそんな外聞の惡い事を言ふのではない、速くお歩きと言ふのだヨト二個で言合つて居るのを女兒は聞いて、莞爾と笑なひがら往過ぐるを、瀧治郎は此とき既に莨道具を腰に納め立たんと爲つゝ、覺えずも件の女兒と顔見合せしが、日比はどんな女に逢うても振向いて見た事もなき偏屈者の瀧治郎も、如何なる過世の緣にや、總身ぞッとするばかり、須臾見とれて居る體を、寸白速くも見て取つて、宜い手續と思ふにぞ　寸「モシ若旦那餘程美しい、そしてあどけない斯言ふのならお前さんにお氣に入りませうが、廊中へお出でなすッて御覽じろ、今の女兒より百倍ました上玉が何程も居りますゼ、いづれ若旦那には年增ではお氣に協ふまいから、十五六の引込雛妓といふ奴が宜しうございませう、开も引込雛妓といつば、幼稚ときから娼家の深窓に養はれ、琴三絃は言ふもさらなり、碁將棋活花香茶の湯、歌俳諧まで仕込んであれば、先お大名のお姫さまと言つても恥かしからずサ、其處で青樓の形勢をお咄し申しやせうが、座敷の模樣は種々ありといへども、君は御酒を飲らない、幇間の輕口や唄女の二丁鼓は御意にも入りやすめへから略して言はずサ、引手茶屋の娘分が、些あちらへと言ふをきッかけに、座敷が引けて而後床となり、床納つて然して後娼妓來るで、例のお姫樣のやうなのが裲襠を脱いで屏風の裡へ這入り、アイと言つて吸付けて出す莨の味サ、薫は麝香龍惱に伽羅沈香をこきまぜたやうで、得も言はれないのを一吸ひ吸つてポントはたくと、ト手眞似を爲つゝ寸白が夢中になつて喋り廻れど、瀧治郎は女兒の跡を我を忘れて見送り居たれば、側で喋るも耳に這入らず、忙然として徨む體を、寸白は見て呆果てしが、扨はとおもひ點頭きて　寸「モシ若旦那、これはしたり若旦那ト脊中をひとつ敲かれて、はッと氣の付く瀧治郎が　瀧「何樣もあの櫻が餘程綺麗ぢやアないかへト言紛せばうち笑ひて　寸「モシ、何もそんなに素面をおきんなさる事はありやせん、お前さんも今の一婦人ぢやア腰が拔けやしたらう、常々女は見るも嫌だなんぞと、愚老を一杯おくはせ被成たのは實にお恨だネト言はれて、這方は顔を眞赤に爲て　瀧「ナニ實正にあの花があんまり綺麗だから　寸「ハテサ、那花が夫程お氣に入つたら、隨分愚老が働いてお取持をも致しませうが、先刻もお咄しまうす通り、廓内へ往つて御覽じまし、あのくらゐのは箒で掃く程もありやすから、まア試に一寸お出被成て御覽なさるが宜うございます　瀧「イエ何と被仰つても女郎買は否でございますが、私は何卒してト床几の緣を撫て居るゆゑ　寸「ヘヽエ、夫ぢやア矢張今のお孃が御執心でございますネ、宜しうございます、お前さんが夫程までに思召すのはよく〳〵の事であらうから、急度お望の協ふ樣に周旋をして進げますから、御安心被成まし　瀧「寸白さん、そりやア實正でございますかへ　寸「ナニお欺しまうして何に爲ませう　瀧「夫が出來るなら今日中に働いて被下いな　寸「ハヽヽ、お前さんもあんまり性急ぢやありませんか、まだ何處の誰だか知れませんものを、併し其處は

成丈速く聞合せるやうにも爲ませうがト言掛けて後を見返り　寸「エ嬢さん、今通つた女連は何處の者だらう、時々山へ來でもする事があるかノウ　茶屋むすめ「イヽエつひに見掛けませんが、何でも下町邊の隨分富家の娘さんでございますネエ　寸「先悪老の考では、向島の花を見て這方へ廻つて來たといふ樣子だが、男の連がないから、歸りの客りが魚十や昇月でもあるめへ、何れ花屋か萬年屋か、夫でなければ達磨汁粉あたりを探索爲たら、まだあの連中が居るかも知れやせんから、兎も角も急いで往つて見ることゝ爲やせうト茶代を置いて兩人は、くだんの茶店を立出でける。

第百二回

燒杉の九尺の板塀に三尺の入口の柱に、越野寸白と名札を掛けしは醫者らしけれど、百味箪笥も飾つてなければ、藥取の來た例もなき、其入口の格子戸を外より靜に押明けて、町人體の一個の男が飛石傳ひに内へ這入り、縁側の障子をば、御免なさいトがらりと明ければ、内には主人の寸白が賀屋の通を膝に廣げ、頬杖突いて居たりしが、件の男を見るよりも周章ふためき、裏口へ逃出さんとするを呼止め　町人「アモシ寸白さん、私の影を見たからと言つて、何も逃隱れを爲なさる事もあるめへぢやアないか、此程から幾度來ても、留守だ〳〵とお内儀さんの挨拶、今日は其手を喰ふまいと、拔足を爲て來た物を、又逃げられて堪るものかト言ひながら上へあがれば、寸白は間の悪さうに額を撫でつゝ苦笑して　寸「是は忠助さんお出なさい、此程から毎度御足勞を掛けた事も妻から承つて居りますから、是非お店へ上らないでは濟みませんが、彼一件の埒の明かないので、何だか敷居が高いやうでつひ御無沙汰になりました、お七、お茶を

ば進げないか、お莫盆をトもてはやせば　忠「イヤ構つて下さるな、お前さんとも斯やつてお心易くする中だから、お互に貌を赤め合つた事も言ひたくないと思つては居ますけれども、何時來ても、ヤレ敷居が高いの面目ないのとばかり、揚句の果にやア留守を遣はれるやうでは私は兎もあれ、旦那の前へ濟むまいぢやアないか、基の起は若旦那が些學問に凝りすぎて、萬一悪い御病氣でも出ちやアならないと言ふ處から、お前さんを輔んで少し氣保養でもさせて見やうとすると、奥山の茶見世で目に付いた女兒があつて、是非女房に爲たいと被仰る御樣子、段々先を聞合せて見ると、池の端で當時隨一と言はれる鑒定者、鍔屋宗伴といふ道具屋の女兒だと言ふ事を旦那がお聞き被成て、忰が夫程氣に入つた女なら、縱ひ貧乏人の娘でも支度金を遣つてなりとも貰ひたいところ、然いふ身元の女兒なら、猶の事欲しいものだと被仰るとお前さんが、ナニ私が口を利けば先の兩親に否と言はせる事ぢやアございません、併し夫には人に人を掛けて言込まねば、先の腹へ這入るやうな相談にもなりかねますから、是々の物入がございますと、旦那の手から金も餘程引出しなすツたぢやアないか、尤私共の身代で夫しきの金の事を彼是とも言はないが、お前さんが餘り安請合を爲なすツたから、旦那も若旦那も大丈夫貰へると思つてお在なさる所で、三月立つても、五月たつても取留めた返事がないから、旦那の腹立は扨置いて、是迄女郎を一晩買つた事もなく、女と言つたら風上にも否だといふ若旦那だから思込も深く、此比ぢやア好な本もお讀みなされず、只鬱々と物案じ計り被成て、御膳もろく〳〵あがらないから、親御達の御心配はどの位だと思ひなさる、悪い病の出ないやうにと保養に出した先から事が起り、反つて病氣を引出す樣では何にもならない、夫に就いても寸白さんが那程丈夫に請合ひなすツたのだから、最う今には何とか先の挨拶がなくツてはならない、一

寸往つて聞いて來いと毎日の樣に旦那から言付けられるから、店の用を閣いて來て見ると、昨日も留守今日も亦據ない用で出ましたでは、旦那の前へさう〳〵同じ事も言はれず、中へ立つて困るのは第一私だらうぢやアないか、今日は是非ともしッかりとした御挨拶を聞かないぢやア歸りません　寸「イヤモウ何と被仰られても一言半句もございません、私も斯いふ譯にならうとは思ひませず、先お店の御身代とまうし若旦那の男振はよし、一口斯と咄したら、牛房程の尾を振つて送越すだらうと思つたから、旦那の前を安請合を爲て、扨池の端へ往つて相談を爲掛けて見ると、那宗伴といふ坊主、道具の鑒定は上手だが銭の目利は下手だと見えて、現在女兒の出世は思はず、獨娘だから遣られないと言ふから、私も言掛になつて、そんなら銭にお貰ひなさらないかと言ふと、段々の御深切は辱いが、方々から嫌に呉れろ銭に成りたいと言込む口は澤山ありますけれど、些思ふ仔細もあれば當分其御相談には乘られないと言ふのを、猶押返して種々勸めて見ましたけれども、まるで色氣のない返事だから、私も案に相違サ、併し若旦那も那程思込んでお在なさるのに、旦那には立派に請合つた口上があつて見ますと、何分出來ましなんだとも言はれず、何樣か宜い手續を見付けて、先の腹をすッかり探つたうへで、最う一遍咄掛けて見やうと思ふので、實は引張つて居るのだから、何卒旦那の前は宜い樣に取繕つて、最う少し御猶豫を被成て下さるやうにお願ひまうします　忠「イヤハヤ呆れかへつたお咄だ、お前が那程手丈夫にお言ひなさるからにやア、先方をも突留めて置いての事かと思へば、そんな浮いた事に、旦那から金迄引出すとはあんまりな人だ、何の事はねへお前に品玉を遣はれたやうな物だのに、べん〳〵と馬鹿な顔をして何時まで待つて居られるものか、旦那に此通りまうしあげるから、預けた金の耳を揃へて出しなさへ　寸「其お腹立は重々御道理でございますが、實は手許にあるとまうす譯でもございませんから、其處は何樣か番頭さんのお腹合で　忠「馬鹿な事を言はッしやい、這方は若旦那の命にも拘らうといふ處だものを、そんな可笑しらしいことが旦那に言はれるものか、夫とも金が返されずば、お前も一所に店へ來て、旦那に直々に其譯を咄しなさるが宜い、三月五月引張られた曉に、そんな言草迄聞いたら旦那も澤山だらう、私も急がしい用を抱へて長い短い言つては居られない、さア何方とも速く返事を爲なさるが宜いト言はれて寸白困入り、手をもじ〳〵爲て居る折しも、女房お七が勝手より何時の程にか用意なしけん、酒肴をば持出て　七「アノウ忠助さん、殿方のお咄に口を出すでもございませんが、宿の不都合からこんなお氣の毒な事にもなりましたが、今其お金が在つた處が、若旦那の御病氣が直に愈るといふ譯でもありますまい、夫に就いて私がふいと思付いた工夫がございます、けれども素顏ではお咄も爲にくい事と思つて居る處へ、丁度宜い油身を持つて來ましたから、おさしみを作らせました、お茶の替りにト勸むれば　忠「イエ私は種々用多故　七「アレサ然でもございませうが、お燗迄して來ましたものを、一口飲つて下さいまし、味いお咄がありますからト笑ひかけられ、忠助も素より嫌の酒でもあらねば、つひ口車に乘せ上げて、放心〳〵猪口を手に取らせしは、なか〳〵氣轉の妻とぞ見えける。

畢竟此場の納りは如何、次の編の出るを待つべし。

（巻之五十一終）

いろはぶんこ十八へんのはしがき

一日に一字學べば三百六十字、とは菅秀才の金言を、其手習子屋に因ある、外題に名におふいろは文字、まだ難波津をうろ覺えなる幼童さへ、忠臣義士の傳記の讀みよく、分解安きを專になん綴るをもて、或は俚語あり、假字違ひあり、素より大人君子等の覽に入るべきやうもなき、兒戯の冊子を今更に、ことごとし氣に恁く言はむは、嗚呼俺ながらくだ〳〵しかりき。

さるのとし　爲永春水

第百三回

さる程に忠助は、お匕が氣轉の口車に、流石否だと振切りて歸れぬやうに仕掛けられ、心弱くも猪口を取つて、酒が少し口へ這入れば、自と面の和ぐを見て、寸白縞に胸撫でおろし、覺えず太き息をつきしが、酒の座敷の取持は素より得たる業なるゆゑ、妻侶俱に種々と詞を盡して勸めしかば、忠助も既にしてはや微醉になりしにや、獨り莞爾〳〵うち笑みながら　忠「イヤお内儀さん、こりやアとんだ御馳走になりやした、私も實はこんなに緩宥と爲ては居られないのだが、今がたお前さんが、何か別に宜い工夫があるやうに言ひなすッたから、夫を聞かないでもと思つて、つひ御酒を頂いたら尻が居つて仕廻ひやしたが、其處でその工夫と言ふのは何樣いふ譯だネ　匕「ホ、、、、、、さう眞面にお聞きなすッては、何だか改つて申しにくいやうでございますから、まア最う二三杯飲つて少しお酒のまはつた處でないと、お咄が爲にくうございますものを　忠「そりやア御馳走だから何程でも飲みやせうが、斯して居るうちも氣が氣でないのだから、熟い咄ならまア夫を聞かせてお呉んなせへな　匕「ハイ、そんなら思切つてまうしますがネ、斯言つたら女の猿智恵とお笑ひでもございませうが、先の親御さんが姉にもやらぬ智にも貴はないと被仰るのは、獨女兒で可愛くッてならないから、歳は十六七になつてもまだ赤子の樣な心持でお在のかも知れません、夫でな

ければ、あんまり聟さんを選過ぎて迷つて居なさるのか、何れ其處等だらうと思はれますから、今の所では媒妁を入れて、表面どんなに手を替へ品を替へて言込んだからと言つて、迚もアイと返事をなさる事ではありますまい、其處で私の思ふには、其宗伴といふ人は茶の湯のお師匠さんをもなすツて、お弟子も大さうあるのに、其女兒さんもお茶が好で、同樣に稽古をなさると言ふ事でありますから、若旦那をもお茶の稽古にかこつけて、那内へ出這入りをさへ被成てお在なされば、折を見合せ袂の中へ、ちよいとお文をお入れなさる位な間はございませう、然さへ被成ば、縱ひ親御は逼屈なお方でも、今時の娘に十六七にもなつて色氣の出て居ない者はありません、處へ若旦那が那通りお綺麗と來て居ますから、急度熟いお和合にならずにはお在被成ませんヨ、然して内證が出來たうへでは、親御達が何と被仰らうとも此方の物でありますから、好な掛合が出來まさアネ、些惡法かは知りませんが、私の考では是が一番近道かと思ひますが、何樣でございませう　忠「なるほどこりやア氣が付かなんだ、なか〳〵お内儀さんも隅には置かれねへ、孔明其處退けといふ智恵を出しなすつたネ　七「アレサ、そんなに嬲つちやア否でございますヨ、是はほんの鼻元思案で、あんまり内の人が困る樣子を見かねて思付いたのでございますから、猶又お胸でとツくりと御思案なすツて下さいまし　忠「然サネエ、深く考へて見ると、先の親が嫁にも遣らぬ聟も取らぬと言つて居るのは、萬一其娘が小野の小町か、然ない處が何ぞ體に曰でもあるのだと、折角若旦那が骨を折つて附文をなすツた處がむだな譯だが、這處等は何樣爲た物だらうネ　サ「其儀ならば御心配御無用サ、私も最初から先の言分が丸斷りだから、若やと思つて近所の錢湯まで探索を爲て見やしたが、搗拔の新粉で拵へたやうな申分のない綺麗な體で、しかも肝心要の所まで晴と見屆けて置きやしたから、大丈夫請合サ

忠「そんなら夫は安心だが、扨狂言の筋は夫に爲ても、肝心の若旦那が女郎を一晩買つた事のない極の素息子と來て居るから、袂へ文を入れる氣轉から、その娘を熟く口說付ける口辯功があれば宜いと思ふと、夫もまた心遣だネエ　サ「ナニ其處は愚老がお附添ひまうして居りますれば、不間な事はおさせまうしは致しやせん　忠「又早呑込の安請合は御免だヨ　サ「ハテサ、然いふ事は愚老が素より得物で、夫でばッかりお飯を食べて居るのだから、寸咫はございません、假令急にその事が出來ない迄が、釜日の度に若旦那が那内へお出なすツて一所に稽古を爲ながら、その娘の顏を見てお在なさるばかりでもお氣が紛れて、御病氣の爲にも宜からうと思はれますから、旦那のお耳へ内々お入れなすツたうへで、若旦那をお勸めなすツて御覽じまし、其段取に極れば、お弟子入には愚老がお供を致しますト言ふをつく〴〵聞いて見れば、道理らしく思ふにぞ、忠助はうち點頭き　忠「なる程若旦那が内で考へ事ばかりしてお在なさるより、よしや出來ても出來ないでも、其處へ往つてお在なされば些は御保養にも成りやせうから、まアお勸めまうして見ると爲ませう、トキニお咄の間に放心〳〵やらかしたので、大御馳走になりやした、旦那が何を爲て居るかと嘸待兼ねてお在なさるだらうから、最うお暇に致しやせう　七「アレサまア宜うございますハネ、まだねッから欲りも爲ませんのにネエ　サ「斯お咄が極れば、些たア緩宥と被成ても宜いぢやアございませんか、私も漸う胸が落付いて酒の味が知れて來たやうだから、最う二三盃お突合ひなすツて下さいな、併しお七、お肴があんまりひどいノウ、最う夕魚屋でも來さうなものだ　七「忠助さんは鯣がお好だから、骨拔でも言つて遣りませうト立ちあがるを推禁め　忠「イヤ、お肴は是で澤山サ、最う何があつても頂けない、併し折角のお勸めだから是で最う一盃重ねてお披と致しやせう　サ「そのお披といふ口上を速く聞くやうに爲た

い物サネ、お急ぎと被仰るから無理にともお留めまうされませんが、一盃ではあんまりだから、寧て三獻で嫌妙がお預りと致しやせうト言はれて這方もなる口故、とう〳〵三盃引つかけて、暇乞さへそこ〳〵に御足して歸り往く、跡見送りて寸白が、ホット一息吐きながら　寸「まんまと首尾よく口車にかけて、預つた金も吐出さずに歸して遣つた　七「何だネ、まんまと首尾よくもないものだ、先刻はお前が青い息をも吐得ないで、ギウ〳〵言つてお在だから、あんまり見兼ねてお酒やお肴を取りに遣り、一口呑せて置いたうへで、那いふ趣向を咄したればこそ、忠助さんも機嫌が直り、嬉しがつて歸つたらうぢやアないか、然でもなかつたらお前は何樣する積だへ　寸「今日ばッかりは實に嘘ア大明神さまヨ　七「今日ばッかりもないもんだ、夫ぢやア平常は何だらうネエ　寸「エ、ナニ平常は山の神だから拜んで居るのヨ　七「大概にお爲ヨ、お前があんまりちやらッぽこが過ぎるから、斯いふ事にもなるのだから、此先若旦那を池の端へ稽古に連れて在も宜からうかネ、餘程氣を付けないと又しくじる事が出來るかも知れないヨ　寸「イヤモウ、今度の事は何と言はれても閉口〳〵、其替り此狂言が熟く當りやア、ずッしりお禮が來るから、お主にも芝居の一度ぐらゐは見せて遣らアな　七「私やア芝居より羽織が不良なつたから、お召縮緬が一反欲しいヨ　寸「ヨシ〳〵夫も買つて遣らうが、今日は那いふ理窟で呑んだせいか、酒が何處へ這入つたか些も酔はねへ、殘りがあるなら最う一銚子つけて呉んな　七「寐しなにお飲んなされば宜いのに　寸「ハテサ、燗をつけなと言へばヨト是より夫婦水入らずの又盃事ありと知るべし。

第百四回

斯て件の忠助は、立歸りて如此〳〵と主人に内々報知たるうへ、何というて勸めたりけん、瀧治郎は彼娘を十分爲て取る心にて、直にも弟子になりたきよし故、弟子入の贈物も竝より餘程心を用ゐ、扨寸白に同道させて宗伴方へ遣す程に、瀧治郎は如何にも爲て娘を我手に入れんと思へば、釜日といへば早晩とても人より先へ詰めかけて、透もあらばと覗ひしが、基宗伴の娘といふは、名をば阿糸と呼ばれつゝ今茲十六歳なれど、茶の湯においては弟子中に肩を竝ぶる者もなき最見事なる立前にて、稽古の席へ出るときは、男女の弟子どもうち交りて圍の裡に囲居はすれど、親の躾の嚴しき故に、萬の事みな内端にて、假初にも男に對ひ仇口ひとつ言ふ事なければ、顔見る毎に瀧治郎は只胸をのみ灼せども、文を送らん便もなく、空しく月日を過すにぞ、又つく〳〵と思案をなすに、那娘に言寄らんにも、茶道の業の拙くば無下に卑しく見落されて、望協はぬのみならず、最口惜しき事あらんと、是より稽古に身を入れて一心不亂に精を出せば、其度毎に寸白も同道をして那處にいたり、否々ながらお相伴にて倶に稽古はするもの、、茶の湯の供では三文のかすりの取れる譯にも往かず、酒一杯にもありつけぬに、斯いふ事に何時迄も掛合つて居るときは、腮の乾あがる事と思へば、如何にもなしてお糸をば瀧治郎に取持つて、何卒ずッしり世話料を熟くせしめて遣らんものと、欲に心を苦めつゝ、お糸はさらなり宗伴夫婦の氣に入る樣に取入つて、折もあらばと覗へども、根が武士の果ほどありて家内殘らず物堅きに、お糸は常に行儀正しく、色氣と言うては毫程もなき眞の未通女なりしかば、言寄る方便の更になく、流石の寸白我を折りて、詮術なさに是もまた阿容阿容光陰を送りしとぞ、然ればまた宗伴は、茶の湯と鑒定と兩方にて諸方の屋敷に立入る程に、商賣は道具屋なれど、人に先生〳〵と立てらるゝ故、自ら内證の都合も至極宜く、日毎に人の馳走にて美味をば口

に喰ひ、眼には好める器物を見て最面白く世を渡れば、宗伴は腹の裡にて、能くぞ赤穂を退身して市人にはなりしなり、究屈な袴大小、縞の襦に身をしばられ、常に天窓を押へられては此樂はなか〳〵出來ぬ、モウ〳〵武士は懲果てたと、獨りすました顔を爲て何不足なく暮せしが、或日本庄の諸侯方より夜込のお茶に召されしに、俄に半鐘を打鳴して、火事よ〳〵と喚はる聲に、何處ならんと尋ぬるに、はじめは本郷通りといひ又は駒込遊など言へるに、折から風も烈しければ些方角が悪いと思へど、お客と言ふも都て皆、お歴々の事なる故、自由に歸る事にもならず、心ならねど座に連りて酒の取持などするうち、當家の火元見立歸りて、火事は池の端なりとの屆に、宗伴駭きて、今は猶豫のなりがたきに漸暇を乞請けて、屋敷を出るとその儘に一もくさんに駈付け見れば、奈何にせん其火事の隣の家より燃出せしに、風下なれば堪らばこそ、家内の者の怪我もなく立退きしといふばかりにて、家はさらなり土藏まで皆丸燒になりしかば、流石の宗伴がッかりして、又つく〴〵と思ふやう、我身以前の武士ならば、家屋敷家財迄殘らず類燒したりとも、殿より夫々手當も下り又食祿もあるなれば、左程困りもすまじきに、町人の身の悲しさは、斯丸燒になつて仕廻へば箸も持たぬ乞食同樣、昨日までも町人が氣樂で宜いと言うて居たが、是にて思へば過ぎし日に、風間が歸參をすゝめたとき賴んですれば宜かりしに、斯成行くも殿樣を後に爲たる罰ならんと、頻に先非を悔みつゝ、又武士になりたくなるとは、然るにても此男程心の變り易きはあるまじ、然れども宗伴は茶の湯の弟子も夥あり、出入屋敷も夫々あるゆゑ、火事見舞とて板木を贈り或は米味噌醤油の類、又は普請にお手支なら、金子を用立申さんなどと言うて呉れる者もあり、宗伴は此地へ來て、はじめて火事に合うたる事故、がッかり力を落せしが、諸方より物を惠まれ、何樣やら斯やら燒跡へ以前の如く

家を營み、燒前よりも商賣の反つて繁昌したりしかば、是は又武士ではなか〳〵もつて出來ぬ僥倖、さすれば我が町人が身に相應せし業なりと、又もや憶ひ直せしとぞ、然れば恁まで氣の變る男にてはありしかど、古主の恩義は忘れざりけん、義憤の仇を討つにいたりて一臂の力を添へたる事あり、その故を奈何にといふに、類燒せし年の四月中旬の某の日に、當主鹽谷判官には、高野師直を刃傷に及び、其身は切腹家國は改易したりと聞きしより、うち駭くこと限りなく、おのれやれ師直と拳を握りて怒りしかど、身は市客となりさがりては奈何にとも詮術なく、空しく月日を送るうち、夫とはなしに師直の樣子を竊に探索せしに、渠は常に茶を好みて、諸侯方のそのうちには、同好の茶友もあるよしなれば、我かの屋敷に取入つて、折を窺ひ先君の、怨を報ふ手便もあらんと、心付はしたれども、恁までの大望を身ひとつにては施しがたし、殊更に御國には大星殿をはじめとして、忠義をおもふ武士のなきにしもあ

らざれば、憶ふ仔細を試にまうし出せしその上にて、事を計るにしくはなしと、豫ての信友なるのみか、俳道にて今も猶内々風交なすところの、大鵜子葉風間素曉に竊に對面なしつゝも、心底うち明け物語れども、例の心の定さらぬ宗伴にてある故に、大星の密意をば迂闊には洩さゞるを、猶幾度も宗伴が、或は怨み或は怒りて、禁止る氣色のあらざるにぞ、兩個も今は默止がたく、頓て大星の内意を歴て後、宗伴にうち對ひ、御心底の趣は大星殿をはじめとして、我等においても感じ入る、仍て密事を告ぐるなり、その故は恁々と、申合せし兼ての方便の其荒増を物語り、おん身は主家を退去せられて、今は市客の事なれば、一味徒黨は協はねども、猶舊恩を忘れずとなら、師直の邸に入込み、彝の動靜を探聞きて、義黨の者へ知らされんこそ是拔群の忠功ならめと、言はるゝ所の理なるにぞ、宗伴も感服して、此うへは兎も角もして便宜をお知らせ申さんと、堅く約して別れしが、師直が方にても、判官切腹ありし後は、倘鹽谷家の浪人が、主君の讐を報はんとて討入るまじきものにあらずと、家須義より附人として、かの小林平八郎等、何れも一流の免許を得し者多人數警衛做す程なれば、門の出入はいよ〳〵嚴しく、是迄立入の者の他は、僧長袖の類なりとも、新規の出入は協はぬよし故、宗伴是には當惑して種々工夫なしけるが、ふと思ひつく事あれば、或日妻のおさめに對ひ　宗「おぬしは何と思ふか知らないが、お糸も今年は十七になるのを、何時迄も子供の樣に思つて居ると、惡い蟲の付くやうな事もある物だから、寧の事口を見付けて、緣付けたはうが宜からうかと思ふに就いて、誰を智に爲たものかと此間中から考へて見るのに、毎日内へ稽古に來る那瀧治郎は、人柄といひ立廻り迄とんだ溫和な息子で、其上にあの子の親の富多屋萬兵衛と言つちやア他も知つた大金持、然して見るとまア、娘も此内に居るよりは出世といふもの、孰れにしても一度は嫁に遣るか智を取るか爲にやアならない間で見ると、何緩れの竹の子のやうに、あんまり丈を伸過ぎさせないうちに、遣る物なら遣つて仕舞ふ方が安心ぢやアあるまいかト言はれておさめは腹の中にて、日頃娘を手放す事はならぬと言うて居た夫が、數から棒にお糸の緣談、合點ゆかずと思ふにぞ、宗伴の顏うち守りて須臾言葉もなかりける。

（卷の五十二終）

正史實傳 いろは文庫 巻之五十三

第百五回

然ればおさめは丈夫の辭を不審には思ひながらも、常々心の變り易いを呑込んで居る事ゆゑ、爾あらぬ體にて莞爾笑ひ　宗「オヤ、貴公はまア何と思つてそんな事を仰しやるのか知りませんが、私は最う欲から那嬢を内へ遊ばせて置いては爲にもなるまい、何卒一年でも御奉公をさせて、他人の中を見せたいと思つて居るのでございますがネ、夫には相應に仕度も掛りますのに、類燒にあつたり何か爲たあげくの事だから、夫はまア思切りも爲ませうが、他に男の兒のあるではなし、一粒種のお糸を嫁にお遣りなすッて、跡は何樣なさる思召でございますエ　宗「ナニサ、こんな痩身上の一ッや二ッ何樣なつたからと言つて構ふものか、全體赤穗で二百石といふ、御先祖さまから下さつた株家督さへ打捨つて、自分の好でこんな眞似を爲て居るのだから、自己一代で仕舞つた處が心の殘ることはない、夫とも跡が立つやうなら、廊に居る者のうちを誰ぞ選んで、養子に爲た處が事は濟むはな　おさめ「ソリャア内の身上に競べて見ると、百倍も增した富多屋の事でございますから、那嬢は僥倖に違はございませんから、私も然なれば嬉しうございますが、其お心があるなら、先達て寸白さんが來て、那嬢を富多屋へ媒妁を爲たいと言つた時に、あんなに手強く斷らないでお置きなされば宜かつたに、私やア那時側に聞いて居てさへ、寔に氣の毒なやうでなりましなんだヨ　宗「イヤ夫をおぬしに言はれると額に汗が出るやうだが、那時分まではひとり女兒の事ではあり、なかなか脇へ手放す了簡は無かつたから、ツイ手强な挨拶を爲たけれども、今となつては女兒ひとりに換へられない場合になつたから　おさめ「エ、何が女兒に換へられませんエ、ト咎められて宗伴は胸にギックリ對へしが宗「ナニサ、今も言ふ通り惡い蟲でも付くと、娘ひとりに換へられない恥をかく事もあらうと言ふ事サ　おさめ「夫だから私も、御奉公にでも出したいと申したのでございますヨ、夫ぢやア富多屋へ遣る事に内々極めたにも爲ろ、一旦先から言込んだのを堅く斷つた口上があつて見ますと、今更這方から貰つて下さいましとは、まさかに言出しにくいではございませんか、夫よりも貴公が緣付ける氣におなんなすッたら、富多屋ばかり日は照りやア爲ませんヨ、然言つちやア可笑しいが、お糸の容貌なら隨分那内に負けない身上柄の所から、何程も口が掛つて居ますから、寧の事他に被成た方が宜いぢやアございませんか　宗「イヤ、自己は富多屋の息子が氣に入つたから、其處で急に遣りたくなつたのだから、他にどんな口があらうとも、見替る了簡は更にないノサ、併し最初に立派に斷つた廉があつて見ると、口が腐つても進げませうと言はれた義理でもないが、其處を何樣か宜い工夫で緣談の整ふ仕樣はない物だらうか、變つた方便を考へて見て呉れまいか　おさめ「左樣サネエ、私には他に斯と新作意もございませんが、那富多屋の緣談を斷つて間もなく瀧治郎さんが稽古をはじめて、今でも忘らずに釜日の外にも來て、道具の鑑定なんぞを習つたり何か爲なさる樣子が、稽古は附けたりでお糸に心があつての譯ではあるまいかと思ひますから、女兒も年頃ではあり、萬一どんな事でもあつては取返しの出來ない事だと、瀧さんがお糸と差向にでもなるやうな時は、氣を付けるやうに爲て居ますせいか、まだ戯言口をひとつ利いたのを見た事もございませんが、然して見ると

這方で手強く斷つたのを富多屋で腹を立つたら、瀧さんを稽古によこしさうもない筈の處を、構はずに來るのは、先でも氣のあるやうに思はれるぢやアありませんか　宗「なる程、こりやア宜い處へ氣が付いた。自己も敏から富多屋は奈何に金滿家だと言つて、五節句其外の附屆、又今度の類燒見舞も、他の弟子とは格別に、大さうに氣張つた事だと不思議に思つて居たが、然いふ先に下心があつての事とは憶付かなんだ、夫が實正なら願つたり協つたりだから、這方から少し餌を出しさへすると、直に喰付くのは見えて居るが、ならう事なら先から頼ませて　據　なく遣るやうにすると、大きに都合の宜い理窟があるのだが、何樣か熟い仕方が有りさうな物だがト　暫く手を組んで考へしが　宗「ヤ思付いた事がある、萬一誰ぞ聞いて居ると惡いから、耳を出しなト言ひながら、おさめを側へ呼寄せて　宗「の、の、何樣だ斯いふ計略は　さめ「ホホ、、、奈何なこツてもそんな事が　宗「ナニサ、構ふ事はないから遣つて見るが宜いはな　さめ「夫だつて先がいよ〳〵然いふ氣だか、まだしッかりと知れも爲ませず、又丁度這方で誂へたやうな都合にいくか、何樣だか分りませんぢやアないか　宗「イヤサ、今言つた手管のやうにいけば重疊、間違つた處が元直に爲かねるといふ譯でもなし、夫で先の腹が知れるぢやアあるまいか、併し是は自己の手際では出來ない仕事だから、孰れおぬしが一骨折つて呉れないぢやアならねへぜ　さめ「そりやアお前さんの言付だから、私に出來る程の事なら爲ても見ませうが、親が承知で娘にそんなをかしらしい事をさせるのは、譽めた咄でもないぢやアありませんか　宗「ナニ夫も眞實のことを遣らせては、女兒に生涯淫者の名を負せるやうな譯だから、只その切掛を見るばかりのことにして、跡はおぬしの辯口で熟い都合になるやうに、何樣とかごまかすが宜いぢやアないか　さめ「何だかこんな事は爲つけないから、芝居でゞもありさうな事のやうで、極りが惡うございますネエ　宗「マア何でも構はないから遣つて見るが宜いはなト夫婦竊に相談を爲て、或日瀧治郎が稽古に來りし折を見合せ、おさめは他の咄の序に　さめ「瀧さん、先生がネ、此間から空が催して居るから大かた雪になるであらう、降出したなら初雪の茶を催すから、お前さんに寸白さんを連れてお出なさるやうに申して置けと言ふ事でございますヨ、併がまだお相客の處が極り兼ねて居ますから、他の連中には先御沙汰なしが宜しうございますはサ　瀧「オヤ夫は寔に有難うございますネエ、夫では雪さへ降れば、何時でもお催しになるのでございますか　さめ「ハイ、まア其積でございますが、孰れ其節には、刻限や何かも取極めて御沙汰を致す事と爲ませうから、お使を進げたら間違なく御出なすッて下さいましョ、そしてお稽古にするのでございますから、禮服には及びませんから常の召物でよいと申す事でありますヨ　瀧「ハイ　ハイ畏りました、先生に宜しくお禮をお願ひまうしますとて、此日は別れて歸りける。

第百六回

爾ればまた瀧治郎はお糸の色香に深く迷ひて、忘るゝ隙のなきまゝに、かの寸白が勸に任せ、宗伴方へ入門してより一年越に及べども、お糸は常に行儀正しく、男女の別を堅く守りて、假初にも差向などにて一間のうちに居る事あらねば、言寄る便の更になく、折々思に堪へかねては寸白を責むれども、恁る筋には熟達して拔目あらざる寸白なれど、此取持には安酌果てしが、此儘止めれば親萬兵衛より出させた金を、産出して返さねばならざる事故、其内には愚老が働き、お糸をお手に入れますれば今少しの御辛抱など、口から出次第言拵へて、徒に月日をおくる程に、思は遂げねど瀧治郎は、顔見るばかりを心やりに猶

怠りなく通ひしが、此日は朝より空かき曇りて今にも降るべき體なる故、稽古も休みて我部屋に鬱々として居る處へ、例の藪醫者寸白が案内もなく入來り　寸「イヤモシ若旦那、お誂への雪が降出して參りやしたぜ　瀧「エ、實正に降るのかへ　寸「實正の段ぢやアごせへせん、君は障子を建込めて何時も物思ひの體でお在なさるから、知らないでお在なさるだらうト言ひつゝ、緣側の障子を明けて　寸「アレ御覽じろ、綿をちぎつて投るやうな、大粒なのが交つて降つて來ましたから、初雪に爲ちやア隨分積りさうに見えやすぜ　瀧「なる程是は本降になつたやうだネエ　寸「モシ是ぢやア池の端から急度お約束のお使が來やせうぜ　瀧「使が來た處がつまらないはな　寸「ナニつまらねへ事がありやすもの、御使の來次第に、是非とも駕を促さる事とぞんじましたから、僕もお供の心得で支度をいたして參りやした、今日はさし詰濃茶がありやせうから、彼君が可愛らしい口元で一口喫んだその跡を頂戴するばかりでも、實に千兩の直うちはごせへやすゼ、頓て愚老が匕加減をお目に懸けやすから、戀性でばかりお在なさらねへで、些うき〳〵と被成が宜うごせへさアな　瀧「どうせ私の望は協ふまいと思ふから、寧死んで仕舞うた方が樂で宜からうかと思ふヨ。

寸「又そんなつまらねへ事を被仰います、貴公も男ぢやアありませんか一旦斯と憶込んだ女なら、邪でも非でも夫婦になつて、百萬年も長壽をして添遂げ樣と思はねへぢやアなりやせんゼ、あんまり君のお心が弱過ぎるから、僕が肺肝を苦める事最甚しサ、其處等は少し御推もじあつて然るべしサネ、ト自分獨で呑込んだやうに喋り廻して居る折から、一個の下女が次の間の襖を明けて顏を出し　下女「アノウ、池の端からお手紙が參りましたト言ひつゝ、文箱をさし出せば　寸「そりやこそおむかひでございます、速く明けて御覽じましな　瀧「私は讀むのも面倒だから、お前其處から讀んでお聞せ　寸「どうも夫だから困ると申すのサ、併し御意に逆らつては恐入るから、然らば愚老が讀上げませうト言ひつゝ、文箱の紐を解き、中なる手紙を打見やりて　寸「ハテナ、瀧治郎樣へ、鏑屋内と書いてあるから、お内儀さんの處から來た樣に見えるがト言ひながら封を切つて讀下し　寸「ヒヤア、是は希代きてれつ妙不思議、天道若旦那を守護給ひて、日頃の念願協ふと言ふ知らせであるか厚い　瀧「何だネエ大きな聲をして、肝を潰すハネ　寸「モシ、何だ所ぢやアありやせん、實は妙でげすヨ、まア此手紙を御覽なせへ、兼々御約束ゆゑ一會相催し度、折から宗伴事は持病氣にて出席を致しかね候へども、此初雪を只に見過し候半も殘惜しく候まゝ、不都束ながら亭主は娘に致させ、夜込の茶催し候まゝ、夕刻より呉々も御入の程待入り〳〵サ、何樣でげす邪魔になる老人は病氣で、お娘が名代とは羊羹へ砂糖を付けて喰ふより味い都合ぢやアありませんか、其上夜込と言へば猶の事、一寸した暗まぎれに、兼てのお文をお糸さんの袂か懷へ入れる位の手品は遣はれない事もありやすめへ、何でも此雪は結ぶの神に違ござりやせんゼ、ト言はれて瀧治郎も少し元氣の付きたる體にて　瀧「夫ぢやア使の人に有難うございますと言つて遣らうかネエ　寸「イヤ有難う位な事ぢやアいけません、お刻限迄には相違なく上りますと、一筆書いてお進げなさるが宜うござりやせうト言ふゆゑ、瀧治郎はその通りをさら〳〵と返書に認め、是を下女に持せて遣れば　寸「偖是で先今夜の處は極つたと言ふものだが、いくら日が短いといつても、夕方迄はまだ餘程間がありますが、エ、モシ若旦那、何でも物は祝柄といふ事もありやすから、前祝に一盃頂戴は何樣でありやせう　瀧「お酒は進げも爲やうが、お前に醉はれると私が困るネエ　寸「ナニそんなに醉ふ程頂戴は致しやせん、言はゞ今夜は天下分目の大合戰に、此雪中を出陣をするのでありやすから、些は勢を付けて往かないぢやア高名手柄は十分に出來やせんノ

サ　瀧「ハ、、、、宜く色々と名を付けて呑みたがるネエ、ト言ひながら以前の下女を呼出し　瀧「寸白さん、私にやア何を取つて宜いか知れないから、お前の好物を何でも然言つてお造り　寸「是は有難山の鳶烏といふ御意が出ましたネ、そんならお玉どん（下女の名なるべし）鳥鍋を一枚にお作身を一人前、酒は三銚子に過ぐべからずサ、宜いか分解つたかネ　下女「ハイ〳〵　寸「よしか三枚並だヨ　下女「エ　寸「ナニサ、大急ぎと言ふ事ヨ　下女「ホ、、、ト笑ひながら立つて行きしが、程なく誂への酒肴を持出す　瀧「玉や、寸白さんにお酌を爲て進げな　寸「イエ酌は婦女と申しやすが、此お玉の君のやうなお尻の大きいのが側へ居ると、お座敷が狭くなりやすから、愚老は矢張獨酌が勝手でごせへやす　下女「アレまア口が惡いヨ、覺えてお在なさい、お酒がなくなつても、お銚子替りを爲て進げないから　寸「オット閉口、其時には手を鳴すから何卒來て下さい　下女「否な事、誰が呼んでも來ますものか　寸「おぬしが來ないと性を張れば、今にも若御新造さまが出來て芝居へ被爲入とき、玉はお供にはお連れなさいますなと申上げるが何樣だ　下女「宜うございます、お前さんのお世話にならないでも、私が願つてお供を致しますヨ　寸「然言はれちやア詮方がねへ、モウ〳〵愚老が謝罪るから、何卒お酒の替りはお頼みまうしやす　下女「ホ、、、、然お言ひなら堪忍して進げませうネエト戯談を言ひながら出て行く　寸「ハ、、、、那女中は口がへらねへから啐つても負けねへので面白いト言ひながら、手酌にてはや八九盃も引きかけしかば、少しほろ酔になりしと覺しく　寸「ア、宜い心持になつた、是ちやア雪が降らうと鍵が降らうと、大丈夫なものでごせいやす、夫は然と若旦那、お糸君へ進げやうといふお文は持つてお在被成ますか　瀧「ア、、過頃書いたのを、遣る事が出來ないから其儘にして持つて居るノサ　寸「ありやア慥去年の六月時分でありやしたネエ、暑い盛にお書きなすッた文を、寒くなつてからお進げなすッちやア時候違になりやすから、今夜の雪を文言の中へ何樣か面白く書込んでお進げなせへ、先が茶人の上に歌俳諧も出來ると言ふ咄だから、文の書體梅で、那お嬢がグット請けるに違ござりやせんゼ　瀧「夫だつて私にはそんな面白い文言なんぞは書けないものを　寸「何も愚老の前でそんなにお卑下しなさる事はありやせん、僕なんぞこそ無雅夢中の人足だから詮方がありやせんが、君は漢學は素より和學も被成て見れば、此位な事はお茶の子でありやせう、何でも先の心の動くやうにするのが肝要だから、僕が御酒を戴いて居るうちに、熟く一通お書きなさるが宜いト言はれて瀧治郎も、何樣がなお糸を手に入れたさに、工夫を凝して細々と思の丈を綴りたる艶書一通認めて　瀧「何樣もくだ〳〵敷ばかりなつて、思ふやうに書取れないヨ　寸「ドレお見せなさいト讀んで見て　寸「是は實に奇々妙々、至れり盡せりとは此事でありやせう、是を先へ手渡しさへすれば、どんな久米の平内さまの娘でも、なびく事請合サトいふうち彼是申刻にもなれば、寸白は酒を仕舞ひ　寸「さア若旦那そろ〳〵お仕度をなさいまし、先の都合は先の樣子にすると致しやせうト是より瀧治郎は衣服を改め、一個は裙に打乘りて、池の端にいたりし頃ははや黄昏にぞ及びける。

（巻の五十三終）

正史實傳 いろは文庫 巻之五十四

第百七回

偖もその日の夕方に、瀧治郎と寸白は宗伴が方へいたればおさめは一間に立出て　さめ「オヤ瀧さん、寸白さんも御同行に、宜くまア降るのにお出被成たネエ、雪があんまり強くなつたから、萬一お出がないと不良がとお噂を致して居りましたヨ　瀧「ハイ、先程はまた態々お使を下さいまして有難うございます、承りますれば、先生は些御持病氣で被爲入とまうす事でございますが、奈何お在被成ますエ　さめ「ハイ、ナニ持前の疝癪でございますから、きつい事はありませんヨ　寸「兎角疝とまうすものは、雪などの降るのを知つて在つて起りたがりやす、何樣かお冷えなさらないやうにお手當が宜しうございます、夫は然と、まだ他の御連中方は御出席はござりやせんかネ　さめ「寔に不宜のでございますヨ、他にお二個ばかりお約束をして置いた處が、此雪におそれてか御斷でございますノサ　寸「へ、エ、夫はおあいにくな事でありやしたネ、左樣なら御不連故今晩は御休會とでもまうすやうな　さめ「イエ〳〵、折角お糸が樂にして催したのでございますから、貴公方さへ御出席があれば致す積でありますがネ、夫にしても宿でも病氣、お約束のお方はお斯で見ますと人が足りませんから、お糸が宿の名代に亭主を致して、御上客が瀧さん、末座が寸白さん、其足らずまへに私がお客の中へ這入る積に致しましたヨ　瀧「私には上客は出來かねますから、何樣か貴女が上にお居ん被成て下さると宜うございますネエ　さめ「とんだ事を被仰る、私のはほんの見覺えて居るといふ分の事でありますから、貴公方の間へ人數に入れて頂くのでございますヨ、ホ、、、、夫に爲てもまだ少し刻限が早うございますから、御案内を致すまで這處で一服召あがつて居て下さいましト言捨て奥へ行くにぞ、跡を見送り小聲にて　寸「モシ若旦那、今夜の首尾は極妙でごせへすぜ、老人が病氣のうへに他の連中が來ないとは、誂へても斯は出來やせん、何でも此闘を外すべからずだから、愚老が都合を見計らつて眴を爲たら彼文を直に出して、手渡しにならずば愎へでもお入れなさい、其上にもまだ能い首尾なら、手短く咄をお付け被成まし、其時先で承知を爲かねる樣子なら、愚老の此短刀をお貸し申して置きますから、是を拔いて死ぬ眞似を被成まし、大體は夫を見たら得心をするやうになりやせう　瀧「そんな事を爲たら、跡で六ケ敷なりは爲ないかへ　寸「ナニ少し位六ケ敷なつても、愚老が跡に控へて居れば大丈夫でありやすから、贈玉を大きくふくらがして平氣でお進んなせへ、大願成就疑なしサト竊に囁き語らふ折しも、おさめは再び出來りて　さめ「さぞお待ちどほでございましたらう、さア這方へト言ひながら、三個連立ち待合にいたれば、お糸は亭主役なれば、此處まで出迎へて圍の裡へ伴ふ手綬、總て千家の作法を崩さず、瀧治郎は二年越し心を入れて學びし事ゆゑ、客振と言ひ挨拶體まで、初心ならねば拙からず、偖廻服も濟みて頓て會席の出る前になり、一個の下女が圍の口より顔を半分さし出して　下女「お内儀さん一寸ト呼び立て、何かひそ〳〵囁けば　さめ「オヤ然かへ、夫ぢやア今直に參ると然まうして置きなト言ひながら元の座へ歸りて　さめ「アノウ、急に少し用事のある人が參りましたが、宿で臥居て居りますから一寸挨拶を致して參りますヨ、お糸お前は這處に居て皆さんのお相手になつてお在ヨト

言ふをうち聞く寸白は、此上もない上首尾と思へば、覺えず莞爾〳〵爲ながら　寸「イヤお内儀さん、お客様でございますなら、少しもお構ひなく御ゆるりと被爲入まし、其間は愚老が何か面白いお咄を思出して御退屈のないやうに致して居りやすから　さめ「オヤ夫ぢやア寸白さん、何分お願ひまうしますト言捨て直に立つてゆくにぞ、爰ぞと思へば寸白は頻に隣へ眴を爲て、速〳〵文をと知らすれども、氣の小さそのうへに、二十歳は越せども瀧治郎は、若い女と親しくは物さへ言うた事のなき故、思は胸に餘れども、流石に文を出しかねて、只喘嚅いて居る體を、寸白は見て迂しく、瀧治郎が懷中せし文を自己が受取つて　寸「エ、モシお嬢さん、貴公もお歌がお好だとまうす事でございますが、此若旦那が此間お綴り被成た歌の文章、餘程面白く出來て居りやすから、一寸お讀みなすッて御覽じまし、ト態と上書もなく封もせぬ文をお糸の側へさし出せば　糸「私やア歌なんぞは詠んだ事がございませんから、拜見を致しても分解りますまい　寸「イエサ、其處が然でないと言ふは、歌詞計りでなく餘程妙に綴り立てありやすから、草双紙を見るより面白うごせへやすぜ　糸「オヤ然でございますかへ、私が見てわかるか知れませんが、そんな面白い物なら拜見致しませうかネエト言ひつゝ文をおし開き、何心なく讀む體故、爲すましたりと寸白は、小用の振にてその座を外し、庭の方へと立出でしが、雪はいよ〳〵強くなり、天窓へばら〳〵降りかゝるにぞ、是ではならぬと四邊を見廻し、最前彼處の待合より覆ひ來たりし竹の子笠を、これ幸と引冠り、軒の小蔭にかゞみつゝ、障子にちひさき穴をあけ内の動靜を窺ふ程に、お糸は何の氣も付かず彼玉章を讀下せば、思ひがけなき艶書にて、お糸の君へ白瀧よりと我名宛さへ認めあるに、はッとばかりに駭きしが、まだ初戀も知りやらぬ、未通女の事なれば、斯言ふ時には何樣いうて、何樣爲て宜いとも分別がたく、只恥かしさがいつぱいに、赤らむ顔へ玉章をおし當てたる儘さし俯向き、何と調もあらざるにぞ、外より窺ふ寸白が、咳樣子では娘の方もまんざら否な體にも見えぬ、今が寃に宜いしほなるを此圖を拔かさず瀧治郎が、思の丈を箇樣〳〵と速く言へばよい事にと、獨り頻に氣を焦燥ちても、間の惡さうに瀧治郎は手をもじもじと爲るばかり、言出しかねて居る體ゆゑ、寸白は堪へ兼ねて障子の穴より扇を出し、速く〳〵と小聲で言ひつゝ、瀧治郎の脊中をつゝけば瀧治郎は思切つて　瀧「お糸さん、其文章は貴女のお氣に入りませんかト怖々ながら言掛くれど、お糸は無言て俯向いて居るゆゑ、はや二言とは次ぎかねて、這方も同じく無言て居るを、寸白は見て齒痒く思ひ頻に扇で脊中をつゝけば、瀧治郎は又小聲にて　瀧「お前さん眞實にお氣に入らないのかへ、然でなくばお返事を被成なト言へども、お糸はいよ〳〵顔を眞赤にして俯向いた儘、ウンとも言はねば瀧治郎も此先を何と言うたら宜からうやと、頻に胸を聽かすのみ、又もや辭の絶ゆるにぞ、蔭で見て居る寸白が、はや鍔元まで責詰めたれば手に入れるのは譯もなきに、奈何に内氣な息子だとて、咳調子では今夜一晩かゝつたとても果しはつくまい、寶の山へ入りながら此儘濟すは殘念至極、何樣か爲やうはあるまいかと獨り氣を揉む其處へ、庭の切戸をおし明けて思ひがけなき此家の内儀が飛石傳ひに入來り、今寸白が笠を冠りて軒端にかゞみて居るを見て　さめ「オヤ寸白さん、何故そんな所に躾れてお在なさいますエト言はれて流石の寸白も、今更當意卽妙の言遁るべき辭もなく、困り果てぞ居たりける。

第百八回

然ればまた寸白は惡い處をおさめに見られて、須臾回答にさし詰りしが、常々からして鐵面皮生れなれば、

平氣な顔にて　寸「オヤお内儀さんでありやすか、恐老は一寸小川に出ました處が、餘り雪の景色が妙でありやした、ツイ放心と詠めて居りやした　さめ「オヤ貴公小便場は外にはございませんヨ、よもや庭へなさりも寫ますまいネエ、そして雪を詠めるのに、何故障子へ穴を明けて圍の中をお覗き被成のでございますへ　寸「イヤ恐老が需めて明けたとまうす譯ではありやせん、ツイ短刀の鐺が障つて　さめ「オヤ〳〵、さう被仰つてもお腰の物はないではございませんか、ト言はれて、はじめて瀧治郎に貸したる事を思出し　寸「イエ、短刀ではない扇子の蟹目が障つたのでとんだ麁相を致しやした、へ、、、ト間の悪さうな顔にて笑ふをおさめは聞捨てながら、圍の中へ這入つて見れば、瀧治郎は片脇を向いて塵の塵を捻つて居れば、お糸も俱に顔をそむけて恥かしさうな體なるを、おさめは合點が行かぬといふ顔を爲ながら找み寄り、お糸の側におし擴げてある以前の文を手に取りて、始終を讀下し　さめ「お糸、是は何樣爲たのだへ　糸「寸白さんがト言つたばかり、袂を顔におし當てれば、おさめは獨り點頭きながら　さめ「寸白さん一寸爰へお出なさいまし　寸「ヘイト手をもじ〳〵しながら内へ這入り　寸「何ぞ御用でありやすかネ　さめ「ハイ、此書いた物は何でございますエ　寸「エ、、夫は何でかございましたッけ、オ、ソレ〳〵、昔深草の少將が小野小町へ遣した文だとまうす事で、寫して置いたのをお嬢さんにお目に懸けたのでありやすノサ　さめ「オヤ、夫ぢやアお前は人を盲人だと思つてお在なさいますか、此文を娘に渡し、爰を外して端下に躾れてお在なすッた樣子、偖はお前は二個の中の取持を被成のだネ　寸「イエ全くもつて左樣な事を　さめ「ナニ爲ない事がありやすものか、殊に此文は瀧さんの御自筆、白瀧とは隱名でございませう、是でも戀の取持でないと言ふ言譯がありやすかト言はれて流石の寸白も、回答に困りし體を見るより、何思ひけん瀧治郎は、かの寸白が貸して呉れたる短刀すらりと抜きはなし、既に自害と見ゆるにぞ、慌忙く寸白と、俱におさめも抱き禁め　さめ「モシ瀧さん、何故そんな浮雲事をなさるのでございますエ、ト問はれて瀧治郎ははらはらと泪を落し　瀧「何樣も面目なくッて息のあるうちは申されませんから、何卒放して死なして下さいし　さめ「是はしたり、何もそんな短氣な事を被仰るには及びますまい、先その譯を一通り言つてお聞せなすッたら、品に依つて又何樣か仕樣もあらうぢやアございませんか、ト言ふうち寸白は漸うにして短刀を取上げ鞘に治めて　寸「モシ若旦那、貴公のお心の裡は恐老がお察しまうして居りやすから、言ひにくいと被仰るのも御無理とはぞんじやせんが、お内儀さんが此樣に事を譯けてお聞きなさるのだから、何もかも打明けてお仕舞ひ被成が宜いぢやアありませんかト言へども瀧治郎は無言込んで、更に辭もあらざるにぞ　さめ「さう無言てお在ぢやアこまりまさうネエ、寸白さんお前さんが譯を知つてなら、言つてお聞せなさいなト言はれて寸白天窓を撫で　寸「實は些お咄の致しにくい譯でありやすが、一體此若旦那が書物にばかり凝入つて、まだ吉原の大門が何方を向いて居るか御存知のないと言ふ處から、萬一氣鬱の症でもお被し被成てはならないと親公さまがきつい御心配、其處で恐老に命じられて、何處ぞ遊山に勸め出して呉れろといふ事故、先淺草と出かけて、奥山の茶店で休んで居るとき、貴家のお嬢さんをお見初め被成たと申す譯サ、其處へ往つては妙な物で、是迄子曰より他を見返つた事のない若旦那丈思込も又強く、何でも此お嬢さんより他にやア世界に女のないやうに思召して、是非貰ひたいと被命るから、親公さまも御承知で、偖先達て恐老が内々御相談に上りました處が、以ての外の御挨拶でお斷になりましたので、夫からと言ふも

のは此若旦那がぶら〳〵病、迚も望が協はないからは此盛死ぬと被命るから、親公達は言ふに及ばず愚老迄が心を痛めて、種々工夫を爲て見やしたが、他に思案もありやせんから、此上はお嬢さんと若旦那の中さへ熟く出來て居れば、何樣でも跡で咄の付く事と思付いたお茶の稽古、實は濟まない譯でありやすけれども、若旦那のお命には換へられないと此惡方をかいて見やしたが、物堅いお嬢さん故是迄言出す便もなく、文を付けたも今夜がはじめて、處をお前さんに見咎められたのだから、氣の小い若旦那、面目ないと覺悟を被成たのでありやせう、お内儀さんのお心持では、大事な女兒を淫者に爲やうとした憎い奴とも思召しませうが、若旦那のお心をも些は御推量被成て下さへやしト辯に任せて言拵ふれば、おさめは須臾うち案じて　「なる程段々のお咄を伺つて見ますと、不都束な娘を命に換へてもと思つて下さる御眞實は、親の身に取つても嬉しうございますが、夫ならば又其やうに被成方もありさうな物だのに、今夜のやうな不始末をして、是が世間へ知れた日にやア、お互に外聞を晒さにやアなりませんヨ、併し夫程迄に思詰めてお在なさるのを、是切にして仕舞つたら、所詮望が協はずばと又瀧さんがどんな不了簡を出しなさるまい物でもない、然なるときは御兩親のお歎はどの位、子を持つた親の心は誰しもおなじ事でありますから、私が智惠を付けるでもないが、今被仰つたのが眞實なら、表向改めて緣談を言込むやうに被成まし、此上宿で何とまうすか知れませんが、其處は私が何樣とも言ひなして、御相談の整ふやうに爲ませうから、瀧さんも機嫌を直して、かならず不了簡をお出しなさるなヨト言ふをうち聞く寸白が、先は計略その聞にあたりて、一年餘り面白くもなき茶の湯の供を爲て來たも此緣談が整へば、一廉の謝禮を受けて仇骨折つた埋草が、漸出來ると腹の裡には竊に笑を含めども、酸あらぬ體にて頭を下げ　寸「イヤモウお内儀さんの掘けたお餅で、實に蘇生つたやうな心持が致しやす、親れ此譯を親公達へお咄し申したうへで、改めてお願ひまうすでございませう、さア若旦那、貴公も一寸お禮を被仰いましト言はれて瀧治郎は面目なげに　瀧「寔に濟みませんが、何卒御勘辨被成て下さいまし　寸「アレサ、最う今夜の事はお互に夢を見た積にして、言はない事と致しませう、丁度會席も出來て居ますから、お寒さはお寒し、お畑の熱いのを一口呑つてお披きと被成まし　寸「モシ、お披きとは宜い辻うらでありやすネ　「ほんにネエホヽホヽト是より會席の馳走になり、其夜も餘程更けしかば、暇乞して兩個は爲すまし顏にて立歸れば、最前よりの動靜をば徨聞して居し宗伴が、竊に妻にうち對ひて　宗「實に今夜の都合といひ、おぬしの言取り鹽梅迄、思つたよりは熟く出來たせ　「何だか氣恥かしいやうでありましたヨト寐物語に囁きしとぞ、然れば宗伴寸白が互の方便暗合して、爰に二個が緣を結ぶ、這も又月下氷人の戯れに做す所爲なるか、寔に可笑しき契なりけり。

（卷の五十四終）

忠臣水滸傳自序

夫魁帥院本諢語爲二脣調一以成二俳戲一、有下題二忠臣藏一者上、觀二其爲レ書、據二太平記一、飜レ案高執政淫二視鹽廷尉之嫡夫人一、眷戀不レ已、寓下嗜二國風一之情上、托二雅好一書二眷戀之意一、以爲レ贈、夫人和レ之以二奠衣之篇一、師直艴然怒施及二高貞一、高貞身死國壞之事、以爲二十一回一、是雖二戲曲一、忠孝義貞、示二宜レ鑒之理一、是以大行二于世一、而田舍村童亦膾二炙其事一、庶幾乎導レ善除レ害之一助一矣、聽松堂語鏡曰、市井之愚夫愚婦、看二雜劇戲本一、有二忠臣孝子義夫節婦一、觸二動良心一、至レ悲傷涕泣不二自禁一、率有二敦レ行爲レ善者一、誠哉此言也、余棲二迹市廛一、營生之餘讀レ書、最好二稗說一、嘗每レ檢二施耐菴水滸傳一、覺レ有下所レ類二夫戲曲一者上也、遂飜レ思構レ意、師直之乘權與二高貞之疲罪一、比二諸高俅及林冲一、作二忠臣水滸傳一、固是寓言傳會、然示二勸レ善懲レ惡於兒女一、故施二國字一陳二俚言一、令二兒女易レ讀易レ解也、使二所謂市井之愚夫愚婦敦レ行爲レ善耳、觀者恕焉。

寛政戊午仲夏題二於東都平安橋南煙包舗一

山東子

正史實傳 いろは文庫 終

忠臣水滸傳目錄

第一回　夢窓國師祈禱天災　高階師直誤走衆星

第二回　妍娘娘差謎製衣篇　鹽廷尉誤入白虎廳

第三回　桃井侯大闘足柄山　郷衛門夜渡天龍川

第四回　鹽冶龍馬三鞭千里　寺岡神行一脚百歩

第五回　貞九郎剪徑得蒙汗藥　賀古川監押送金銀擔

第六回　韓平寓山崎售肉包　千崎過西岡殺野猪

以上　前編五卷

第七回　奪密書標兒死節　擲金釵兒大星示號

第八回　重太郎月夜會武森　戸難瀬雪天闘土兵

第九回　本蔵短笛吹別鶴曲　力彌長鎗得雪佛頌

第十回　島寺袖眷繼義士　天川屋拳打屠兒

第十一回　大星琵琶湖大聚義　兼好國見山夢降石

以上　後編五卷

通計　十一回前後合本十卷

忠臣水滸傳前編 卷之一

東都 山東窟京傳子著

第一回

夢窓國師祈禳天災
高階師直誤走衆星

話説、北朝の天子光明帝の在位、暦應三年三月三日、五更三點、帝紫宸殿に御坐し給ひ、百官の朝賀をうけさせ給ふ、然に、當有の殿頭の官人すゝみ出て、文武の百官にむかひ、聲たかやかに叫はりいふやう、若事あらば班を出て、いそぎ奏聞あられよ、若事なくば簾を捲き、すみやかに退朝あるべしと、時に班部叢中より、一大臣藤原道教卿班を出て、つゝしみ奏聞ありけるは、目今洛中に屢怪異ありて、已に仙洞の御所にも怪事あり、一隻の班犬、二三歳ばかりの小兒の頭一級をくはへて跳來り、たゞちに院の御所に入り、こゝかしこ跳繞りて、つひに南殿の棟の上にのぼり、三聲叫びて忽然ときえうせぬ、是乃涉世錄に、狗人屋に上る、鬼を舂女と名づくといへるたぐひにて、必不祥の兆ならん、殊更將軍塚鳴動し、清水寺には舞馬の難出來りて、山門殿宇ことゞく、片時のうちに灰燼となり、或は四條川原にかまへたる、田樂の棚俄に揺れて、貴賤男女あまたの人をそこなひ、或は白日空中に馬の嘶聲きこえ、黑夜街上に車の轢るひゞきあり、其餘さまゞの怪異ありて、人民日夜生を聊することなし、至若北陸道七州に、瘟疫さかんにおこなはれて、人民を傷損すること、其數をしるべからず、其原は越前國よりおこりて、諸州各府にいたり、一處の人民此症にそまらざる者なしと、各處より表文をさゝげて、此凶事を進奏する事、恰も梳枇の齒を挽くに似たり、伏望は陛下萬民の辛苦をあはれみ給ひ、刑罰を釋し、恩賞を寛し、稅賦を薄して、天下に大赦をおこなはれ、天災をはらひ危急を救せ給はゞ、何の福かこれにしくことあらんと、つぶさに奏しければ、帝叡聞ありて大に驚かせ給ひ、急翰林學士に勅して、隨即詔書を草せ、一面には救を天下の罪囚に降し給ひ、應有民間の稅賦ことゞく皆赦免あり、一面には京に在處の、宮觀寺院に命じ給ひて、秘法靈法を修せられ、もつぱら天災を禳ふべき祈禱あり、然るに其比天龍寺の開基夢窓國師といへるは、博學秀才道高有德、天下にならびなき高僧なるにより、此時又特勅ありけるは、彼國師を朝廷に召し、靈法を修せしめて、天災を禳はすべきとなり、因て國師は其儘朝參し、金殿上に一ツの壇を設け、大山府君を祭り、醮祭の秘法を修し、已に七晝夜、肝膽をくだきていのりければ、讀經の聲は殿上にみち、金鐸の音は堦前にひゞき、いかなる魔君惡鬼たりとも、障礙をなさじとぞ見えたりける、個樣に日を累ね功を積みて、祈の精誠をつくされける驗にやありけん、方纔洛中の怪異はやみけれども、北陸道には瘟疫轉盛なり、帝これを聞知れ、龍體安からず、再朝廷に百官を宣召、此事いかゞしてよかるべきと、評議區々なり、當時班部中より、一大臣源具親卿進出て奏聞ありけるは、臣頃日諸人の風説をうけ給はるに、當初淵邊義博がために弑せられ給ふ、大塔の護良皇子を首として、千種忠顯、楠正成、新田義貞等が亡靈、妖魔のかたちに化現し、毎夜仁和寺の、六本杉の樹上に參、

會して、天下の治亂興亡を議論し、北朝をかたむけ寃をはらさんと計るよし、外議もつばらなり、臣熟愚意を以て量り候に、洛中の怪異おそらくは、那寃鬼の所爲にて、諸國の災病も、彼等が邪祟に著るものならん、就中義貞は、前年越前州足羽において、飛矢にあたりて自害を做し、死に臨みて忿怒の惡相を顯はし、ふかく寃をとゞむると聞及びぬ、今已に瘟疫越前よりおこりてたゞちに諸國におよぼすは、必ず是義貞が寃魂彼地に妖祟をなし、北朝をかたむけんと計るに疑なし、伏て願は陛下明察し給ひ、義貞が遺匳をもつて、渠が遺骨に假托、相州鎌倉鶴岡八幡大神の廟においてこれを弔祭し、すなはち彼地に其匳を堙めて、墳墓を築き、ながらく義貞が亡靈を追薦せば、彼が靈魂おのづから寃をはらさん、さらば民間の災病をのぞき、諸國ふたゝび靜謐して、貴賤萬歳を唱ふべしと、言をつくして奏しければ、主上其奏を准させ給ひ、御感なのめならず、やがて足利將軍尊氏公の家弟、足利左兵衛督直義公を朝廷に宣召られ、爾すみやかに義貞が遺匳をたづさへて鎌倉に馳下り、鶴岡の廟において弔祭し、彼地に其匳をうづめ、墳墓をきづきて、義貞が亡靈を慰すべし、いさゝかおこたることなかれと、懇に勅命あり、直義度みて聖勅をかうむり、帝に辭別し奉り、從人許多したがへて、即日都を發足し、馬に策うち夜を日につぎていそぎけり、是乃天災を禳はんとて反て希代の珍事を惹出し、高階鹽冶兩家に凶事おこりて、大星等主公の讐を復し、千歳の後に美名をのこすべき、此一件のことを下來る朋なりけり、熟慮るに、上に賢明の君在すときは必ず下に忠良の臣あり、しかにはあれど緯の斐にのぞまざれば、忠臣義士顯はれず、國家昏亂して忠臣ありといへる、老聃の言宜哉、只滿空の星辰白日に光なく、夜來ひかりをはなつに一般、後人學記篇を引きて陳ねたる詩あり、證とす、

嘉肴不レ食無レ知レ味、　貞士臨レ難更見レ忠、
國若離レ關レ逢二大故一、　世人誰唱二大星功一。

不題且說、直義公は路程をいそぎ、いまだ旬日を經ずして、速鎌倉に著給へば、鎌倉にては管領の著忽と聞き、執事高武藏介師直、雲州の刺史鹽冶延尉高貞桃井播磨介直常の親弟桃井若狹助安近、三人ひとしく鶴岡廟、段葛のほとりに出で、地上に拜伏して忽をむかふ、直義公此三人の打扮を看給ふに、おのおの頭に一頂の烏紗帽を戴き、身には一領の直垂を穿ち、身邊には一口の解手刀を帶び、三人一般の粧束、美麗をつくしてぞ見えし、斯て三人つゝしみて、直義公の左右に隨ひ、廟內にみちびきければ、直義公樓門の前にて馬を下り、たゞちに殿內に入給ひ、宮殿の光景を看給ふに果然是好一座の靈廟なり、但見、

青松屈曲し、翠栢陰森たり、門には敕額金書をかけ、戶には靈符玉篆をつらね、堦砌下に流水潺湲、墻院後に好山環繞て、鶴丹頂を生じ、龜綠毛を長ず、坐不冷の行法懈怠なく、讀經金鐸の聲、右左の廊にひゞく、寶殿の富貴說つくすべからず。

直義公やがて殿上に跪き、香を拈り拜を作して、少刻神明を禱給へば、忽然皷樂のひゞき大に發り、廟史廟祝の們、宮幣を捧げ神慮を淸め奉る、扨宮殿の前なる銀杏樹の下に、粒子引兩の章を繡ひたる、錦の帷幕をひきめぐらし、中央に一把の虎皮の交椅を設け、一爐の好香を焚く、直義公神拜罷て帷幕の內に入り、從容に交椅の上に座し給へば、あまたの從者左右にわかれて座を列ね、おの〳〵稽首俯伏して威儀嚴重なり、當時、高師直、顯治高貞、桃井安近、三人ひとしくすゝみ出で、長路悲なく塵蓋降臨あることと何の悅かこれにすぐべきと、謹て禮を叙ぶる、直義公のたまひけるは、目今諸州に瘟疾盛におこ

なはれて、人民をそこなふにより、帝これを歎せ給ひ、陰陽寮に勅せられ靈龜を灼きてうらなはしめ給ふに、新田義貞の亡靈妖祟をなすにうたがひなし、以故に義貞が墓をうづめて墳墓を築き、亡靈を追薦すべしとの勅命なり、爾們いそぎその準備をとゝのふべし、かならず遲延することなかれ、師直これをうけたまはりて云く、瘟疫は原是陰陽不和の氣をうけて生ずる疾なり、豈妖祟の所爲ならんや、殊に義貞は計策つたなく浪死をなしたる孱將なるを、その靈何ぞ祟をなすことあたはん、陰陽家這等の誣言をまうけて、天子を煽惑し奉るなり、義貞が靈を祭るは畢竟北朝の鋭氣を挫く道理なり、此儀不當勅命にて候と、いさゝか忌憚ず申覆せり、桃井安近これを聞きかね班を出て云く、臣熟勅命の旨趣を察し奉るに、義貞が靈を祭りたまふは瘟疫の爲のみにあるべからず、今新田の氏族諸州に躁れて時の至るを窺ふ時節なれば、他們をして北朝の仁德を感佩なさしめ、干戈をうごかさずして、自然當朝に歸降いたさすべき計策ならん、殊に新田家は清和帝の昆裔として、當家とは原是兄弟の家なり、一番は確執となるとも、豈ながらく對敵とすべきいはれあらん、執事の阻當の議論、畢竟逆勅の非禮にやあたらんと、言を勵ませて申しけり、師直怒て云く、足下我を逆敕の罪人とするは是胡亂の一言なり、すでに義貞死せる時は蓬頭亂髪にして、骸の邊に落在る頭盔四十七あり、乃此なる鎧韓櫃に收む、いづれをか眞假と認得べき、若うたがはしきをもつて決定し、後來是ならざるときは、天下の笑具とならん、足下年輕の徒として、挿口の議論、何異見かあらん、口を閉ぢてしりぞくべしとて、兩箇是非をあらそひ、怒氣已に面にあらはれ、事におよぶべき光景なりければ、鹽冶高貞いそぎ勸解して云く、兩箇且あらそひをとゞまり給へ、すでに勅命をかうぶるうへはえきなき爭論なり、唯宜管領の下知にしたがはるべしとぞ制しける、直義公兩人が爭論を聞給ひ微笑してのたまはく、我存想あり、其方共重國を召叫びおきぬ、誰かある渠を我面前にともなひ來るべしと命じ給ふ、扨不多時氏家中務丞重國端々正々として帷幕のうちに進來り、衣帽を整頓遙に下りて拜候す、直義公云く、爾宜拜を休めてちかくすゝむべし、我且汝に命ずる旨あり、前年義貞足羽において死したる時、屍の邊に落散りたる頭盔四十七枚ありて、いづれも義貞が頭盔と確定しがたし、汝は其際彼處にありて、義貞が頭を深泥のうちより獲たるとなれば、其時渠がいたゞきたる頭盔をもかならず識熟つらん、都て四十七枚の頭盔これなる韓櫃のうちにあり、汝速に點檢して、眞假をわかつべしと命じ給ふ、重國旨を領し、隨即韓櫃の蓋をひらき、四十七枚の盔逐件に點檢す、もつとも其主の好にしたがひて、形容製造個々異なり、其形造怎生となれば、

大星小星の盔には、四天の星に兼金を暉し、星白白星の盔には、銀を鏤め白鎧を沃ぐ、兜鍪頭には熟鐵をもちゐ、前立物には獅子頭を鑄る、直平は原是帽巾のかたちに據る、筋盔は密あり、疎なるあり、鉦をかけざる盔は、すなはち縛弓のたよりなりとぞ。

却あまたなる盔のうちに、五枚鞠かけたる龍頭的頭盔一頭あり、忽然として盔裏に香氣芬々と薰り、風にしたがひて人を襲ふ、重國いへらく、前年元弘播亂の際、後醍醐帝義貞が戰功を賞し給ひ、奎翰の詔書一通御香一炷たまはる、義貞戰場に赴くごとに、詔書を錦帛に收めて首にかけ、御香を盔のうちに焚きしめて、平常身をはなたざりしと聞きつるに、果て自害の刻その屍をみれば詔書を首にかけ、御香を盔に焚きこめぬ、今已に此盔の裏に依然として香氣馥郁たるは、正是義貞が遺盔にまぎれなし、何のうたがひかあらんと備細に言上なしければ、衆皆感歎をもよほしけるに、ひとり師直は面をそむけ聲を做す

して居たりけり、直義公大に喜悅せられ重國を賞じ給ひ、やがて師直高貞の兩人に對し、いそぎ好墳塋を卜して此匿を堙め、墳墓を安置すべしと命ぜられ、桃井安近をはじめ數箇の從者を領し、排隊首尾を正して、大倉谷の客館に回蹕給ふ、不在話下、且說、鶴岡の廟を去ること一里ばかり西南の方に、岩石を鑿したる一條の道路あり、極樂寺洞門と號し、曾て風水好勝地なり、しかるに師直高貞は管領の命をかうぶり、即日たゞちに此處に來りて一塊の空地を練み、あまたの人夫をかけ、おの〳〵鋤頭鐵鍬を將せ、泥土をほりひらく處に、方にほること五七尺ばかりにおよび、おもひがけず泥のうちに一合の石室あらはる、四方一丈ばかりのかこみあり、師直たちまち貪欲の心をおこして暗に想道、這石室のうち若往古黃金のたぐひを隱匿きたるもしるべからず、我且こゝろみに堀おこさせ一見せばやと、乃衆人に命じ、いそぎてほりおこさしむ、高貞慌忙き阻て曰く、約莫這鎌倉は、神龜天平の頃より數百年來武備兵將の居にして、源家相傳の地なれば、公子王孫の古墳きはめておほしと聞く、うたがふらくは此石室も高貴の人の棺椁ならん、墳を發くはその罪もつともはなはだし、おそらくは災害を惹出してその身におよぶべし、執事これを察し給ひ、ほりうごかすことを休めて、唯宜墳塋を他處に索給へといさめけれども、師直これをもちゐざれば、只得衆人且石室の上の泥土をはらひのぞきて看る時、石室の上に四箇の眞字を鑿着けたり、すなはち過レ高而開といふ文字なり、師直これを看て大によろこび、すなはち高貞に對していふ、廷尉此四ッの文字をみられよ、我おほけなくも天武帝の後昆として本姓は高階なり、因て今姓を高と稱す、數百年前すでに我姓の高の字を註して此に在り、過レ高而開とあるは、分明に是我姓の高の字に應じ、我をして此石室をひらかしむるの兆なり、足下此上にも尙敢て阻へんか、高貞これを聞き再三言を盡して

とどめけれども背て聽かず、只得衆人一彈に力を併せて、石室の蓋を扛おこし看るに、石室にはあらずして是一片の大青石板なり、恠哉石板の底下に一箇の萬丈のふかさの地穴ありて、穴の裡たちまち刮剌々とひゞき、恰も千竿の竹を一風にをるがごとく、半夜の雷の九天にとゞろくにひとしく、天摧け地搖け、岳も撼き山も崩るゝばかりなり、斯て穴のうちより一道の白氣滾起り、たゞちに半天にのぼり、空中に散じて、四十餘道の金光となり、四面八方にぞとびさりける、是乃四十餘座の烈星方に出世すべき時にして、高階鹽冶の兩家に希代の珍事を惹出し、大星等四十餘人の義臣世に美名を顯すべき兆とぞしられたる、すでにして衆皆六神無主面色土のごとくに變じ、大に懼怕して都て地上に倒れければ、師直は全身に冷汗をながして捉ひ頗き、這々私宅にぞ逃歸りける、高貞は只得迹にとゞまり、ふたゝび他處に墳塋をもとめ、事をまつたくとゝのへけり、其後その穴をうづめんとするに、萬丈のふかさ有りて塡むることあたはず、穴のうちより清泉を涌出してつひに一ッの井となりぬ、原是星出世の井なればとて、時の人星月夜井と叫びけるとなん、今も尙鎌倉極樂寺の洞門に星月夜の井といふありて、鎌倉十井のその一とす、うたがふらくは彼井の舊迹ならんか、不在話下、再說、師直は彼恠異に遇ひてより、何となく心中安からず、身に利害あらんを怕れ、三五日をすぎて又鶴岡廟に謁で、香を燒きて拜を作し、伏願は神明哀愍納受まし〳〵、災星を除かせ給へと少刻祈念しをはりて、回廊を轉出、朱欄杆の邊に倚靠りて居けるに、はるか對面を看れば、一搬進來る官粧粉の女なり、おの〳〵身に蒙衣を披ふ、遠く覩れば彩雲風にとぶかと疑ひ、近く覩れば芳花の雨に笑めるかと謬たる、師直晴を定て熟看るに、廼是一箇の娘々數箇の侍兒了鬟を左右にしたがへて中央にとりかこまれ、手中に一把の松版砌壁を執り、額にくはへて日を遮り、蓮步輕移し、花枝

の颱に招くがごとく歩來る、誠に十分の風流人を動す粧扮なり、但見、

金の釵を斜に挿して烏雲に映かし、翠袖巧に裁ちて、瑞雪を籠む、櫻桃にたとふる口は、淺微紅を帚ひ、春笋にひとしき手は、半嫩玉を節す、臉は三月の嬌花に似て、暗に風の情月の意を藏し、眉は初春の嫩柳のごとく、常に雨の恨雲の愁を含む、玉貌妖嬈として芳容窈窕たり、若月宮の嫦娥、下界に降るにあらずんば、定て是貝闕の龍女、人間に遊ぶならん。

這人は是別人にあらず、是乃鹽冶侯の娘子貌好夫人なり、時に貌好はたゞちにすゝみて玉殿に上り、香を拈り拜を作しをはりて從婢を引き、回廊をめぐり出けるに、原來師直は是好色の徒なれば、貌好が容貌の世に稀なるをみて、猛然として魂魄天外にとび、おのづから蕩々として春心發動し、出乖露醜つゝむにおよばず、やがて貌好が袖を拉住め肉麻調戯ていへらく、我夫人と說話すべし、我にしたがひて別處に赴き給へ、夫人假如鐵石の心なりともなど一點の情なかるべきといふ、貌好は且驚き且怖れ、臉をくれなゐになして、斯清平の世界に夫ある女をとらへてたはぶれ給ふは、是何の道理ぞやといへども、原來師直は此夫人鹽冶の娘子なることをしらざれば、尙頻に綢繆つゝ、夫人は人をして想に死しめ給ふかと、强て攔住めんとす、貌好は師直が傍若無人の光景を見て心中大にいきどほり、すでに罵りはづかしめんとおもひけるが、看一看此人の直垂の袖に月谷の花號あり、於此はじめて執事師直なることを曉し、肚裡躊躇して想道、此人は今執事の職に誇り、權勢を擅にしてもつぱら人を傷ふときく、若此人に耻辱をあたへなば、かならず讐をふくみて、丈夫廷尉のためあしかりなん、古語にも不レ怕レ官只怕レ管といふこ、とあれば、權且怒をしのぶにしくあるまじと、俄に怒のいろを更めて笑になし、いかにもして此處を脫れさらんとおもはれけるが、師直は貌好が笑をふくむを見て、人前人後をもかへりみず、ますます調戯をなして、事已にみだりがはしきにおよばんとす、從婢等はこれを見ておの〳〵只手中に兩把の汗を撚る耳、いかんともすることなし、しかるに此侍兒のうちに一個傳兒と叫做的あり、年紀はいまだ十八九歳にすぎざれども、きはめて聰慧の徒なり、此時傳兒たちまち活變して心中に一計を設け、すなはち師直を請て一邊に到しめ詐りて云やう、相公いたづらに心を惱せ給ふな、此處は人目しげくして明白に事を辨じがたし、殊に此娘子は是鹽冶の嫡夫人なれば、相公も又胡亂ことなされてはためよかるまじ、奴家よき機會を見てひそかに媒をなし、誓ひて志を遂げさせまゐらすべし、今日は且夫人をはなちて家にかへし給へと、言をつくしていさめければ、師直ははじめて鹽冶の娘子なることをしり、斯ては急に事の成まじきをおもひて、只得傳兒がいさめを容ゐ、汝かならずその約をたがふることなかれ、若謊るぞならば我決て饒すまじ、よく〳〵肝に銘着けてわするべからずとて、尙只依々戀々として廟外に出で、廟門の外に俟佗てありける從者等を領れて、つひに私宅にぞ歸りける、斯て貌好をはじめ衆皆ひとしく息を吻と續きにけり、誠に彼水滸の林冲の女、五岳崩において高衙内のためにくるしめられしも、かくぞあらめとおもはれける、扨師直は此日をはじめとして貌好がことをわすれかね、只顧想に逼り、已に病に推けて公事を不管、連日只家にありてしきりに傳兒が消息俟佗び、一佛出世二佛上天のおもひをぞなしける、原來傳兒が媒せんといひたるは、只その處をのがるべきいつはりの計なれば、何ぞ消息のあるべき、已に半月ばかりまちけるが、すこしも無影響ければ大に心を惱せ、只得且一封の艶簡を修へ、私に貌好がもとに贈りて試みばやとおもひつきぬ、畢竟師直家に回り怎地か計る、且下回に分解を聽け。

（前編卷之一畢）

忠臣水滸傳前編　卷之二

第二回

妖娘々羞謎襲衣篇
鹽廷尉誤入白虎廳

話説師直は、爲人もつとも奸佞にして、貪欲おほく、ほしいまゝに執事の職にほこりて、もつぱら權威をふるひ、おのれに勝りたるものを妬み、おのれに劣りたるものを傷ひ、婬に虐し色に耽り、賄賂をむさぼり、驕奢に長じ、動もすれば不義不仁のふるまひおほく、彼宋朝の大尉高俅が爲人に彷彿たり、彼はすなはち高大尉、此はすなはち高執事、姓も又一般とて、人皆その毒惡を怕れざるはなしとぞ、請看師直、淫を貪り色を好むにより、事を惹出してつひに家をやぶり、身をそこなひ、千歳の下人の惡を受くる、唯是おそれつゝしむべきは淫欲なり、常言にいへらく、酒不レ醉レ人人自醉、色不レ迷レ人人自迷と、宜哉、古人色をいましむる詩あり、説得好、

貪レ花費盡採レ花心、
勸レ汝迴レ花休二浪採一、
身損二精神一德損レ陰、
佛門第一戒二邪淫一、

且説、一個の隱士に卜部兼好と叫做的あり、そのころほひは武州久良岐郡六浦莊金澤といへる地方に居住し、鎌倉にみちのほどちかきによりて、平生高階侯の居館に來往し、和歌をもつてまじはりけるが、師直貌好がもとにおくるべき艶簡を、此兼好に相托してかゝしめんとおもひ、一日這人を招き閑處に入れて、艶簡のことを囑託するに、兼好その旨を領し、しばらく沈吟して想道、我此艶書を寫くは正に是姦通の媒襯するに一般、我曾て聖賢の書を讀む、道を知り義をまもる者、安和姦のなかだちして德を傷はんや、此人斯風俗を敗り人倫を沒する徒としらずまじはりて、今悔ゆるに益なし、いかにもしてこれをのがるべしと、只管肚裡躊躇するを見て、師直は心大に火急、師兄我曾に連これを寫べしと責る、兼好暗に師直が光景を窺へるに、ふかく迷戀たる色あらはれ、なか〳〵ゆるすまじくみえければ、只渠に背かば利害あらんことをおそれ、只得領承して筆硯ならびに一張の素紙を乞とり、隨即筆を揮ひ詞を盡し寫完りて師直にあたふ、師直閲之に、世に掲然たる文墨士の筆にあやをなし、いくばくの風月の情を叙しるしたれば、假如觀音菩薩、王母娘々なりとも、一番これを披覽せば、たちまち蕩々として、一條の春路に迷ふべくぞおもはれける、師直は天に歡び地に喜びて、すなはち兼好をおもく賞じ、いそぎてこれを泥金漆的盒兒に收め、封皮の上に武藏鐙といへる三ツの文字をかきつけぬ、這是おのれ武藏守にてあれば、かゝる折にや人は死らんといへる、歌詞の意を彫着たるなりとぞ、かくて心きゝたる腹心の間使に囑付けて、貌好がもとにぞつかはしける、扨その日のたそがれのころほひに使かへり來りて報じけるは、小可たゞちに廷尉の居館にはせまはり、門路をもとめて後園より入り、娘子の居室にちかづきて且動靜を張看るに、折ふし娘子は浴室にありて、澡浴て居給ふやうすなれば、その完るを俟て書簡を呈しけるに、手中に接へ書皮を見給ふのみにて、そのまゝ地上に擲去給ひ、一言の應答もなく後堂にいり給ひ、翠簾をくださしめ給ひけるゆゑ、いかんともすることなく、只得人のあやしまんことをおそれて、書簡をひろひとり、いそぎて歸りまゐりつといふ、師直これを聞きて、唯是心中鬱々としてたのしまず、轉おもひに逼り、恰も擬のご

とく酔へるがごとくにて惘然たるばかりなり、斯て次の日にいたり沈思凝想しけるは、彼女たとひ緊真烈をまもり、心鐵石なりとも、原女は水性のものなれば、只管我心の誠をつぐるになびかぬことはよもあらじとて、やがて一首の和歌をつくりて一張の採策にかきつけ、ふたゝび間使をつかはして、これを貌好がもとに贈りけり、其歌にいへらく、

返副、手也鯛計武登、憶仁曾、我玉梓奈加郎、不打遊、

貌好此歌を見て別の言はなく、只小夜衣と應答給へば、使歸りてその旨を報ず、師直これを聞きて、小夜衣の意奈何と頭をたれて沈吟し、漸々その猜謎、是了是了、新古今集釋教の部に、寂然法師の詠せる歌あり、其歌にいへらく、

左良奴娜爾、於毛幾賀宇倍乃、左容古呂毛、和賀閼麼南羅奴、通末奈加佐禰曾、

廼是佛門十戒のうち、不邪婬戒のこゝろをよめる歌なり、彼女此歌の意を以て謎しはづかしむるは、事の成ざるかぎりなり、我今已に天下の執事たれば、天子大臣だも敢て違給はず、將軍管領といへども妄に犯すことなく、普天の下率土のうちに所望のもの、一ツとして得ざるといふことなきに、彼女たとひ女御更衣にもせよ、いかなれば再三背きて我心をくるしめ、剩差をあたへて面目をうしなはしむるや、斯てはかならず高貞にも此事を說り、夫妻ともに笑を做して居るならん、我怎能勾這寃をしのぶべき、好々不日軍馬をおこして高貞が第宅を踏毀し、女を奪とりて此鬱悶を慰むべし、良つれなき人の心底かなと、或は怒り或は寃み、牙を咬みて居たる折しも、典客慌忙來りて、山名次郎右衞門到來のよしを報ず、師直がいふ、次郎右衞門來れりとや、さらば此へ伴ひ來れ、家僕命を領去りて山名をみちびき師直の居室にいたらしめ、そのまゝ退きいづる、山名此にいたり師直を候ふに、只晋々として顏色更に樂からず見えければ、ちかく進みて云く、執事の面色快からず、心中樂しきことすくなき光景なるは、かならず一件の悅びざることあるゆゑならん、師直がいふ、足下且我心中甚のゆゑに樂まざるを猜せよ、山名云く、小子老早一猜せり、前日鶴岡に於て那一朶の貌好花を見給ひしにはあらずや、這猜は如何、師直咲て云く、足下猜得て是なり、果て差ることなし、我彼花を看上すしてより心中頻に愁殺し、おもひわすれがたく、兼好に托し艶簡を寫せてこれを贈り、自家一首の歌をつくりなどして、方寸の誠を積といへども、彼女これをうけひかず、剩襲衣之篇を謎して羞恥をあたふ、豈能この氣惱をしのびんや、此うへは軍馬をおこし高貞が第宅をとりかこみて彼女を奪ひ、情愿を遂げばやとおもへるなり、山名頭を搖りていふ、不是不是、なでふ事なきに軍馬をおこすは畢竟管領をかろしむる道理なり、小子熟慮るに、彼夫人をとり得るには力をもちうべからず、只智をもちうべし、小子一計をもつて彼夫人をとり得べきに、唯知ず尊意はいかにや、師直云く、足下若良計ありて我ために謀り、こゝろざしを遂げしめば報るに所望に任すべし、すみやかにその計策をしめし給へ、山名云く、廷尉をだに殺しなば、夫人はおのづから執事の心に應ずべし、小子已に一計ありとて膝をよせて近く進み、只如此々々這般と低言きければ、師直掌を鼓ちていふ、妙計〳〵、足下は誠に智は隋何に褒ぎ、機は陸賈に强れり、我すみやかに這計をおこなふべし、且三盃を酌みて倘慢々商議におよび給へと、大に喜びやがて家人に命じて酒宴を設け、大に飲酌をもよほして纔に連日の鬱悶をなぐさめぬ、斯て夜に入二更の左側にいたりて、漸々盃をさまりければ、山名は拜謝しわかれを告げて私宅にぞ歸りける、不在話下、再說、足利直義公は前年義貞滅亡の刻、源家累代の寶器、鬼丸、鬼切とい

へる兩鞘の寶劍を得給ひしより以來、もつぱら刀劍を好給ひ、すなはち諸州に徇て天下の良劍をあつめ給ふ、よりて麾下の列侯、南越の亘闕（名劍の名）に踰え、西楚の太阿（名劍の名）に超えたる良劍を索め、我おとらじと獻上あり、鹽冶侯も畏劍をもとめて獻上せばやとおもはれ、あまねく四方をもとめられけるが、すこしも世にあらはれたる刀劍は、先だつて諸列侯のために買とられ、いまだこれを得ることなく、大にうれひてぞ居給ひける、しかるに鹽冶の家士早野勘平といへる的、一日私用ありて松葉谷に到る處に、一條の大漢勘平が背後にありて、口裏自言自語說道、我いまだ此寶劍を識者に遇はず、若能此劍を知るものあらば我これを賣るべきに、惜むべし〳〵といふ、勘平はこれを聞つけずして、二三十歩ばかりゆきすぎけるに、那漢子なほ勘平が後にしたがひ來り、ふた、び聲をたかうしていへらく、惜哉佯大一箇鎌倉に我此寶劍を識得るものなし、若能これをしるものあらば賣るべきものをとて、只顧嘆じていひければ、勘平これを聞きてあやしみ回首て看るに、この漢子一挺の大腰刀と一挺の刺刀を兩の手にもち、颼々と揮まはすに、明晃々たること鋭の面のごとし、此時已に鹽冶の家に災禍の起るべき時節到來したるにやありけん、勘平此男にむかひて、我その劍を買ふべきに速將來りて見すべしといふ、此男すなはち劍をもちきたりて勘平に見せしむ、勘平劍を接へうちかへし〳〵好々看て大に驚きていふ、光哉芙蓉のはじめて生るがごとく、その紋星の行るがごとく、その光波の溢るがごとし、善哉金鐵の精、水には蛟龍を斷ち、陸には犀革を剸るべし、正是道一挺の腰刀は、當地山内の人氏五郎入道正宗が治ひたる劍にうたがひなし、又此刺刀は、薩州浪平行安がきたひたる劍ならん、此男がいふ、誠に足下は善相劍に通達し給ふ人かな、利害眼睛果てたがふことなし、勘平がいふ、此二挺の劍はもつとも代に希なる寶器なり、個いづこよりもち來りぬるや、此男がいふ、小子は原來當地の者にあらず、零落して近間他郷より當地にきたり、家道消乏によりていかんともすることなく、只得祖上より傳はりたる此劍を賣り、本錢となして營生をなさばやとおもひ、當地には刀劍を好者多しときゝたるゆゑ、今日此邊に持出で、かなたこなたと繞りて、もつぱら買人をまちけるに、豈料らんや、一箇として我此つるぎを知るものなく、莫邪をむなしう鉛刀になさんとは、しかるに今足下の眼にふれて、和氏が玉璞俄に光をあらはす、誠に感入りたる眼力なり、勘平これを聞きて肚裏におもへらく、頃日我相公もつぱら刀劍をたづね給ふ時なれば、若此二鞘の良劍を吹噓せばかならずよろこび給ふならんと、つひに此男をひきて私宅にかへり、價錢をさだめて主公廷尉に稟知、劍を買とりければ、彼男はそのまゝ拜謝して立去りけり、斯て勘平即日此二鞘の劍をたづさへて、廷尉の面前に伺候し、すなはち一覽に備ふ、廷尉これを見てはなはだ讃美し給ひ、我今日はからずも此寶劍を得たること莫大のよろこびなり、早速直義相公に獻上すべしとの給ひて、勘平を賞じ服御章を賜りて座をしりぞかしめ給ひ、次日も亦此劍を見て手をはなたず、ます〳〵讃美して居給へるに、典客のもの慌忙來りて、高執事の家士鷲坂伴内使人として到來なりと報ず、即高貞席をあらためてまち給へば、ほどなく伴内客廳にいたりて高貞を拜し、恭禮をおこなひて云く、廷尉昨日好刀をもとめ給ひ、管領に獻上あらんとのことなるよし、主人師直聞および、内々一覽をなしその後上聽にたつすべしとて、今營中にありてもつぱら廷尉の登營あるを等るなり、速彼つるぎをたづさへて營中に赴給へ、高貞これをきゝ給ひて、我劍を得たること甚麼多口的ありてか執事には報知せたるやと、心中頗疑をおこし給へるに、伴内頻りに火急て、執事さだめて廷尉を俟佗まうさるべし、すみやかに歩を移し給へと催促するゆゑ、高貞

已事を得たまはず、忙々公服を穿し、彼二鞘の劍を從者に持せて、伴内とともに營中にいたり、從者をば館門のうちに居らしめ、みづから劍をたづさへて客廳にいり、師直を尋ねけるに、伴内が云く、執事は後堂に在て相待まうすならん、小人導まうすべしとて高貞を引き、幾の堂を過て後堂にいたりけれども、師直此にも居ることなし、伴内がいふ、執事此にをられずばかならず奥の間にをらるゝならん、こなたへ來らせ給へといひつゝ引いて、一箇去處にいたる、伴内又云、廷尉一盞茶時、此に在てまたせ給へ、停回執事出きたりて相見まうさるべしといひすてゝ、紙門の外に出去りぬ、高貞は二鞘の劍をたづさへ、手中に一把の腰扇を弄びてや、久しうまたれけるに、師直曾て出來ることなし、因て頗うたがひをおこし、頭をめぐらして簾中をのぞみ見るに、壁間都て白虎を畫きたり、鹽冶侯これを見て大におどろき、此一間は軍機の大事をのみ商議する處なるに、いかんぞ敢てゆゑもなく此處にいるべきや、最是無禮至極なりと、自言自語していそぎしりぞき出んとしたる折しも、紙門の外に脚步ひゞきて一箇の人來る、鹽冶侯此人を見るに是別人にあらず、執事師直なりければ、いそぎ跪きて禮をおこなふ、師直大に喝して云く、廷尉は何人のゆるしをうけて擅に此ところには入りけるや、況手裏に劍を拿ちたるは甚無禮なり、鹽冶侯頓首していふ、執事小人が獻上の劍を内覽あるべきとて、起先尊使鷲坂伴内をつかはされて小人を召給ふ、ゆゑに今すみやかに此劍をたづさへて此處にいたれり、執事の召にあらずんば豈敢て此ところに來ちんや、宜我別意なきを察したまへ、師直怒りていふ、足下何ゆゑいつはりをいへるや、我伴内をつかはして足下を召むかへたるおぼえ曾てなし、鹽冶侯いふ、今已に伴内小人をみちびきて此にいたらしめ、即紙門の外へ出去りぬ、執事など紙門の外にてこれを見給はざるや、師直此分説をきかず大に罵りて云く、足下今さら罪を脫れんとおもひ、辯脫するともなどのがるべきや、付て足下も營中の法度を知りつらん、此一間はゆゑなくして入べき處にあらず、殊更手中に劍を執り、管領の居室にちかづくは、かならず是、足下俄に心を變じ、南朝に内應し刺客となりて、暗に直義公を害せんとはかるにてあらん、原來足下は是微昧の變奴才なれば、いまだ此鎌倉にあまたの英雄豪傑あることをしらず、益なき謀叛をもくはだて、却て己が身を亡す、古語にも、井蛙淺心、忽迷三千尺之激浪、といへることあり、井中蛙、偶陶井の時にあひ、吊桶にくみとられて川にはなち出さるゝといへども、たちまち狼狽して度をうしなひ、梧根に磯れて就死す、足下也今蛙に一般、いかんぞよく滄海の寛をしることあらん、今已に謀叛敗露るうへは、是九族を亡すの罪にあたれり、天罰のほどおもひしるべしと、詈罵り、怒れる眼を睜開き鹽冶侯の前に膝をよせて聽一聽、傍若無人の光景なり、斯て鹽冶侯は彼が毒計にあたりたるを曉り、忽然として忽顔色變じ、髮さかさまだち、齒を切ひ牙を咬み憤にせまりて、手中に執れる一把の扇子をおほえず揑碎きけり、師直冷笑ひて云く、汝いかほど眼を瞋すといふとも、豈我に敵することあたはんや、恰も螳螂斧をもつて龍車にむかふがごとし、汝がごとき蠢東西は眼にふるゝも碍はしと、毒言惡語、飽まで嘲罵りて、鹽冶侯の面上に一口の唾を吐着けぬ、鹽冶侯起先より、驚着鳥氣いきどほりをしのぶといへども、原來火性短氣の人なれば、何ぞ屢これを制するに遑あらんや、

怒從心上起、惡向膽邊生。

忽袖の下に拿ちたる、彼五郎正宗の刀を拔きて、照頂門就砍に、心火急にしてあやまち、たかはらの欄檻に斬こみ、拔さることあたはず、只得また浪平行安の刺刀を拔きて躍上り、胸のうへをのぞみて、只一

刀に刺さんとなす、師直托地身を閃てこれを避けければ、わづかに烏帽子を撃て額を傷り、鮮血滾々とながれて、直垂をくれなるに染めなせり、かくて師直危き一命をまぬかれ、東に倒れ西に歪み、廊をはしりてのがれさりぬ、此とき山名次郎右衛門、紙門の外にありて、計いかにと、暗に伺ひて居けるに、此光景を見て大におどろき、慌忙はりし来り、鹽冶侯の棚腰抱住む、廷尉氣を焦燥て山名を蹴倒し、續て奥の間に追行きうちとらんとしけるが、已に營中に在る群侯、こゝかしこより馳りあつまり、大勢いちどにをりかさなりてつひに擒捕りぬ、鹽冶侯は師直をうちもらし擒となり、双足亂跳して怒給へどもさらに益ぞなかりける、此日營中の騒動、恰も鼎中の沸々たるがごとくにてありし、扨廷尉昨日遡平が手より二鞘の剣を索め、今日彼白虎廳に引入れられたる始終、都是山名次郎右衛門、師直がために施したる奸計とぞしられたる、古語に曰く、呉王剣をこのめば民傷くものおほしと、宜哉直義公刀剣をこのみ給ひしは、却て奸臣師直が毒計の門路とはなれりけり、後人一首の詩あり證とす、

呉王好レ剣　庶民傷、　可レ信　古言　都不レ佯、
管領恥レ兵　人企レ亂、　遂教二一個良臣亡一。

畢竟鹽冶侯の性命如何、且下回に分解を聽け。

第三回

桃井侯大闘二足柄山一　郷衛門夜渡二天龍川一

話説當世、北朝の天子光明帝は、至聖至明にましませども、只奸臣等がために蔽はれ給ひて暫時味せ給ひ、賢者はしりぞき小人はすゝみ、人みな執事師直が權勢におそれ、一人として師直が不義非道を責め、高貞が冤罪を辯ずる者なし、哀哉鹽冶侯、つひに讒陥せられて畔逆の汚名をかうぶり、扇谷の邸宅におきて自盡を賜はる、鹽冶侯死にのぞみていへらく、曾て我聴く、前年楠廷尉湊河におきて、節に死するの際いへることあり、人は最期の念に因て善悪の生をひくと、我又七生を經るとも只人身を得て、師直が怨敵となり、此仇をむくゆべしとて、自盡をなしけるとぞ、此日は是いかなる日ぞや、乃是北朝の暦應三年四月一日なり、人王五十九代宇多帝の後、佐々木成頼十代の昆裔鹽冶の家名、只一盞茶時に滅亡す、嗚呼惜むべし、朝には榮を鎌倉山に暉し、夕には自己剣に伏して九泉の鬼となることを、扨此日鹽冶の娘子貌好は、侍女等を遠ざけ給ひ、只獨おく深き居室にありて、丈夫の身のうへいかんと座立不寧、しきりに愁殺して居給ひけるに、家士原郷右衛門慌忙はせ来りて、廷尉破肚ありし由を報じければ、かくと聞給ふよりたちまち魂をうしなへるばかりに、聲をはなちて大に哭し、呑々として地上に倒れ、息もたえ〳〵になり給ふ、郷右衛門大に慌急に叫喚し、醒薬をとりて口中に灌入などするに、方纔に甦醒といへども、なほしきりに哭みてやまず、郷右衛門もこしらへわびて倶に涙を洒ぐばかりなり、かゝる折しも、忽然として門外に喊聲大におこり、金鼓ひとしうひゞきければ、郷右衛門大におどろき、樓にのぼりて見るに、一個の大將身上おごそかに甲うて馬上にあり、四五百の軍兵を率きたり、館のめぐりをとりかこみぬ、馬上の大將はすなはち是山名次郎右衛門にてぞありける、高貞が采地を沒收し第宅を破却すべしと管領の命により、馳迎ひたり、退糧人們すみやかに第をあけて逃去るべし、若違背するものあらば立處に首を刎ぬべきぞとて、士卒に指揮して館門に火をはなちければ、たちまち煌さかんに焚えたちたり、郷右衛門忙々樓を跳下り、夫人貌好をいさめて云く、事已に此にいたり何ぞ猶豫し給ふや、若彼等に捉れ給ひな

ば、かならず師直がために羞恥をうけたまふべし、常言にも三十六計走るを上とすといへり、いそぎ且此をのがれ給ひ本國雲州に赴き、大星由良と商議ありて良計を做給へ、貌好は鄕右衛門がいさむるによりて、漸く涙をのごひ、火急にのぞみて盤纏に當べき準備もなかりければ、扶手匣の裡面より、四金四五十塊を探り出し、親手衣の袖を扯裂きて之をつゝみ、ふところに推入れて立出んとす、鄕右衛門は年方に三歳になりたまふ小衙内を脊背におひ、夫人の手を挽きて後門より逃出る、かくて一家の男女こと〴〵くみな、四方に散亂して逃去りけり、げにもあはれの光景なり、鄕右衛門夫人の模樣を見て、此儘客路に赴かば人のうたがひやおひなん、宜くよそほひを更めて起程すべしとて、その日は稲村崎の民家に躱れて夜をあかし、次日五更の左側に起きて、行裝をとゝのへけり、貌好はすなはち頭に一頂の市女笠を戴き、身に一領の單衣を披ひ、脚には搭麻鞋を穿き、手に一條の竹杖を執り、衣を壺折姿に粧束せり、鄕右衛門は頭に一頂の遮日笠を戴き、身に一領の雨衣を披け、脚下に一具の徼脚布を絞ひ、一雙の草鞋を穿き、身邊に兩口の腰刀を跨び、包裹を背上ひ、小衙内をいだく、兩個まつたく旅客の模樣に打扮て、遂に住慣れたる鎌倉をはなれ、故鄕の雲を腦後にかへりみ、客路の霧を眼前にのぞみて、おもひよらぬたび路にぞおもむきける、かくて路をいそぐほどに、はや足柄山に經過ぬ、徑路盤曲高低、すぐる處すべて山路の險阻なり、元來此貌好といへるは、後醍醐帝の御外戚なる、早田宮のひめぎみにして、弘徽殿の西の臺など稱し、如何なる女院御息所とも見奉るか、さらずば天下の權を執る、さる人の娘子ともなすべきを、ふかき緑にやありけん、吉野の上皇高真が戰功を賞したまひて、妻女にたまはりぬ、されば平生玉樓金閣のうちにありて、數箇の侍兒了鬟に服事、身には錦繡を曳き、口には珍饌に飫き、花にあそび月にたはぶれ、日夜の酒宴朝夕の醂歌、世界のたのしみをきはめ給ひけるを、豊料かや衛時の不祥に遇ひて、萬千の艱苦をうけ給はんとは、窈窕たる嬋嬋、羅綺にたもたへざる身上なるに、などや穿も慣れざる草鞋を踏みてかゝる山中の險路をすぐるにしのび給はん、足たちまち破爛鮮血滚々とながれて、みちのべの草をくれなゐにそめなし、只一歩も動徐ことあたはず、彼に跌き此に倒れてくるしみ給ふ、可惜、

驟雨損二金蓮一、暴風顚二玉樹一。

鄕右衛門これを見るにしのびず、ひたすら涙に咽びけるが、かくては何の日か雲州にいたるべきとみづから志を勵し、夫人を扶挽て漸半山を過り、前面をのぞみ見るに、此に一座の林子あり、烟籠霧鎖きはめて猛惡の林子なり、貌好鄕右衛門にとひて云く、此處の地名は何といへるぞ、鄕右衛門答へて云く、此處は是足柄嶺と申して東京道第一の嶮峻なり、此林はすなはち野猪林となづけ候、前年こゝなる竹下道といへるにおきて、足利將軍新田義貞と合戰の刻、此林のうちにてあまたの軍兵をころし給ひしゆゑに、今にいたつてその寃魂此林にとゞまり、人民を惱すと聞知るなり、もつとも五更半夜に過るべき所にあらず、一歩も速くすゝみ給へとまうせば、貌好はこれをきゝて、おぼえず衣襟のもとより冷氣を生じ給ひけり、かくて兩箇林に傍ひて只一味にはせけるが、貌好夫人地上に索あるを躓て、跌き倒給ひければ、銅鈴令々と響きて四五人の軍兵あらはれ出で、夫人を捉へてはしりゆきぬ、鄕右衛門大におどろき、是を救はんと急に亂草のうちにすゝみ入りけるに、おもひがけざる背後より、二ツの鈎索をなげて、鄕右衛門を搭住め、前後より四五十箇の伏兵をめきてあらはれ出で、大勢ひとしくをりかさなり、緊くおさへて萬手小手にぞ綁めける、原來鄕右衛門はすぐれたる勇夫なりといへども、一來是不意を却はれ、二來是懷の

小衙内をいとひ、三來是雙拳四手に敵しがたく、むなしく手をつかねて擒となれり、しかるに林のうちより五六人の歩卒をして、一乘の網轎を扛かしめ、首なる軍兵、手中に一條の鎗を提げてはしり出る、這人の模様怎生となれば、

瘠脚長如二池上鷺一、縮頸短似二泥中龜一。

這人郷右衛門を見て指して云く、倆餓鬼退糧人、我老早此處にありて俟わびたり、おのれら眼前執事の間をかうぶりて、かく縲絏のはづかしめをうくる、燥脾胃ありさまかなと、さもにくげに打罵りけり、郷右衛門眼を瞋きて此人を見るに是乃鷺坂伴内なり、轎子の内には貌好夫人はや擒となりて居給ひぬ、郷右衛門これを見て切齒咬牙怒るといへども只索無奈、かくて伴内小衙内を奪とり、ともに轎子に推入れてこれを前に扛いだし、郷右衛門を後にひかせ、みづから雑兵に指揮して、緊監押なし麓をのぞみてぞ馳去りける、可憐兩箇は三途にまよへる罪人、惡鬼羅刹の手にとらはれて、閻羅王の廳前にひかるゝに異ならず、目もあてられぬ光景なり、さて漸々山のなかばを過ぎける所に、前面の山のあひだより一簇の人馬あらはれ來る、一隊の人衆のうち主人とみえて、一位の官人、一匹の雪白捲毛馬に候花鞍をおき、五色をまじへたる轡をかけ、さも從容に打騎りて、漫々とあゆませ來る、郷右衛門ひそかに此官人を見るに、相貌もつともたゞしく、年紀は二十七八歳とみえて、頭には緑の編蘭笠を戴きて荷葉風に飜るに似たり、身には紅の狩襖を穿して蓮花日を弄ぶがごとくなり、腰には行縢をまとひ、足には緑鞋を穿き、一張の弓を帶し、一壺の箭を挿す、前後左右にはあまたの從者、鷹を擁る犬を牽て相從ふ、都て打獵の打扮と見えたり、這官人は乃是清和帝十五代の後昆桃井播磨介直常の家弟、桃井若狭助安近にてぞありける、

桃井侯綱轎を見るとそのまゝ、馬を躍らせてすゝみ來り、大に叫はりて云く、倆は執事の家士鷺坂伴内にはあらずや、何人のゆるしをうけ來りて我此山を闖がすぞ、伴内答へて云く、主人師直管領の命をかうぶり、小人をして此山につかはし、逆臣鹽冶高貞が妻子家人を擒へしむ、因て今此ものどもを捉へて鎌倉にひくなり、桃井侯大に罵りて云く、倆いかんぞ詐をいへるぞ、察するに事を管領の命に托して、鹽冶の妻女を奪とり、師直が不義の望を遂げしめんとのことにてならん、必然我此度にたがふまじ、伴内が云く、相公は何ゆゑ事をまうけて罪人をかばひ、小人等を攔給ふや、畢竟管領を藐むるの道理ならん、此山をさわがすに何の妨かある、いさゝか相公の管給ふことにあらず、すみやかに路をひらきて通さしめ給へ、桃井侯冷笑ひて云く、倆執事の權威をかりて揽に誇るといへども、恰も鷺鷀の鶴のいきほひに倚りて、威をふるふに似たり、我昨日營中にありて、管領の命せらるゝをきゝたるに、鹽冶の采地を沒收し第宅を破却すべしとのことにて、妻子家人を捉へよとのおほせをきかず、況や此山は我管理の地なり、何爲我懐に入窮鳥を、白々と汝等が獲物に做さん、すみやかにその人等をはなちやりて立去るべし、倘然せずんば、鷹の雉犬の兎に汝が頭を替て、鷺の羹を請ふべし、我家の菜刀の滋味を試むべきや、回答如何と喝し給ふ、伴内は桃井侯に心機を識破れて、一言半句も抵賴ことあたはず、忽鎗を撚て當先にすゝみ、雑兵に指揮して桃井侯の隊をやぶり、強て路をとほらんとす、曾て桃井侯は火性短氣の壯士なれば、これをみて益怒給ひ、左右をかへりみて、誰か那斯們うちとらんやと命じ給へば、拳を揮りてひかへたる家人等、簡々刀を揮ひて相むかへ、たがひに鋒を交へて鬪におよぶ、桃井侯の家人等は都て驍なる後生なれば、勢もつとも猛烈なり、そのうち一人出て鷺坂と鬪ふ、一來一往一去一回、たゝかひ十餘

合に及て駱坂此人に敵することあたはず、覘個空て駱鷂行を作し、拔歩して逃去ければ、鄰兵等は皆是虛心病的、駱坂が逃るをみて紛然として大に亂れ、遂に活捉をうち棄四面八方にぞ散失ける、桃井侯は伴內等數人が逃去りたるを見て、呵々と打咲ひて馬を跳下給ひ、從者に命じて轎子をうちひらかせ。夫人ならびに小衙內を扶出し給へば、鄕右衞門はみづから絆を引きりぬ、方縱兩人は龍潭を避け虎穴を逃れたるこゝちをなし、忽地上に跪き恭しく禮を叙て活命の大恩を謝す、桃井侯いそぎ貌好を扶起し禮をかへして云く、夫人なんぞ慇懃の禮におよばん、人の人を欺くを見ては、その弱をたすけその强をくじく、都是武夫たる者の好處なり、況や故廷尉と小人は親友たれば、抵回夫人等の危急を見て豈能これをしのびんや、師直再追手の兵を馳せて、跡をしたひ來らしめんは必定なり、さいはひ此所に一條の間道あれば、一刻もはやくこの路よりのがれ行給へ、かならず遲延して身をあやまち給ふなと懇に示しければ、兩人再三拜謝して云く、我們おもひがけず、相公のめぐみによりてあやふき性命を脫る、若久得恙なく今生になからへなば、異日いさゝか此洪恩を報ずべしとて、淚をおさへつゝわかれを告げてぞおち行きける、桃井侯は兩人を見おくり、影兒の見えざるにおよびて、ふたゝび馬にうち騎り、從者をひきゐてたゞちに獵場に赴給ひけり、さて兩人は桃井侯にわかれて只顧みちをいそぎ、風に殘ひ水に宿りていくばくの辛苦を避ず、三日を經て漸〻遠州路に經過、此日も看々天色又晚れんとす、但見、

紅輪低く墜ちて、玉鏡將にあきらかならんとす、遙觀れば樵子歸來り、近視れば柴門半掩ふ、僧古寺に投あれば、疎林に攘々鴉の飛ぶあり、客孤村に遊あれば斷岸に嗷々犬の吠るあり、佳人燭を秉りて房に歸り、漁父綸を收めて釣を罷む、點々たる流螢行露を照し、紛々たる宿鷺沙汀に下る。

斯て此日暮れて、兩人御路をいそぎ、行く事三里ばかりにして遠々地前面を望みて見れば、滂々たる一つの大河あり、乃是天龍川の上流なり、此とき已に初更すぎければ、はやく川をわたりて客店を索めばやと、岸邊にいたりこなたかなた看繞りて、渡船やあるとたづねけれども船なかりければ、こはいかにすべきといたづらに水面を呆着て站住けるに、忽然として蘆葦のしげりたるうちより、一艘の小船を漕て出來る、鄕右衞門これを見てむかひすゝみ叫りていへらく、やよ〳〵船家長我暫をその船にのせて川をわたすまじきや、しからばおほく辛苦錢をとらせて、その勞を謝せんずるぞ、船家長これをきゝて點頭き、すなはち船を漕來りて岸邊に著る、鄕右衞門大に喜び、且包袱包を把て船中に投入れ、夫人を扶けて船に上りければ、船家長は此包袱包をなげたる音、凛とひゞきたるをきゝて且虛華地よろこび、つひに櫓を搭て船を搖出し、はるかに對岸をのぞみて漕出せり、さて兩人は船中にありて頭を擡げ、四下を見わたすに、原是這天龍川は信州諏訪湖を源として、流きはめて急なれば、水聲洶々と激りて耳にとゞろき、波影滴々と照して晴をうばひ、苦凄じき光景なり、かくて船中流にいたりけるに、船家長櫓をひゞかせ、擅に曲兒を唱て道、

天龍河上天龍蟄、　常躍三水中未上天、
能隱能彰無見跡、　由來輕視柳營槽。

鄕右衞門此曲兒の意、將軍管領の權威をもおそれずといへるを聞きて、頗疑ひける處に、船家長俄に櫓を拖起げ、すなはち兩人に對ていへらく、旅客等はさだめて餓に臨給ひつらん、麪斫を食し給ふや粽子を食し給ふや、鄕右衞門打咲ひて云く、倆何をたはぶるゝぞ、切麪と粽子は世人みな好て食するものといへども、など此船中にありて得ることあらん、船家長冷咲ひて云く、這等說は原是喫得的にあらず、我遇

活の隱語なり、すなはち刀をもつて水中に斬こむをなづけて切麸といひ、衣裳を剝て丸裸となし索にていく〳〵へも捆り、水底にしづむるをなづけて粽子といへり、我今汝等が望によりてこれを行ふべし、いづれか回答せよとて、裝衣のうちより明晃々たる刀をとり出し、なかばを拔出してぞ赫しける、貌好は是を見るより、戰慄魂をうしなひ給ひけるが、郷右衛門はすこしも不慌、小衙内を夫人にいだかせ眼をくばりて云く、さては汝は海賊なるか、遮莫我輩を庸常の旅人と小覷て賊をなさんとするは、却て是爾が運命のつたなき所なり、夏虫火を撲ち焔を悲きてみづから身を燒くに一般、すみやかに船を對岸に漕去ずんば、立地に性命をうしなふべしと喝しけるに、船家長はこれをきゝもをはらず、忽刀を揮ひ勢に乘じて斬蒐る、郷右衛門は原來眼あきらかに手快勇夫にてあれば、これをものゝ數とせず、急に身を閃かせ、只一脚に船家長が小腹を蹋て柶に蹋倒し、腰刀を拔て已に刺殺さんとしたる折しも、艙板の底下より敗席をひきのけて、一個の大漢あらはれ出、夫人と小衙内を雙手に捉へて水中に投入れ、就勢に刀を舞して郷右衛門に斬て蒐る、郷右衛門は母子兩箇白浪のうちに溺れてたゞよひくるしみ給ふを見て、運命のかぎりとやおもひけん、みづから水中に跳入りてもろともに失にけり、斯て兩人の賊はあやふく事を作就、船中にのこりたる彼包袱を拈見るに、果して物ありしかば、得采もつとも大吉利市なりと喜悅び、つひに船をいづくともなく漕ぎて去りける、さて此兩人の賊はいかなる者ぞなれば、原來同胞の兄弟にて、兄は原甲斐の山中に寓て蔦戸を業とせしゆゑに、綽號を手銃六郎と叫慣す、弟は原出家人なりけるが、一善を不作衆惡を奉行し、竟に歸俗して評名を滅法八郎とぞ叫ける、今已に兄弟ともに此邊に徘徊し專賊を做すとなり、かくて兄弟の賊包袱包を奪ひとりてかぎりなく悅び、いそがはち船を下流に纜ぎて高堤に上り、彼賍物を裝衣に裹みて竹筐とゝもにこれを挑げ、いそぎ路をとりて家に回る、兄弟沿途說ていへらく、我罪頗日賭錢に利をうしなひ、穀匣の裡面に蜘蛛網を結び、酷燃眉なりけるに、也是天我的に一場の富貴をあたへ給ふ、慚愧〳〵といひつゝ、程なく我家にいたりて柴門を敲きければ、うちより一箇の女いでゝ門をひらきすなはちむかへ入れて、丈夫今夜は何ゆゑかくはやくかへり給ひけるぞ、且得采はいかにやといふ、此女は是兄の六郎が妻なり、弟の八郎が云く、嫂々且よろこび給へ今日の利市望外にすぎたり、女咲をふくみて云く、昨夜燈火の報あり今朝喜鵲の噪あり、必然福あらんとおもひしに、果してその應むなしからざりしか、六郎說て云く、今日八郎と〻もに船を天龍川に纜ぎて、專旅人を窺ひけるが好賈買に遇はず、滿船むなしく月明を戕せて歸らんとしたる處、偶一個の旅人小兒をいだき一箇の女をともなひて來るにあひぬ、その模樣もつとも奇貨と見えたるゆゑ、船に乘らしめ、是等を害して財を奪はんとしたる所、豈料らんや彼旅人すぐれたる勇夫にて、我敵することあたはず、あやふきこと急なり、時に八郎出て彼女と小兒を捉へて水中に投入けるゆゑ、彼旅人とてものがるまじき命とやおもひけん、みづから水中に跳入りてともに死をはんぬ、因てことゆゑなく此一包裹を奪ひ得たり、彼等さだめて這咱は閻家裏に往去、客店を索てこゝろよく歇みつらんなどたはぶれければ、妻呵々と咲ひ、やがて包裹をひらき見るに、柳條八絲の衣の片袖を扯裂き、叩金五十餘塊を裹みおきたり、その餘は旅の用にあてべき細々東西あり、妻が云く、此數ケ月は曾て好商賈にあはず、寂寞なりけるに、天偶此幸をたまはること、誠是金輪王の出現に値ひて、優曇鉢羅華のひらくをみたるがごとし、僥倖〳〵といひつゝ、食厨にいたり、櫥をひらきて一壺の酒と一盤の殺をたづさへ出、兩位且心を寛げて酒を酌み辛苦をやすめ給へとて、雀躍してぞよろこばひける、時

に八郎が云く、我おもへるに那們はかならず厮常の旅人にはあるべからず、伴なる女年紀は二十歳ばかりに見えたるが、その容貌美麗なること言語に叙がたきほどの活致なり、必ず縁故ある人ならん、また彼女の穿したる衣裳、此片袖と一般の衣服なりしが、火急にして剝とらざりしこと遺恨なれと説りけり、六郎が妻は爐火の上に磁瓶を架け、酒を熱め盪をこゝろみてありけるが、これをきゝて紙燈の下にいたり、彼片袖をふたゝび拈見ていへらく、此袖と一般衣服ならばさだめて好貨ならんに、をしきことにてありしと、只顧嘆息す、六郎が云く、我もさはおもひつれど事の急なるに因て奪ひとらざりき、八郎汝天明けなば那里にいたり、暗に女の屍首を捜索め剝とりて來るべし、八郎諾とこたふ、かくて兩人酒飯を喫しばらく休息て居けるに、たちまち遠寺の鐘聲耳にひゞきて、はや四更の左側なれば、六郎外面にたちいで尿を撒來りて妻に命じて云く、食厨に鼠の耗聲すなり、皿杯などそこなふべきぞ、汝宜く收拾めよ、火もよく埋めよ門もよく閉ぢよなど、賊の家も又賊をおそるゝにや、これかれ囑付、八郎よ汝も眠れとて兩人ともに房間に入て歇みけり、此六郎賊に似ず、是箇做家的人のごとし、さて妻は酒飯の器皿など收拾め、柴門を閉ぢて睡らばやと外面にたち出で、天色をあふぎ見るに、星移り斗轉じて夜もやゝ更わたり、月色朦朧として東西をわかたず、耳に觸るものとては只河水の激るひゞきと、まれに梟の鳴くのみ、寂としてもの凄凉ければ、いそぎて門をさゝばやと柴門にたちより、上栓んとしたるところに、恠哉黑暗中より白絲のごとき手頃忽然と伸いでて、今闕んとする門扉を攔住め、微聲して、奴家ものいひたきことのあるに、權此門扉ひらかせ給へといふ、是乃女の音聲なり、六郎が妻おもひがけざることにてあれば大におどろき、正に是冤鬼の夜に乘じてきたれるならんと、心中騒ぎてほとんど出桶の七上八落するがごとくなれども、さすがに賊の妻なれば、肝膽また常の人に似ず、やゝ兩腿の抖ふをこらへて、葦籬の縫より月影にすかして見れば、一箇の美女頎然として門外に站みたり、但見、

頭には鬟髪を絨縧のごとく垂れ、臉は素雪よりも白く、唇は紅漆よりも赤く、玉貌艶麗、芳容妖嬈として、巫女廟の花の、夢裏にのこれるがごとく、昭君村の柳も、雨外に疎なるに似たり、汪々たる涙眼珍珠を落し、細々たる香肌玉雪を消す、若雨病雲愁にあらずんば、定是憂を懐き、恨を積むならん。

原來這地方は是人郷にとほく、幽林の裏兎穴を藏し、深草の裏狐踪を印し、高梢颯々として夜雨樞を敲くのみ、人跡たえたる處なるに、しかも深夜におよびてかゝる美人のきたれること、いかんぞ恠まざらんや、畢竟此冤鬼は是甚人ぞ、且下回に分解を聽け。

（前編卷之二畢）

忠臣水滸傳前編 卷之三

第四回

鹽冶龍馬三鞭千里
寺岡神行一脚百歩

話說、當時門扉ひらけて、彼美女柴門のうちに半身をあらはしければ、賊の妻は好々眸子をさだめてふたたび見るに、渾身みな水に濕て渦溜々、表には白單衣をまとひ、裏に穿たるは五采の絲をあやどりたる柳條八絲の衣にて、彼五十兩の金子をつゝみたる片袖と一般の衣服なり、而も片袖扯破れてなかりければ、これをひとめ見るより、たちまち魂魄九霄の雲外にとび、而色土のごとくに變じ、地上に逼々的伏して聲だに出さず抖ゐけるが、漸々息を納て云く、夫人は是今宵奴丈夫のために、非命に死し給ひし人の寃魂にはあらずや、已に今此に靈をあらはし給ふは、さだめて讐を報給はんとにてあらん、請免〳〵、奴家きき及べることあり、人の死する七日を以て忌とす、一忌にして一魄散ず、七々四十九日にして七魄泯ぶと、夫人身上未一魄も散ずることあるまじ、我們累七卒喫の營齋追薦し、水陸道場を設け佛に供養し奉り、尙久覚亡靈を祭り、自今以後業をあらため、清淨の營生をなして、只夫人の成佛得脫をねがふべし、又明年の今月今日は小祥なり、奴家肯て爲に香燭を供へ、幽魂を慰し申さん、萬乞寃をはぶき憤をなだめ、奴們が一命を饒しこゝろよく佛果を得給へと、唯頭を地に穿てひたすら罪をぞ賠びける、此美女は原是夫人貌好にてありければ、彼女が說賠るを聞き心中におもひ給ひけるは、扨は此家は彼海賊の住址にて在りけるか

おもはざりき、草を踏て蛇を驚かさんとは、又も横禍にあふべきに、いそぎ逃去るべしと已に身を搏さんとなし給ふ、扨此夫人は前に水中に沈められ、今又此に來りたまへる、其故いかんとなれば、原來鄉右衞門は能水性を會たる者にて、彼時水中に跳入るとそのまゝ、水底を鑽りて夫人小衙內を撈救、水を越て對岸に上り逃去りけるが、夫人は半途において鄉右衞門を見失ひ給ひ、悞行て遂に此所に來れるとなり、放下一頭却說、這裏、鄉右衞門彼天龍川の危をまぬかれ、小衙內をいだき夫人を扶攙て走りけるが、四方茫々蕩蕩として蒹葦生茂て路なき處に至り、誤りて夫人を見うしなひ、大に狼狽して背より高生ひのぼりたる蒹葦のしげみを推わけ、彼に繞り這に出で、恰も風子のごとく狂ひてたづねけれども、月色朦朧と暗して東西をさへわかたざれば、更にその去向をしらず、殆心神疲れ奈何ともすること沒く、只呆れて站みけるが、心中に想道、斯此所に猶豫して又災害を惹出し、若小衙內をあやまたばいかゞすべき、不如且此を去りて人家をもとめ一宿を乞ひ、天明にいたりてふたゝびたづねんにはと意を決し、只顧爛泥を踏みつゝ、漸々漁人のかよふ徑路をもとめて、一味地に走りけるが、しきりに餓にのぞみて十二分の辛苦をぞましける、又半時ばかり馳りて此處を見るに、都て亂草迷離鬱濃なる廣莫にて、只一軒の家だになく、荒々としてたゞ狐兎の跡あるのみなり、此時小衙內は、鄉右衞門が懷にあつてしきりに泣給ひけるゆゑ、大に驚き摸りみるに、渾身都て冷て息もたゆげにみえたり、是乃水に滸れて肚中を損ひ給ひしゆゑなるべし、藥をすゝめんとすれども、包袱づつみをうばはれて身邊に一物を貯へず、乳を喂まゐらせんにも夫人此に在ず、せんすべもなきに、益喧てやみ給はざれば、こはそも何とすべきと天をあふぎて嘆息し、吁宇多帝の昆裔鹽冶の骨肉只今此に亡給ふにかと、聲をあげてぞ哭きける、一頭は小衙內の危急に逼り、一頭は夫人の身のうへ放

心不下、唯是心慌意亂、ばかりなり、正に沒理會ければ、かたはらの溝壑の中に設けおきたる水流會のほとりに立倚り、閼伽桶の水を水杓に掛とりて、小衙内の口中にそゝぎ入れ、自己が肌をもつてあたゝめ、須臾介抱して居けるに、忽然として遠々地より、鉦子をならし佛曲を唱ふる聲、風に倚ひゞき來りて、いよいよ幾分のあはれをぞ添へにける、かゝる折しも前面の徑路を過て、一個の客人手裏に灯籠を提げ走るの快きこと、恰も空を跳がごとくにて、ちかぐ〳〵と進み來る、郷右衛門忙々一聲叫て、大膽客官藥のたくはへあらばすこしめぐみ給へといふ、那旅客之を聞き、すなはち站住喝りて云く、儞は何等のやつなれば、夜中在黑地裏て胡亂に人を叫ぶや、我聞得たり、這地方には是強人の出沒せるおほしと、汝就是賊ならん、速に逃去ずんば後悔せんずと、刀の柄を掌り眼をくばりて立ちたり、時に郷右衛門睛をさだめて、彼旅人の光景を仔細に一看し、たちまち叫りて云く、汝は若寺岡平右衛門にてはあらずや、彼旅人も又郷右衛門を看一看驚きて云く、這等說的は是原哥々にはあらずや、小人かくと知ずしておほく罪を得たりと云て、兩箇喜ぶことかぎりなし、扨郷右衛門は、急且小衙内の危急を告げ、寺岡が身邊にたくはへたる藥をこひとりて、小衙内の口中に灌入などし、しばらくありて漸々苦痛やすまりければ、方に幾分の心をやすうし、息を吻とつぎにけり、然に平右衛門地上に身を礙し拜を行ひて云く、小人は是芥子般職的なれば、同府中にありながら、尊卑へだたり、遙に尊顏を識認耳にて、いまだ拜謁を遂げざりしに、今日はからずして天の引合をかうぶり、雀躍に堪ざるなり、郷右衛門云く、我未曾汝が面を眼熟せずといへども、久しく姓名をば聞及びぬ、軍中の飛報を掌る步卒に、寺岡平右衛門といふ的ありて、神行の法をおこなひ、急足の奇術を得て、能一日のうちに八十里の路を走り、彼紂王の費廉、梁山伯の戴宗にもおとらずと聞けり、今汝が路を走るを見たるに、尋常の人の及ぶ所にあらず、倘拾起眼に、當家の號衣を披したるゆゑ、必ず汝ならんとおもひ、且試に姓名を叫るに果て差はざりき、千聞一見にしかずとはこれらをこそいふべけれ、汝今半夜に此邊を過るには、さだめて來歷あるならん、いかなるゆゑぞや、平右衛門眼酸々的哭云く、小人頃日飛報の儀を命せられ、已に北國に赴き彼地にありて這回の異變をうけたまはり、恰も夢裡を走るがごとく空を跳りて鎌倉に歸るところに、はや居館はむなしう灰燼となり、一家の男女皆ちり〳〵に逃去給へば、いかんともする事なく、只得切齒咬牙憤に逼るのみなり、おもふに小人はわづかに三口糧を賜る微職なりといへども、君の恩波に浴し飢寒のうれひをしらず、枕を泰山の安きにおくこと、豈高祿を賜ふ人等と異ることあらん、唯是故主の重恩忘れがたく爲に殉死を遂げ、いさゝか大恩に報べしとおもひけるが、權且雲州に赴き大星大哥に謁し、主意にしたがひて兎も角も心を決すべしと、已に今雲州に赴く路中なり、豈料らんや此所にて小衙内の尊體を拜すべきとは、若小人を棄給はずんば、擔を挑ひ屐を把てしたがひ奉り、雲州に到り犬馬の勞を盡し申さん、これをゆるしたびてんや、郷右衛門云く、斯艱苦にせまる折から、汝に遇ひたるは、早天に水を望み、雪中に炭を得たるが似し、既是如此もつとも莫大の幸なりとて大に感激し、又彼舊路にて夫人を見失ひたることを告てはなはだ愁ひければ、寺岡聞て大に驚き、小人舊路にたちもどり夫人を搜索むべしと、已に身轉し走らんとす、郷右衛門扯住て云く、汝今的なき舊路にもどるとも、個樣の暗夜なれば力及ぶまじ、もはや四更もすぎたらん、權且人家をもとめて一夜をあかし、天明にいたらば兩人ひとしく搜索むべし、起先佛曲の聲きこえたれば、かならず此邊に寺院か草庵のたぐひあらん、いざや一搜しさがしみばやと、とかく議するほどに、只見遠々地林子の裏より一道の燈の光隱々と

閃出たり、兩人これを見て大に喜び、此燈のひかりをしたひ走去きちかづきて乃ち見れば、果して深林の裏に半搨不倒的家ありて、門外に夫人貌好ひとり站みて居たまひければ、郷右衛門大に喜び且其縁故をとひ、さて柴門のうちにたふれ居る女は彼海賊の妻なりと聞きて、忽一發の怒心上より起り、忙々小衙内をとりて夫人にいだかせ、走進みて強刀を拔くとみえしが、可怜賊の妻は一刀の下に兩段となりて死しにけり、此物音を聞て兄弟の賊睡を醒し、忽朴刀を撚りて跳出でひとしく兩人に對して斬て蒐る、原寺岡これを迎て鋒を交へしばらく鬪ひけるが、兩賊は敵することあたはずつひに籬を鎖りて跳さりぬ、原寺岡の兩人彼等をうちもらし、切齒牙咬憤りけれどもせんすべもなく、やがて家内を混攪して奪はれたる包裹をたづねとり、竈前にきたり兩箇の火把を縛了、火爐を撥開きて炭上に點着け、直に家を燒起來けるに、湊巧風緊刮々雜々地火起りて暫時のうちに灰燼となりぬ、扨此時郷右衛門夫人に告て寺岡を吹噓し、彼に拜謁をせさせければ、貌好は渠が忠義を感じ給ふにつけて、とかくさきだつものは涕耳なり、寺岡は乃うや〳〵しく夫人を拜し罷り、身邊にたくはへたる五七塊の摶黍をとり出して、兩人にすゝめおのれも喫して、權且肚饑をしのぎ郷右衛門と議して云く、もはや五更にちかしとおぼゆるなり、此處に猶豫せば事あしかるべし、哥々は小衙内を抱きてはしり給へ、小人は夫人を背おひまゐらせてともに走るべし、郷右衛門が云く、我は原來神行の法をしらず、豈爾と和に雙びはしることを得べけん、これは是蚊子の金翅鳥とともに、行くことの遲遠を捌るがごとくならん、平右衛門呵々と咲て云く、小人が這道術は別に又人をして走しむるの法あり、我後に尾てはしり給へとて、遂に郷右衛門に小衙内をいだかせ、おのれは夫人を背おひて、口に呪を念へ手に印をむすび、忽韋駄天神行の法をおこなひ恰も空中を跳ぶがごとくに馳去りけり、不在話中、再說、雲州府は宇多帝の後昆佐々木家累代の封内にして乃臨治高貞の本國なり、其比當府守護の家士は、臨治譜第の功臣八幡六郎といふ人の子大星由良といふ的なり、其性たるや聰明聚に秀で膽力人に過ぎ、世に希有の英雄なり、這人生得て、

眼は丹鳳の如く眉は臥蠶に似たり、滔溜々として兩耳に珠を垂れ、明皎々として雙睛に漆を點じ、脣方にして口正く、志氣堂々として威風凜々たり、其爲人忠義を貴み名利をいやしめ、好で文を學び武を講じ、孫吳が秘術に通達して、十八般の武藝一として曉らざるはなく、誠に古往今來に雙なく、世に揭然たる豪傑なり。

却渠が智謀聚に越たるにより、人皆諸葛亮が再生なりとて、乃混名を褒孔明と叫慣す、這是唐の王伯當に似たる人を叫て褒伯當といひしたぐひにて、孔明褒といふ意とぞ、且說大星雲州府にありて、時方に孟夏の天氣にいたり、一日閑暇に乘じて府中を出で、暗に市街の動靜を窺はんと欲ひ、故意微服に粧束して郊外をさしてゆかんとす、其打扮怎生となれば、

頭には一頂の鞜面羅笠を戴き、身には一領の皂羅外套(黑きひとへ羽織)を披け、腰下には一具の上馬袴を縒ひ、身邊に兩口の銀裝腰刀を跨び、手中に一把の摺扇子を執る。

已にして一箇の僕をも領ず、獨自府門を出て市街に臨み、此彼を看繞りて民家の動靜をぞうかゞひける、爰に當府の背後に一座の高山あり佐々布山と號く、もつとも風景他に異なる勝地にて、山上に一ッの城塁廟あり、此日大星遂に此山に上り、四方を繞りて風景を遊覽し、頓て彼廟のうちに入り、殿上にひざまづきて香を拈り拜をなし、武運長久を祈念し神拜罷りて廟門を出たるに、華表のほとりに數箇の黄蝶翩々と

群飛ぶ、大星手をもつて額に加へ、笠を天ざまに飜してこれを仰ぎ看るに、只見那黄蝶しだい〳〵に飛集る、其數千百をもつてかぞふべし、或は塊り或は碎け、飛去飛來りて四面八方に散亂す、其光景恰も鬪を做すに似たり、如此する事半時ばかりつひに空中に飛去て失せたり、大星は瞬もせず此光景を看て自言自語說道、嗚呼怪哉昔日寶治年間、相州鎌倉に黄蝶集り、府中に充滿したる事あり、東鑑に云く、承平には則常陸下野、天喜には又陸奥出羽、四箇國のあひだに此怪ありて將門貞任等鬪戰に及ぶ、是兵革の兆なりとしるせり、今已に此怪異を見ることおそらくは是當家に鬪諍の起るべき兆にてはあらず麼、可怪〳〵といひて、手中に執るところの腰扇手を去て地上に墜をおぼえず、只惘然として站みけり、此折しも前面の阯路より、一箇の丫角の年小的白馬に鞭を揚て跳せ來り、大星を見るとそのまゝ馬を跳下りけるが、鞍馬の疲にやたちまち地上に悶倒る、大星これをみて何人なるやと、忙々向進みて看一看乃是兒子力彌なり、頭には白布の抹額を結ひ、身には苔布の勒肚巾を繫び、都て馬遞の模樣なり、大星大におどろきいそぎ扶起して身邊より一合の香撞をとり出し、醒藥をとりて口中に灌入叫喚しけるが、とかくして方纔にぞ醒轉來ける、斯て大星一聲大に喝て云く、倆武夫の身にも似ずいかに偖軟弱なるや、察するに火急なる大事の飛報とおぼえたり、何事ぞ火速報與よ樣子は如何〳〵と、大に焦燥て催促す、力彌は父親に志を卿されて晴をみひらき息を吻と紓て、這回の大事は最等閑の事にあらずと說らんとして は昏倒ことあまたびにして、漸々力足を踏み起居て云く、當月一日相公誣伏して破肚をなし給ふ、是執事師直が奸計に陷給ふゆゑなり、其仔細は如此〳〵這般〳〵と、有枝有葉的細說ければ、大星は逐一に是を聞き、唯是三魂七魂を失ふがごとく呆れたるばかりなり、皆に力彌懷中より錦の帕につゝみたる一鞘の解手刀をとり出し父に告て云く、此刺刀は乃これ薩州浪平行安が治ひたる良劍なり、這回の異事原是此劍より起り、故主師直が額を傷り給ひしも、自盡をなし給ひしも、都て此刺刀をもちゐ給ふ、已に死に臨み給ひ小人を近づけて命せられしは、此刺刀には我冤魂をとゞめたれば、倆が父由良にあたへて遺留物と作す、倆速に雲州にいたり父に遇て我透骨の冤生死忘れがたきことを報知せ、我に替て讐を報はしめよとありし遺囑により、これまで携候なりとつぶさに說りければ、大星はうや〳〵しく劍を接り、たちまち大に聲を放ち、天に號び地に哭みて罷ざりけるが、漸々心を靜め、頓て刺刀を拔て鞘をはなち看一看、俠然として鉾に鮮血を濺ぎ、抵面鹽治侯の血の跡をとゞめ、来乾かざるをみて、益涕を下し、刀の尖を舌端にのせて血を啜り、都て喉のうちに呑下し、依舊鞘にをさめ帕に裹みて懷におし入れ、只頭を點く耳、然し口中說ずといへども、鹽治侯死臨の一句、たゞちに五臟六腑に透到、此時已に復讐の萌をぞあらはしける、斯て力彌に問て云く、倆はいづれの日鎌倉を起程したるや、力彌答て云く、小人諸士と、もに主公の遺骸を葬り、香儀を施し冥福を修し奉りて後、昨日午後に鎌倉を發足し、星夜にはしりて、凡二百餘里の路を一日半に馳來り候、大星これを聞きて大に驚き、力彌が騎りたる馬を見るに、廼是天下無双の良馬千里玉獅子といふ馬なり、抑這龍馬は其色都て雪よりも白く、頸は雞の如く背は龍に似たり、高八尺長一丈あり、一日のうちに能千里の路を跑るとなり、前年故廷尉後醍醐帝に此馬を進奏せられし刻、主上叡慮たぐひなく、萬里小路藤房卿に勅して、此馬の吉凶を問給ひけるが、乃藤房卿の答奏に云く、往昔前漢の文帝の時、一日に千里を跑る良馬を献ずる者あり、公卿大臣皆相看て之を賀す、文帝笑ひて曰く、朕吉に行けば日に三十里、凶に行けば日に五十里、然與前に在り、屬車後にあ

り、朕獨千里の駿馬に乘じて將安之乎と、乃其道の費を償ひて馬を返さる、臣熟恐意をもつて想に、此龍馬も大逆不慮に出來の日、急を遠國に告る時、聊用に得あらん歟、是靜謐の朝に出て兼て大亂の備を設くるに似たり、豈不祥の瑞にあらざらん、依舊高眞に返し給ふべしと、攀今弔古て諫め給ひつひに馬を當家に返させ給ふ、然に故主斯る駿馬を棄るに忍給はず、彼梁山伯の玉麒麟が騎たる照夜玉獅子馬に比して乃千里玉獅子と號け、鎌倉に牽せて飼ひおかれけるが、果して今凶事の急を告るによりて此馬の得をあらはす、嗚呼藤房卿の先見髦髪も差はざりしと、只顧感嘆して居たるに、又前面の徑路を跳來る人あり、遥に觀れば蛺蝶の舞ふがごとく、近視れば大蟲の跑るに似たり、是乃、原郷右衛門寺岡平右衛門の兩人、夫人貌好並に小衛内を負抱きて走來れるなりけり、此人々おもひがけず此にて大星に遇ひ、大に喜びて且二三分の力をぞ得たりける、大星は夫人小衛内を見て、慌忙地上に跪て恭禮を做ければ、貌好はひとめ大星を見給ひ、頻に胸せまりて一言のおほせもなく、只涙にむせび給ふのみなり、郷右衛門は大星に一禮を叙をはり、且寺岡が好處を吹噓して面謁を遂げさせけり、大星は自廚門の内に入て殿上に上り、帳幔の内に收めある所の一張の鵠弓と一枝の響箭を携出で、蒐を望て府中にこれを射こみたり、郷右衛門これを見て問て云く、かく箭を發ち給ふは是何のゆゑぞや、大星答て云く、這是號箭なり、曾て此廚の内にて弓箭を設けおき、若外より火急の大事を府中に告げんとおもふときは、此のごとく箭をはなち腹心の徒に號を示すなりといふ、郷右衛門は之を聞て、大星が平日の心懸計の奥妙なるを感じけり、扨大星は夫人小衛内を請て、宮殿の上にのぼり首席に在しめ、力彌郷右衛門平右衛門等も挨次に居ならび、三長兩短會的話に、益流涕して不覺半晷ばかり過しけるが、惟哉宮殿の床の下に鈴の聲して令々と耳にひゞく、大星此ひゞきを聞き忽身を起し坐を立て帳幔の内に入り、香華燈燭を供ふる一脚の卓子を把て一邊に搬びのけ、其下に又一片の板あるを揭起せば、原來此處に礎々たる一箇の窾あり、窾の中に聲ありて云く、如何なる密事ありて號箭を施し給ひしぞ、大星窾のうちを臨み手を擧て搖き、聲を高すべからず速窾を出よといふ、これを聞きて穴のうちより、一個の大漢一箇の火把を揮照して窾出る、みなくいぶかり見るに、這人は是竹森喜太八といふ的なり、喜太八は穴を出て四邊をみるに、夫人小衛内を首め列坐してありけるゆゑ、大に驚き其まゝ火把を打滅し地上に跪きて拜をなす、大星鎌倉の大變一五一十つぶさに告ければ、喜太八は只呆れて言をだに出さず、原來這喜太八は幼より籌を飛び壁を走る奇術を練熟せるより、今當府に在て軍中間諜の事を掌り、曾て大星が腹心の徒なり、大星重て喜太八に對て云く、斯る大事にのぞみては野心の者出來んも計がたく、府中においては放心密計を議しがたし、此故に號箭をはなち此旁出窾より偏をよびむかへぬ、原來偏は當國に生長し、鎌倉にては面を眼熟ものなし、これ幸なり偏此より一直に鎌倉に赴き、躬を変しおもひを霊して暗に仇家の動靜をうかゞひ、急足をもつて告しらすべし、尚異日又別人をつかはして偏に力を添へおほく金銀をおくりて用に當つべし、かならず事をあやまつべからずと仔細に囑付、すなはち身邊にたくはへたる、些の金子をとり出し付與て盤纏となさしむ、喜太八は大星が命をうけすこしも猶豫せず、いそぎ粧束を更んとす、郷右衛門は身に穿したる行裝を脱て、竹森に讓りてこれを穿しめ、即時に事とゝのひければ、竹森はすなはち夫人をはじめ衆人に別をつげ、一條の間道をのぞみて鎌倉さして走去きけり、原來此ごとく廚内にぬけ穴を設けおきて軍用の便とせしは、皆大星が密策にて、腹心の者の外は知る人更になかりしとなり、

扨亦大星は夫人を請て彼龍馬に騎せ、寺岡に命じて小衙内を懐に抱かせ、夫人に從はせて故廷尉の家弟石堂縫殿助の居館に送りまゐらせぬ、かく夫人小衙内をもわざと府中にむかへざるは、野心の者あらんを懼れてなりとぞ、其比は石堂縫殿助は京都に居住し、雲州よりは七十餘里をへだてけれども、寺岡は神行の法を行ひ、馬はもとより千里飛行の良馬なれば、人馬ともに恰も風のごとくに跳行き、此日申の刻ばかりに此を打立ち其夜四更の左側京都にぞ著ける、誠に怪異のことゞもなり、斯て大星が指揮全とゝのひける時、天色已に晩ければ、大星はすなはち、郷右衛門、力彌を領て府中に歸りて、其夜は各歇みけり、これより後、矢間、千崎を首として、鎌倉に在ける諸家士、追々當國に逃來りければ、大星は府中において彼等と集會し、其剛聽を計試みて、鉄九大夫父子がごとき不忠の徒をはぶき、義をおもんじ命をかろんずる金石の黨を結び、衆議を決して鎌倉の官使をむかへ速に館地をわたしまゐらせ、一齊に離散しければ、府中の男女もおのがさまゞ四方に散亂して立去りけり、誠に哀の光景目も當かねたり、不題休絮繁、再説、當國に松江と號る裏海なり、すなはち是伯州那和港に通せる水路なり、大星は遂に館を退き且京都に赴くべしと思量し、此江に一艘の船を促して家伙をつみのぼせ、妻阿石、兒子力彌とともにうち乘り、一箇の家僕に柑をかゝせて遙江心に漕いだし、首を回して腦後を顧れば孤城空しく煙霞の中に聳え、江水洶々とながれて涙の媒となる、大星想道故主世に在しときは富貴威權倶に保たせ給へば、詩船に錦の纜を解き、桂の櫂、蘭の槳、月下に枻を鼓き我們まで月明を賞して倶に歌ひけるに、今日は只孤舟に身を倚て數行の涙棹の滴となる、功成り名遂げて吳湖に身退きたるたぐひと豈ひとしからん、得失榮枯は世間の常といひながら無爲世の光景かなとおぼえず涙を洒ぎ、只戀々として故郷を離るゝにしのびず、只顧哭みければ、船こぞりて哀をぞ催しける、扨ひに那和港を漕みて漕去けり、

不在話下、有詩爲證、

功就泛湖范蠡謀、　喪君蓄怨大星才、
恨然相脅郷園處、　拭淚舟中首幾回。

且説鹽冶の家士に鉄九太夫と叫做的あり、其身老年に及び高祿を喫むといへども、平日貪欲を事とし大に奸佞の徒なり、兒子真九郎も又父にまさりたる悪棍にてありけるが、這回當府退散の騒動に乘じて、府中の錢財を貪りとらんと、もつぱら奸計を施しける折しも、一夜風雨烈を幸として、父子兩人府中にまぎれ入りて府庫にしのび、若干錢財を偷みとりて一概に隱匿き、おのれが家伙とともに一艘の船につみ、他郷に逃去べしと父子自これを監押して、此松江の岸にそひ大柳樹のかげより喃々として、漕來る所に遙對岸の蘆葦深きうちに一個の大漢かくれ居て、此船の來るを窺闚きけるが、猛身を倒にして水中に跳入り、水を鑽て彼船にちかづき、刀を以て船底に孔を鑿開ければ、水滾々と湧入り少刻もあらずして船は水中に沈みけり、鉄父子は船艙の内に有りてこれをしらざりけるが、俄に船底破れ水の湧入るを見て大に驚き慌忙て岸に跳上り、這々一命は脱れけれども、船につみたる家財並に一概の金銀、或は流れ或は沈み一點ものこさず亡ひけり、這大漢は乃是原郷右衛門なり、鉄父子が不義非道をにくみ、此水路に來らんを察し此所に躱居て相俟ち、果て今他們父子を切して彼一概の金銀を奪回し、不義を以て貯へたる家財を亡はしめて、すこしく憤をぞ歇めける、話休絮煩、且説京都絺辻に單工の俚醫あり大田丁竹と叫做ぬ、彼が亡父は大宋の名醫安道全が術を傳りて、和氣丹波の兩家にもおとらざる高

醫にてありけるが、此了竹は爲人惡俗にして貪欲おほく、殊に大酒を好みて酒量聚に過ぎ、大に醜行の徒なれば、父母歿して後つひに醫業を廢し、今已に幇間を做して營とし、平日人家の子弟を牽引し烟花の地に到りて、もつぱら人を惑しおほく錢財を貪る、故に人皆彼に一箇の綽名を設けてすなはち烟花和尚とぞ叫ける、想に古より酒量にすぎて身を傷り家を損ふもの其例多し、慎むべき事なり、常言にいふ、酒能成事、酒能敗事と便是小腦的喫了、也太腦と做了、何況性高的人をや、古人酒をいましむる詩あり、說得好、

平帝喪レ身因二酒毒一、江邊李白損二其軀一、
勸レ君休レ飲二無情水一、醉後教二人心意迷一。

一日了竹曲中に到て大に爛醉し、夜に及て歸らんとするに、沿途醉益發して、頭おもく脚かろく、東に倒れ西に歪み浪々蹌々として、やう〳〵家に回着て、暗中を摸りて鑽具を索め火を發出して燈を點じ、牀に上りて已に睡らんとしけるが、酔眼模糊て偶食厨の柱側に安したる、摩訶迦羅天の雕像をみて大に罵りて云く、爾箇の死飯何ぞ我を見て笑はづかしむるや、平日棗餅神酒を供養していのれども、只晏間と坐を安うして喫ふ耳にて、酒家に半點の富貴をもあたへず、益困窮にせまらしむ、汝は福神には あらずして我爲の究鬼なり、烏晦氣殺才、いで我段を見すべしとて、雙の袖を捲起げ一根の劈柴を執りて、彼天地位下を一打うちければ、一聲刮剌々とひゞきて香華燈燭敗亂し、木像はひるがへりて地上にぞ落ちける、了竹呵々とうち笑ひ、燥脾胃光景哉と聲不轉つぶやきしが、酒力に勝へずそのまゝ扒倒れてぞ睡りける、已に三更の左側にいたり、四方寥々と靜る折しも、しきりに犬の吼聲して又門外に人ありて

忙々門を敲く、了竹は前後不覺に熟睡すといへども、あまたの蚊子酒の香をしたひ來りて、渾身を嚙けるゆゑ、痒にえたへず、偶ねぶりを醒しけるが、門をたゝくひゞきを聞つけて、頭を擡げ一聲喝て云く、汝は何等の討債なれば、半夜に來りて我睡を妨ぐるや、門外の人叫はりて云く、某は曲中のものにて候が、今夜我家に一人の富翁來り、俄に足下をよびむかへて、宴席にそへんとの事なり、早々來り給へといふ、了竹は未醉醒めざれども、もとより貪欲はわすれざれば、肚裏想道、嘉客われをまねくはかならず好造化にあづかるならん、夜中をいとはずして去に不如と、やがて牀の内を倭僜出で、紙炬を秉て柴門に立より、栓子を拔去りて門扇をなかばひらきけるに、忽風吹入りて燈をうち消し、暗々として眞の黑夜となる、時に門外より、五六人の大漢子どろ〳〵と擁入りて了竹を捉へ、不由分說して一乘の轎子に推入れ、麻繩をもつて轎上にまとひつけ、中央にとりかこみて飛也似走去けり、畢竟這漢子們了竹を捉へて、甚處にか去る、且下回に分解を聽け。

（前編卷之三畢）

忠臣水滸傳前編 卷之四

貞九郎 剪徑 得蒙 汗藥
智古川監 押送 金銀 擔

第五回

話說當時、了竹は轎子のうちに伏居て何の故をしらず、或は高に上り或は低に下り、凡一時ばかり走りけるとおぼえしが、忽風颼々と梢をならし、水渤々と谿に激りて、悽慘地方に到りつきぬ、此に轎子を扛居る戸をひらきて了竹を引出す、了竹は唯是夢の醒めざるがごとく、惘然としてありけるが、漸々酔眼をひらきて四方をのぞみ見るに、此所は是いづれの地なるをしらず、岩石漸々とそばだち、樹木陰々と茂り、週遭には高木柵をまうけ、中央に一座の草廳あり、後の方には四五軒の小屋を建て、おの〳〵うちには火の光あきらかなり、草廳の前には矛戟を立てたり、惟哉、髯髪、赤鬚、黄蠟様したる、悪鬼羅刹のごとき者、個々手中に明晃々たる朴刀を提てならびをれり、扨彼了竹を捉へ来るものども、何やらん奥の間に向ひて叫告げけるが、少刻ありて内より、一個の黒漢はしり出で、大王少停廳上に出で給ふなりとて、俄に廳の正面に一の胡床を設け、四方に燈燭を點しつ、其光恰も白日のごとくなり、良ありて一個の大王緩々として廳上にゆるぎ出で、乃胡床の上に坐す、這大王生得て相貌兇悪なり、

雙の眉は濃して烏雲のごとく、兩の眼の光は急電に似たり、面圓耳大鼻直口方なり、腮の邊に鬚鬚糊密、身材六尺に過ぎ身軀都て生鉄を剛成したるがごとく、頭銅を鑄就したるに似たり、其粧束いかんとなれば、頭には一頂の枯草の編巾を戴き、身には一領の熊皮の短裘を穿し、腰には一具の鹿皮の鞋子を纏ひ、身邊に一口の大腰刀を帶びたり。

此時晩夏の天氣なるに、此ごとく暖衣を穿す、此所若深山の溼地にあらずんば、恐是幽冥府なるべしと、了竹は已に面色槁木のごとく變じ、六神無主、恰も死したる狗のごとく、地上に倒れてありけるが、やがて大王の面前に引出さる、時に大王眼を瞋し一聲喝して云く、汝新到的罪人此をいかなる地方とおもふぞ、此所は是陰司地府にて、老爺は乃閻羅大王なり、汝前生の作業奸詐を事とし、もつぱら良家の子弟をして魅惑せしめ、陷坑におとし入れて許多の錢財を貪れるよし、三角眼回々鼻のうつたふるにより、罪をたゞさんため鬼兵をつかはして召よせたり、汝を拔舌地獄につかはし、此毒舌を拔去りて、无量の苦惱をうけさせん、其旨應得べしといふ、了竹は只懼怕にたへず、戰々慄々として聲をもなさゞりけるが、之を聞て大に哭みて云く、扨は此所は烟家裡にて小人は死したる哩、曾て内損の病あらんとはおもひけれども、豈料んや熟睡の裏に暴卒すべきとは、最些の不善は做しけれども、さまで大罪を犯したることなし、伏願くは閻君憐をたれ給ひ、蘇生なさしめてふたゝび娑婆に回したび給へ、然ば自今已後心を更めて、阿彌陀佛の寶號を稱へ、懈怠なく成佛得脫をのみねがふべし、若亦千萬歳を經て、ふたゝび死するならば、天堂にいたらしめ給へ、それも今は望にあらず、唯是娑婆こそしたはしけれと、數行の涙を下し、鼻潤をすゝりて嚎哭ければ、大家面を覘合せておぼえず咄とぞ咲ひける、大王も忍びず呵々とうちわらひ、方纔面を和げて云く、汝かならず哀むことなかれ、我今いひし言は都て皆要子なり、實は是此所は松尾山の石窟にて、我はこれ山賊の頭領なりといふ、了竹之を聞てふたゝび一驚をくはへ、怕ること臂

ふるに物なく、此時酒氣全醒めたり、扨此大王は是誰ぞなれば、是別人にあらず、鉄九太夫が兒子鉄貞九郎なり、彼生得て性兇なるにより、父親九太夫に擯斥せられ、身を安ずる所なく、竟に落草して此山の石窟に潛匿れ二三十箇の小喽囉を集め、おのれ頭領となりて、擅に往來の旅客を劫し、金銀財貨を奪取り、人を殺すこと麻を刈るがごとし、故に人皆彼を烈火毒蛇のごとく怕れ避け、綽號を稱じて殺人鉄九郎と叫慣はす、彼が躍いかなれば父子ともに斯極惡なるや、眞個是、

蟾蜍生レ卵爲ニ科斗一　惡棍育レ兒作ニ刁從一。
水中科斗長成レ蛙、　林下桑蟲老作レ蛾、
蛙跳蛾舞仰レ頭笑、　焉用鯤鵬鱗羽多。

那貞九郎みづから勇力にほこり、天下に人なきことをなせども、到頭一箇の義臣に撞見て、遂に誅戮せらる、昔日樂天一首の詩あり、說得好、

當時貞九郎、重ねて了竹に對て云く、汝且心をしづめて我說を聞け、汝をとらへて此所にいたらしめたるは、別の事にあらず、曾て汝が家には宋朝梁山伯の好漢等が用ゐたる、蒙汗藥の奇方をつたへたると聞く、彼奇方は我手にありて益おほき樂なり、殊に汝は幇閒を業とし、能人情につうじ、諸國の鄕談を曉し、口技等を會て、然も舌劍人を害するの達人と聞きおよびぬ、因て今より後汝をとゞめ、此山寨にやしなひて、機密の用に當とおもふなり、汝心を傾け意を投ち、我にしたがふまじきや、了竹は之を聞き只頭を地に穿ちて只顧家に回らんことをねがひ、面に迷惑の色あらはれければ、貞九郎左右をかへりみて、汝等速彼が心を決せしめよと叫はる、小賊等應諾、物陰より一輛の車を推出し了竹が面前にいたらしむ、了竹これを見るに、おのれが家伙秋毫ものこさず、車の上に載おきたれば、只果れたる計なり、貞九郎が云く、我起先小賊をつかはし、汝が家を燒はらはせて白地となし、家財をのこらず轉とりて、乃那里にあり、いづれの家ありて回らんとおもふぞや、了竹今は奈何ともすること沒、只頭をたれて少刻沈吟して居けるが、たちまち性質の浪風發起おもへらく、事已此に至りぬ、貧營を做して艱苦にせまらんよりは、寧索賊の夥に入て快樂をきはめんに不如と、遂に心を決して其議に應じければ、貞九郎大に喜び乃小賊に命じて房間のうちに導かせ、權且歇せけり、已にして不多時蔗の方に、雞犬の聲きこえはや五更の左側に至る、皆に小賊等三人の漢子を綁め、三荷の花燈をうばひ、山を上り來りて、貞九郎が面前に跪き報じけるは、某ども昨夜後山に埋伏し、鈎索を地上にひきて、人もや來ると待居たるに、果して此者ども索に鈎りて倒れしゆゑ、早速いましめ此燈籠を奪とり、大王に獻じ奉るなり、貞九郎斯と聞て、且其燈籠を見るに、或は紗燈泡燈あり、或は滾燈猜燈あり、其外種々花鳥の形をつくりたる燈籠ありて、其細工の巧なることは兎角言語につくしがたし、貞九郎問て云く、汝等は何方のものにて、此燈籠は何の爲に持はこびぬるぞ、彼男どもは大に怕れ、今も命をとらるゝかと、活たるこゝちもなく、地上に拜伏し答て云く、某等は曲中の者にて候が、曲中の例として毎年六月土地廟の會を營み、家毎に燈籠棚を設けあまたの花燈を點し、吹彈歌舞優諢等をなして、神慮を慰するなり、是乃當初小松内府の建給ひし、燈籠堂の遺例なりと承る、因て今年も個樣に隣國より燈籠をはこび神會を營み申すなり、しかるに昨夜先時て深夜に蔗を過り斯とらはれ候ぬ、萬乞免し回しめ給へ、貞九郎が云く、曾汝等が居住の地は貴賤聚集繁昌の地と聞く、定て新聞あらん、老爺に說きかせなば放ちかへすべし、彼男云く、別に新聞はあら

ざれども、頃日もつぱら人の語るには這回足利尊氏朝臣高位に昇給ふにより、諸國の列侯我おとらじと慶賀の禮物として、あまたの金銀財寶を贈り、營中寶の山をなす、是未聞不見の事なりと、世こぞりて外議いたす所なり、貞九郎咲ひて云く、たとひ足利の營中たりとも我此山寨の富貴にはよもまさるまじ、此花燈は是我此山寨にありて益なきものなれば、汝等にかへし兒しつかはすべし、常言に道、

當レ爲レ仇レ貨、　莫レ作レ讎レ人。

若汝等一命ををしくおもはゞ、後來かならず錢財を抱きて、我此山中を過るべからずと云罷り小賊等を叫ていましめをとらせ、花燈をかへしければ彼男等は方纔魂魄身にある事をおぼえ、しきりに拜謝して急ぎ燈籠を挑ひ山を下りて走去りけり、不在話下、再説桃井若狹助安近は、這回足利尊氏公位たかきに昇り官たふときに遷給ふ慶を叙べんがため、あまたの禮物を調へ、賀古川本藏行國と叫做一個の老臣を撰みて使人とし、急ぎ京都に禮物を贈屆くべしと命せらる、因て本藏は吉日を揀みて行裝をとゝのへ、黄金五十兩白銀五百兩、彩緞五十端、是等の禮物を一張の禮帖に記し、五脚の白木盤子に盛り二合の長韓櫃に收め、各其上に一の小旗を挿し旗上には十の文字を寫けて道、

進二御足利將軍一慶賀禮物

扨此二合の長櫃を健なる脚夫に挑せ、十餘人の步卒を領し、嚴に用意して自身これを監押し、已に鎌倉を打出で京都をのぞみて進發せり、斯て只顧路を促けるゆゑ、ほどなく勢州江州の界鈴鹿山に到りぬ、過る所都て山路の險阻なり、殊に此皆は六月の下旬にて、炎熱はなはだ人を蒸し堪がたかりしかば、衆皆大に苦み動もすれば此彼に站住歇まんとほつす、本藏衆人を喝して云く、此鈴鹿山は古より强盜の出沒、今も尚賊ありと聞く、身邊に貨なき旅客すら、五更半夜に過るところにあらず況我們は主公の命をうけ、大切の禮物を身に干る、何ぞ敢て此所に、足を停め皆を移さんや、一刻もはやくいそげとて、當先に進み、衆人を催促して險路をいとはず走りけるに、已に午刻に及て暑氣ます〳〵はなはだしく、路邊の小石ことごとく燒て火のごとくなりしかば、衆皆大に足をそこなひ、一步もすゝむこと能はず、然るに幸此所に一株の老松あり、凡五六人圍もあるらんとおぼゆる稀有の大樹なり、枝葉蓑々として地上に垂れ、藤羅まとひかゝり、四方二十間ばかり日の光を遮る、此曆應の比は此松をもつて勢州江州の界をかぎれるとぞ、本藏は心はなはだ火急といへども、皆々苦むを見て、只得此松樹の下に槪をおろさせ、權且休息なさしめけるが、此折しも對面の杉林の裡に人影あらはれ、一個の經紀人一籃の漢子を挑來りて、林の裏に擔をおろし、兩袒て乘涼居たり、又遙の下より一個の漢子一荷の桶を挑ひ、擡に曲を唱ひて山を上り來る、其曲に道、

從來棲著芙蓉麓、　釀以二芙蓉雪水溜一、
天下無双白乳酒、　暑中還使二胸中寒一。

此男已に山を上り杉林の邊に來り、擔をおろして乘涼ければ、漢子商人此男に問て云く、汝が此桶の内なるは乳酒なるか、此男答へて云く、いかにも白酒なり、漢商人が云く、汝は曾此邊にて識認商人なるが、何方より來れる人ぞ、此男云く、足下は今某が唱曲兒の意を猜せざるや、某は是富士山の麓に居住し、白酒を釀して商ふものなるが、彼地は頃日旅人稀にして營牛閑なるゆゑ、遠此邊に來りて挑販いたすなり、漢子商人が云く、汝が曲兒の意猜せぬにはあらねど、此邊には賊おほく徘徊して盛人を害

すにより、某等がごとき身にたくはへなき商人すら、心をゆるしがたし、故に纖細にこれをとふなり、汝が言語聲音正是那地の郷談なり、我且疑を省きて酒を沽ひ暑熱をはらふべし、彼男咲戯れて云く、某が酒にはかならず毒あらん、求給ふことなかれ、聚商人も戯曰く、喩小栗廷尉の酒なりとも我において妨なし、實に幾の價に一碗を賣るや、彼男がいふ、一碗の價烏目八錢なり、聚商人はやがて身邊の蝕袋の裡より、單錢を摸出し四五碗の酒を買とりて快く之を飲み、曾て富士の白酒は、名物の譽高きことを聞およびしに果して十二分の味ありと舌をならして譽めける、彼十餘人の歩卒脚夫等は、起先より松樹の下に在て此光景を看に馥々たる酒の香風に倚て鼻を襲ければ、忽、眼中出火、口内流涎、皆々商議して云やう、我們暑氣に蒸て大に渇すといへども、此邊には一點の水をもとむる所なし、彼一桶の白酒を買取て喉をうるほさば可ならんや、みな〳〵一齊にこれよからんと喜びて即箇々錢を湊んとす、本藏は只櫃を守りてありけるが、これを見て忙々喝て云く、汝等我下知をもうけず、口を貪りて又も大事をわする、や、曾此道中には賊おほく、種々の計策をまうけて旅人を害すと聞く、一碗の酒も擅に飲がたし、汝等かならず酒を買ふことなかれ、歩卒等がいふ起先より聚商人が光景を何と見給ふや、彼も已に疑をはぶき、眼前に四五碗の酒を飲みけれども、すこしも異儀なし、我們若酒にても飲ずんば、立所に渇死すべきに、望らくはこれを察し給へと、一齊に恨を含て申しけり、彼賣白酒人一邊に在て本藏が歩卒等を喝るを聞き、聚商人に對して云く、謐賊等屢旅人を害すにより、某等がごとく清淨の營生をなす者も、儘疑に干りて衣食のみちを絶つ、烏晦氣死賊ならずや、かるがゆゑに某が酒を賣るには、自己且一瓢を飲て是を試み、其後賣申なり、聚商人はこれを聞頭を點て有理〳〵と答ふ、本藏は白酒賣が今の說を聞きて、此心中倜空を生じ、乃想道彼が說ごとく試みたるのち酒を買ば最異儀なかるべし、宜且歩卒等が望に應じ、酒を飲せて志を酬すべしと、方纔其儀を免しければ十餘人の輩、本藏が疑をはぶくを聞きて大に喜び、やがて酒桶の邊に立あつまり、且一碗を試みさすに、些も異儀なかりしかば、遂に一桶を買取り、又一盤の棗子を買添て下酒となし、何の思慮もなく一桶の白酒時を移さず飲乾したり、本藏は原來酒を好ざれば只腰扇を掮て乘凉居たり、已にして兩人の商人は遂に別を告げ、箇々擔を挑ひ東西に別れて走去りぬ、本藏は衆人を催促し已に打立んとしたる所に、遙の下より一個の旅人、喘氣呼々的、血眼になりて跑來り、四邊を見まはし歩卒等に問ひて云く、今此所へ一人の賊漢は來らずや、歩卒等答へて云く、商聚男、賣白酒人、來れるのみにて曾賊は來らざるなり、旅人が云く、其賣白酒人こそすなはち盜賊なれ、聚商人は是伴賊なり、某後山にて彼が白酒を飲けるに、豈料んや酒の中に蒙汗藥を用ゐ、片時のほどに忽手足麻木て掙扎こと能ず、已に一命を害せらるべきに、幸某身邊に靈方の解藥を貯へたるゆゑ、危き性命をまぬかるゝといへども、遂に行李を奪はれぬ、彼賊いまだよも遠くは走るまじと心を前にくばり大に火急て說ければ、歩卒等はこれを聞きて、箭の雁の嘴を穿ち、釣の魚の腮に搭りたる想をなし、箇々面を覷合て只惘然と呆れけり、本藏訝て云く、某が從者等も起先彼が酒を飲けれども今に於て恙なし、汝の說某全く信ぜざるなり、旅人が云く、さらば貴客等も賊の奸計に中り彼酒を飲給ひし耶、今は恙なくとも少回毒氣發すべしと、いまだ云も罷らざるに、一人の歩卒が云く、某頻に腹痛なり、又一人某も何とやらん嘈雜おぼゆるなり、殘る輩これを聞きてそれは必ず毒の發せるならん、こはそも如何すべきと箇々聲をはなちて號哭き、或は觀音の呪文を誦へ、或は彌陀の寶號を唱じなどし

て、どよみさわぎければ、本藏も大に驚きけり、然に彼旅人が云く、危哉貴客等、若某今一歩おそく來らば必非命に死給はん、某貴客等の危急を眼前に見てしのびがたし、幸解藥の靈丹を殘して此に在り、これをまゐらすべきに、速にもちゐて毒氣を醒し給へ、衆人口を齊して云やう、各官若其靈藥をめぐみ我等が急を救ひ給はゞ、委是重生父母、再長爺娘なり、此大恩銘心鏤骨て身を了までわすれ申すまじとて只顧乞ひけるにぞ、彼旅人すなはち懐をさぐりて一煉の丹藥を出し、これを服給はゞ恙なかるべしとて與へければ、歩卒等これを接て、さて十餘人の輩ひとしく旅人の前に來りて、手を拱き頭を地につけ、揷燭也似拜に六拜して謝しにけり、旅人が云く、何ぞ慇懃の禮に及び申さん、某は彼賊を追はんと欲して心急なれば少刻も此に猶豫しがたし、はや告別申すなりと云つゝ忙く馳去りけり、扨歩卒等は解藥を得て大に喜び、箇々爭派とりていそぎこれを服し、忽蘇生したるこゝちをなして、方纔魂魄身にもどることをおぼえたり、本藏も又幾分の心を安うして云く、汝等天の保佑によりて旅人が懇情に干る若しからずば豈能一命をさぬかれんや、歩卒等曰世には善を好む人もなきにはあらず、誠に彼旅人は我等がための生地隍なり、一人がいふ、うたがふらくは鈴鹿明神靈をあらはして、我等をすくひ給ふにてはあらずやと、箇々感嘆を催しけるが、乃又議して云く、彼賊いまだ遠くは走るまじ、我們追捕へて讐をむくい憤を休めまじきや、衆皆其言に同じて、已に拳を摩り力足を踏みけるに、忽手脚麻木てことゞく地上に倒れ、恰死人のごとくにて尚只うごくものは兩眼のみなり、此岩杉林のうちに號笛ひゞきて、彼賣白酒人、面衆男とともに四五人の小賊を引てあらはれ出で、本藏が立騒ぐひさをうかがひ、手快く一槌の禮物を拳とりて、造化好と叫、りつゝ一齊に山を下りて逃去りければ、本藏これを見て我

鎖りて奸計に中れり、汝等肉醬にすべしと叫ばりつゝ、恰も風子のごとく狂てぞ追行ける、且說、彼十餘人のうち一箇の歩卒、原來酒を飲ざれば藥をも用ゐず恙なきものあり、此場の光景を見て魂を消し大に狼狽けるが、忽然として背後の大樹の松の窩より、明晃々たる刀の尖閃き出て、彼歩卒が後心より肚をかけて刺透す、歩卒は乃一聲阿と叫び地上に倒て死してけり、折しも山のうしろなる鐸鹿廟のあたりに鼓樂の聲大に發り、山の木魅に響あひていとゞ物さわがしかりき、斯て彼松の窩の裡に一個の大漢あらはれ出たり、乃頭には黒巾を裹み、身には皂服を穿たり、此大漢且頭を出して四邊を伺ひ、瞿々として箇の鼠洞を出るさまを做て尚身て窩を出で、手中に一挺の帶血刀を提げ、大踏歩來りて、十餘人の歩卒等盡涎を流し倒居るを見て莞爾と咲ひ、やがて刀を擧て逐個々頭を刎ね、地上に捨置きたる彼小旗を把り、刀の鮮血を拭ひて鞘に收め只頭を點きつゝ、口裡語ることなく、遂に一條の間道をのぞみて逃去けり、放下一頭却說、這裏、本藏禮物を奪復と欲し、空中を跳て追行けるが、已に近々と馳到りて相捕としたる所に猛面前の谿間より、敲蒸として一道の山氣滾起り、霧深うちに彼賊等を罩みて朦朧朧々として其去向をうしなふ、此に因て本藏は、只胡然に空を瞻み拳を握るのみなり、岩に彼商人に假たる兩人の賊霧のうちを繞り本藏が背後にあらはれ出て、個空を覘兩賊ひとしう棍頭鎗を拔て斬蒐る、本藏急に身を閃かし之を避ければ、兩賊の刀空を斬其隙に本藏手快く兩口の腰刀を引拔き、双の手に打揮て相迎へ、たがひに鋒を交へて鬪ひけり、原來本藏は能双刀をつかひ、精く劍法に通じたる勇士なれば、兩賊命を際に猛勢を奮ふといへども、何ぞ敵することあたふべき、鬪いまだ十餘合に及ばざるに、一人は眉間を剳劈れ一人は肩尖より膳をかけて兩段に分れ、地上に撲地ぞたふれける、しかれども本藏は兩

賊を殺すのみにて、禮物再びかへらざれば奈何ともすること沒只得舊路に走回り、十餘人の罪ことゞ〳〵く頭を砍れて血泊の裏に横はりあるを見て、唯是切齒咬牙憤るばかりなり、扨此强盜等はいかなる徒とたづぬるに、大樹の窩より出たる大漢は乃ち是鉄貞九郎なり、賣白酒人に打扮たるは手銃六郎なり、衆兩男に粧ひたるは滅法八郎なり、此兄弟兩人が前日原郷右衛門に撞見たりし時、あやふき一命をまぬかれ、其後貞九郎が手に屬せしなりとぞ、彼旅人に假たるは太田了竹なり、凉笠を戴雨衣を披て容貌をやつしたるなり、若此了竹がよき郷談物假粧の達人にあらずんば、いかんぞ聰明伶俐なる本藏を騙くこと能はんや、又白酒は原來清淨の酒にて少しも異儀ある事なく、却て解藥のうちに蒙汗藥をもちゐたるは都てこれ了竹が奸智なりけり、已にして本藏は自言自語說道、某誤りて賊手に遭ひ禮物をうばはるゝのみならず、歩卒等を殺されて身に大罪を負こと猶九鼎よりもおもし、何の鐵面皮ありてか鎌倉に歸りて相公に見えんや、已沒脚蟹となりて家あれども奔りがたく、國あれど投がたし、不如此所にて自害せんにはとて、やがて腰刀に手をかけるが、猛然として想道、我今事を正さずして私に死するは不忠のいたりなり、權且何方へも落行命を保ちて、異日彼賊を捕へ、事を正して後主公の主意にまかせ、爽に死なんこそ義士の所爲なれと、遂に意を決し、腰刀を拔放ちて傍邊の松樹の枝頭を望み只一刀に斬落して依舊刀を鞘に收め、天地を拜して云、喻盜賊等天に路ありて上り、地に門ありて入るとも、速にこれを捕へて此松の枝頭のごとく頭を斬ずんば、誓て大丈夫なるまじ、伏願はくは天地神明憐れみを垂給へと祈念し龍り、何思ひけん汚蠖になりたる彼小旌をひろひとりて懷に收め、衣の塵をはらひて方に落行としたる所に、忽前向の山の間より、一聲漂と弦音ひゞき、一枝の箭とび來りて、本藏が肩尖を擦て後邊の松の樹に中れり、本藏おぼえず危きかなと叫はり、今此箭を射たるもかならず彼賊の所爲ならん、速に搜し捕ふべしと、褌子の裳裳て彼箭の來れる山を的に跳去きけり、却說這回の賊情早速鎌倉に注進ありて、本藏山賊をかたらひ歩卒等を殺して、禮物を奪ひ逃去りしとうつたへければ、原來桃井侯は火姓短氣にして、思量あさき人なれば、是を聞くより忽大に怒り、且本藏が渾家戸難瀬、女兒小浪を捕へて獄に下し、乃管領直義公に言上し、諸丁他的相貌模樣、諸州各府に掛させ、三百貫の賞錢を出して、緊搜覓めらる、桃井侯思慮うすきがゆゑに、權且一箇の良臣干隔潺とぞなりける、不在話下、且說、山州乙訓郡山崎のかたはらに、十字坡といふ所あり、此所に夫妻兩口的究人ありて名を與一兵衛と叫做、此人生得て身材ひきく色黑くきはめて醜男なり、其餘爲人恐怯にて理義を明らめず、世事を曉ざれば、人みな刺猥釘とよびて綽號とす、這是生れ付の愚なるを釘を以て糠に刺すにたとへたる意とぞ、彼が年配は已にはや六十有餘といへども、一個の後妻は年いまだ四十にすぎず、容貌もさまで醜からぬ女なり、しかれども生れ付はなはだ毒惡にして、平昔丈夫の愚なるを欺負、年老たる醜男に正配を後悔し、動もすれば怒罵り、膽氣粗壯、口嘴强梗、恰も角なき夜叉に似て、然も彼水滸の女將母夜叉孫二娘が爲人に類せるをもつて、人みな彼を稱して只夜叉老婆とぞ叫びける、古人の云く、江北の河豚は雌個大なり、武則の天子は女爲尊、皆是男子の軟弱なるによればなりと、確言哉、此與一兵衛がごとく老婆を怕的此語をもつておのれが愚なるを曉すべし、扨此村中には原來獨戸多く住めり、ゆゑに與一兵衛は平日鹿兒猴兒のたぐひの野味を買取て肉包を做り、毎日に驛道にたづさへ出て旅人に賣り、これを營生となして至極貧しくくらしけり、又彼が亡妻は一人の女兒生みて後染病身故けり、彼女兒は幼より相州に下りて、鹽冶侯の

府裏に給事名を慓兒と叫做て、鎌倉に在て生長、夫人貌好の命によりて侯の家士速野勘平に嫁きぬ、然に鹽冶侯滅亡により勘平退糧人と成て堅義を守り、假令餓死すとも二君に仕て不義の知行俸祿をうけまじと、今は此與一兵衛が家に慓兒とともに投托となりて、艱苦をしのびてぞくらしけり、正に是、

鷙鷹至レ死無レ啗レ穗、　義士臨レ難不レ變レ操。

昔日李白一首の詩あり證とす、

鳳凰不レ啄レ粟、　所レ食唯琅玕、
焉能與二群雞一、　刺促爭一餐。

且說、勘平は身の家にありて、已に四五ヶ月を過しけるが、一日獨自慮ひけるは、小人思量あさきゆゑに誤て師直が奸計に中り、兩口の刀劍を買ひ事を惹出せしによりて、相公非命に死し給ふ、畢竟は小人が手を用ゐて主公を殺したるに一般、小人身に罪あれば、雲州府に到りて大星哥々に見ゆるに顏なく、一直此處に身を逃るといへども、仇家の無事なるを聞きて一日も過るにしのびがたし、寧索鎌倉に回り容貌を變して丐子となり、身に漆し炭を呑むの辛苦を辭せずして師直をうかゞひ、讐を復して後殉死を遂げ、魂魄去りて主公の死路をたづね罪を賠るに不如と、遂に意を決し暗に慓兒と商議して、身夫婦には過活のため權他國に赴くよしを告げ、已に吉日を揀み行裝をと、のへて、急ぎ鎌倉に下りけり、慓兒は唯是丈夫のわかれをかなしみて、殷々たる光景、むかし松浦佐用嬪而が丈夫をこひしもかうぞあらめとおもはれける、却說此村に一個の惡棍あり、名を角兵衛と稱し獨戸を做て營生とす、年紀三十七八歳におよべどもいまだ妻を娶らず、平日無賴凶人と交り、もつぱら人を騙りて錢財をむさぼりて害をなすことすくなからず、ゆゑに人皆七寸蛇のごとく忌きらひて、一箇の諢名をよびけるを、是乃ち能人を魅惑すといふ意とぞ、此角兵衛つねに與一兵衛が家に來往し、野味を貢りけるが、いつのころよりか那夜乃老婆と姦通し、時々與一兵衛が眸子をうばひて密會をなす、與一兵衛は愚なるがゆゑに半點もこれを曉ることなかりき、只慓兒は心思靈巧的なれば老婆はこれを怕れ、若彼に我們が肚裏的機關を識破られなば事あしかりなん、いかにも計りて家を追出し、眼中の釘をのぞかばやと、常に慓兒を打罵り只顧狠心舉動をぞなしける、然に一日夜乃老婆慓兒をよびて、女兒速來り我頭髮をつかねよと囑付け、おのれは鏡架兒に對て座す、慓兒は旨を領てそのまゝ梳匣をひらき、小梳兒をとり出して老婆が頭髮を梳りけるが、偶然平日の狠腹心を想起し、頻に胸せまりておぼえず淚を撲簌とおとし、誤て老婆が面上にそゝぎぬ、老婆怒りて云く、汝は何のかなしきことありて斯不祥光景をなすや、我汝を見ること親生女兒のごとく、平生心をもちゐて憐をくはふるに、汝は反て我を燕母とあなどり、何事も心をへだゝへ動すれば流涙して我を嚇す、他人のおもふ所もよからぬなり、至若只能坐を安して喫ふのみ、家内の事を務めず、汝がごとき死飯的瘦馬を痛く打ずんば已後をたしなむまじ、我有道理ぞ且那里に去けとて慓兒が頭髮をつかみ家のうしろなる空屋の内に引來り、不由分說地上に挽飜して衣服を剝とり、白漫々地となして高手小手にくゝり、一根の木橛を執てうちけるにぞ、慓兒は只苦痛にたへず、母親恕免〳〵と賠びけり、老婆大に吼りて云く、與一兵衛の臭痴漢、兒ををしふる道をしらず、平日嬌養ゆゑます〳〵意々似々をなす、たとひ我汝を打殺すとも何の妨かあらん、汝が背梁を打碎かずんばなどて我這熱腸をさますべき、我苦勸銘心ておぼゆべしとて、又連打に打つほどに忽皮開け肉綻びて鮮血滾々とながれ、一聲啊喲とさけび身をそりかへ

りて後ざきに倒れけり、此空屋はこれ常に獣を屠て肉包をつくる所なれば、壁の上にはあまたの獣の皮を掛け、梁の上には五七對の獣の腿を吊り、一邊には白骨を積み、一邊には赤肉を散し、一把の剔骨尖刀肉案上にありて明晃々、更に血臭きこと鼻を襲てたへがたし、如此所に這花枝的女兒、綠の髪を亂し雪の肌をあらはし朱にそみて伏したるは、恰新到的罪人の奪衣鬼娘々の爲に呵責せらるゝに似て、地獄變相にも寫とりがたき光景見る目も當てかねたり、此皆與一兵衛は商賣を罷て家に歸りけるが、空屋の内のさわがしきをいぶかり、此にきたり見て大に驚き、忙々走より僄兒を抱起して、只顧叫喚けれど、もはや四肢うごくことなく、一絲の兩氣方に絶えんとす、與一兵衛こはそも何とすべきと、天に號び地に哭々、唯是狂人のごとく狂ふばかり、老婆は與一兵衛が狼狽を見て冷笑ひつゝ、正屋の方にぞ出ける、與一兵衛は漸々心をしづめ、女兒が胸の上を撫みるに、いまだすこしの熱ありて、わづかのたのみあれば、急近邊に走りて一個の人を央來り、女兒を抱きて板門に上せ、兩人擡げて正屋にいたり、一個の醫を請きたり、醒藥を乞てもちゐなどして、七十三八十四治療をくはふるに、少刻ありて甦醒ければ、方纔一二分の心を安ぜり、次日又外醫を請ひ、藥を貼り、瘡を包みて調治する事凡三ケ月あまり、日漸健旺、誠に危き一命をぞ保ちける、又老婆はいかにもして僄兒を追出さんと計りて、此のちも益彼を呵責し、七死八活の苦をあたへて休むことなし、僄兒は尚氣をしのび聲を呑みて針毡に座し、活地獄の責をうけて無量の苦惱をかうぶり、獨薄命を嘆て片時も涙のかわくひまなく、只丈夫の宿志を遂る日をまちてぞ過活ける、古人說得好、

小家兒女受灘辛、後母加添安怒嗔、
打罵饒寒漸不覺、人前一樣喚娘親、

原來與一兵衛は妻の非道を側することあたはざれば、女兒とともに只憤をしのびて過ぐる耳なり、常言に痴人は婦を畏れ、賢女は夫を敬ふといふことあり此類なるべし、古人亦說得好、

不正夫綱但怕婆、怕婆無奈後妻何、
任他打罵親生女、暗地心疼不敢訶。

畢竟僄兒萬千の辛苦を忍びて、後事如何、且下回に分解を聽け。

（前編卷之四畢）

忠臣水滸傳前編 卷之五

第六回

韓平寓ニ山崎一售ニ肉包一
干崎過ニ西岡一殺ニ野猪一

話説皆光過やすく、日月梭のごとく、いたづらに數個月を經て、時方に麥秋の天氣にいたりうちつゞく迎梅雨やうやく霽に値ふ、此日慓兒すこしの間あるに乘じて、少刻逍遥せばやと、家を立出て、こなたかなたを遊覽しおもはず一村外に出けるに、たちまち一聲子規啼きて空中を翔り、幾个男女、打麥場上にありて曲兒を唱ふ其小曲に道、

三崎村中兒、みさきなどりが　學レ獻熟ニ圈旋、しゅんだるほどに
調爺挈レ娘去、てゝみや　向レ晩觀。ばゞんつれて

慓兒は丈夫勘平にわかれてより、時刻往想、數ケ月を過ぎけれども、些の影响もせざるをいぶかり鬱悶にたへざる折しも、此曲兒の意、夫妻むつまじく苦樂をともにするの情を叙べたるを聞きて、しきりに愁をもよほし、しばし站住てありけるが只見前面の小路より一個旅客すゝみ來り、慓兒をみるより、身を躬め、小心に問て云く、姐々此邊に肉包をあきなふ人はなきや、慓兒答云く、肉包を賣る人は與一兵衛と申て、奴家が父親なり、貴客は何方よりきたれる人にて我父を尋給ふや、旅人これを聞き、慓兒が面貌を看一看ていふやう、しからば姐々は慓姐々にてはなきや、慓兒云く、いかにも然なり、旅人云く、此所にて

姐々に過たるは、誠に天の引合なり、小人は姐々の老公勘平哥々に央れて、鎌倉より來れる急脚子なり、且此書簡をひらき見て事の樣子を曉給へとて、懷より一の封筒を出しあたふ、慓兒これを接り忙々封皮をのぞきて書簡を出し、展開看に、勘平が親筆をもつて寫る、其略に曰、我鎌倉に趣き、容貌を變て丐子となり、敵獸を窺ふといへども、仇家は隄防堅くして近づくことあたはずいたづらに日月をおくりぬ、尙探試るに師直が一家の徒に、錢財を見ること餓たる蠅の血を見るがごとく、貪欲おほき者どもなれば、賄賂を用てちかづかば、事成就いたすべし、しかれども身邊に一錢のたくはへなく、計策をおこなひがたし、汝君夫のために羞恥を不顧、身を烟花に售り、幾塊の金子をとゝのへ即此急足に遞與、鎌倉に贈、我志を遂げしめよ、若然某身をはるとも、九泉の下におきて、相公にまみえ汝が忠貞を告げ、功勞を告げ、功勞をあらはすべし、もつとも此人は是、某が腹心にして、大に老實の徒なるにより、此人を揀びて急足とし密事をいひおくるなり、かならず疑惑して事を遲延すべからずと、纖細に書つけたり、慓兒書簡を讀完りて、心中に點頭捲收て袖に入ければ急足が云く、某は別に又幹事ありて他所に赴なれば後日來りて回簡を接るべし、事をまつたくとゝのへて等給へ、今日は且此にてわかれ申さん、慓兒云く、さだめて長路の疲倦おほからん、只是路中なるにより一盞の茶だにも請がたし、何をもつてか多勞を謝申さん奴家が家は此一村を隔て東にあり、那渡頭より投左路去て、與一兵衛が住所と問給へ、那裡にありと、端的に知るべし、必後日相等申なりと、つぶさに告ければ、急足はすなはち、理會得〳〵と答へ忙々わかれて馳去けり、已にして慓兒は家に回り、且裡面の動靜を窺ふに、父母はひとしく爐火のほとりに坐し、茶を吃して居けるゆゑ、たゞちに内に入り、父母の面前に跪き、説て云く、今日はからず丈夫勘平、飛報を

もつて消息を通じけるが、頃日東國に在て人の連累となり、官府に擒はれて獄につながれ、性命もあやふしと告こしぬ、奴家これを聞きて片時もしのびがたし、因て此身を賣り、幾兩の金子をとゝのへ、東國に贈て、丈夫の罪を贖はんとぞんずるなり、爹々媽々此儀をゆるし給ひなんやといふ、原來漂兒は聰慧的なるれば、復讐の密計外に漏ることを怖れて明白に實事を告ざるなり、與一兵衛はこれを聞て眉頭を一縱、いまだ一言の應答にもおよばざるに、夜叉老婆挿口道、汝身を賣て丈夫の危急をすくはんとおもふは、都是節婦烈女の見識なり、豈敢て老公もこれをとゞめ給はんや、已に汝主意決しなば、我且熟知の娼家に去き、好々商議をなして、すみやかに事をとゝのへ來らんは如何、漂兒が云く、若然奴家が情願十分に遂ぐべし、ひとへに母人を煩中すなり、老婆うち點頭て云く、應得〳〵かならず放心して等つべしとて、急々忙々として衣を整ひ、裳を褰て出去けり、斯て漂兒父の前にちかづきて云く、丈夫のためとはいひながら、年高的父親をすておきて、此身を賣り、父母の面皮を汚すこと莫大の不孝なりといへども、丈夫の危急も又見すてがたし、我們夫妻前生の作業あしければこそ、斯百折千磨をばうくるなれ、只是を運塞とあきらむる耳ぞかし、與一兵衛が云く、古より兒を養て老を防ぐといふことあり、且夕貼苦樂を俱にせばやとこそおもひつれ、何の應報によりてかくかなしきわかれをなすや、汝が身を賣ざれば女婿の命すくはれず、女婿のいのちをすくふ時は汝と生てわかるべし、此歎を見んよりは則索死るがましならめと、哽々咽々涙にむせびて倒れければ、漂兒は慌て扶起し、脊梁を摩挲り勸て云く、常言にも七倒八起と云事あり、我們若皇天の覆庇に靠らば、ふたゝび親子夫妻完聚日もあるべし、必ず過慮して心神をくるしめ給ふなと、父子兩人嗟哭てやまず、正に是桓山の鳥の四子にわかるゝもかくぞあらめと思はれける、扨此日の隘暮にいたり、夜叉老婆一個の人をともなひて家に歸る、此人は是一文樓的臨子才兵衛と叫做的なり、老婆は其儘才兵衛を引て内に入り、且漂兒が容貌を試さするに、漂兒は今已に村落の中に埋沒て、面を照すに盆を鏡となし、頭を梳るに水を油となし、いさゝかも粧粉を施さずといへども、生得たる風流の標致は、何ぞ脂粉を調美に管らん、形骸土木にして、自然の美艶なること、人の眼を奪ふばかりなり、才兵衛は心中に果して奇貨なりとよろこび、相互に身價を論じて金子一百兩に定め、明日金子を持來りてむかへとるべしと約して、且才兵衛は私宅にかへりぬ、次の日にいたりて才兵衛兩人の轎夫をして一乘の竹轎を扛げさせ來る、與一兵衛等親子三人これをむかへて、烟茶の欵待すみ、扨才兵衛懷中より一紙の告身文書をとり出し、よみきけて與一兵衛が親手印信を簽させ、典身金一百兩を遞與しける所に、恰好彼急足來り、事まつたくと、のひけるやいなやをとふ、漂兒は來得好給ふものかなといひてよろこび、彼金子と蒼子布帛にをさめ、曾貼身もてる一面の小方鏡をそへて表記となし、回書を封筒にをさめて、封皮をもちゐ、都これを一包袱となして、彼急足にわたす、急足はこれを接て、ともにあはれをもよほすばかりなり、正に是、

柳條帛裏藏忠信、菱華鏡中照貞心。

斯て多少の皆刻うつるほどに、才兵衛漂兒が手をとりて轎子上しむ、與一兵衛は唯是玄姫昭君が匈奴に赴くおもひをなし、轎子にとりすがりてはなたず、漂兒も父が心中を思量り、父子兩人哭々啼々かなしみて罷ざるを見て、此方にては夜叉老婆はしりよりて與一兵衛をひきはなち、彼方には才兵衛轎簾を撲的下して、遂に轎子擡出し足をとばせて馳走けり、しかるに彼急足は起先よりかたはらにあり、烟管を撚りて、

手中に弄し、只默々として居けるが、與一兵衛夫妻に對て云く、某眼前に親子のかなしきわかれを見て足下等の心中を猜し、ともに涙をおとしぬ、さりながら此金子をたづさへて鎌倉に歸りなば、勘平哥々の一命は決して恙なかるべし、誠に令愛は世にまれなる貞女なりとて、只管感激す、與一兵衛が云く、若女婿の一命を救ずんば小女が辛苦はみな枉然なり、とかく足下を煩申なり、急足が云く、此事は小人が身に干りすこしも疎失すべからず、夫妻放心して好音をまち給へ、小人は心火急なればもはや告別申なりとて、つひに包裹をとりて忙しく馳去けり、扨此一件は都て是夜及老婆と、狸兒角兵衛が通同合計にて、一來慓兒をしりぞけてほしいまゝに姦通をなし、二來曲身金をむさぼりて、快樂むべき毒計とぞしられたる、前日老婆勘平夫妻が密談を一五一十佇聽して、たちまち此計を生じ一個の善學會的を央み、勘平が親筆をみせ詐書を寫しめてあざむきたるなり、若彼書簡一點にても、勘平が字跡にたがふ所あらば、豈能慓兒がごとき乖覺聰明の女を騙ることあたはん、昔日宋朝に一人の僞筆の達人あり、姓は蕭名は讓といふ、綽號を聖手書生と稱す、今此僞筆をせし人も蕭讓におほくゆづらざる達人なり、又彼急足に扮ちたるは何人ぞなれば、這是鳥羽の邊に住む鳥粘にて角兵衛が騙局にてぞありける、三五兩の辛苦錢をわかちとるとて、此奸計にくはゝりけるとぞ、不在話下、且說、當地に一人の少年的あり、名を伊吾と號してわづかに十五歲になりぬれど、きはめて乖巧的なりけり、此伊吾毎日村中を徘徊し、もつぱら滷魚枯魚のたぐひを賈ひて過活とす、しかるに一日伊吾つねのごとく、一籃の枯魚をかたげ、熟主顧人家に出て賣ばやと、與一兵衛が門前を過る折しも、家のうちに暗々と話響もれきこえけるゆゑ、伊吾偶籬笆の縫間より窺闚に、夜叉老婆狸兒角兵衛と坐を對し、飲酌を催して撥、にたのしみをなし、何やらんかたり居たり、伊吾耳をそばだてゝ聞くに角兵衛がいふやう、前日慓兒を騙りておほくの金子をむさぼり、偶樣に毎日に樂をきはむるはよろこばしき事なれども、若異日勘平此に歸り、慓兒が去向をとひなば何とこたふべき、さるにより某は枕をやすうせざるなり、老婆咲ていふ、情人かならず過慮しておそれ給ふな、萬一事のほころびて勘平我罪に對し、山高水低おこしなば、彼慓兒が回書を表證とし、彼等が高執事をうたんと計る密謀を首告なば、却て勘平は罰せられ、我們は賞錢にあづかるべし、ゆゑに奴家はすこしも彼をおそれざるなり、角兵衛が云く、勘平は是勇力の豪傑にて、然も是非を決斷する事分明なれば、等閑の輩と一列に見がたし、某は只放心不下とぞ低言ける、伊吾は彼等兩人が光景を見て獨自おもへらく、我頃日獨戶等の風聲を聞くに、角兵衛は與一兵衛が妻と私情を交へ、皆々會合樂をなすと說しが、果然いつはりにあらず、原來與一兵衛は老實的人なるに、那淫婦を娶りしは、造化低ことなりと嘆息して尙うかゝひ居たり、しかるに老婆籬の外に人ありて內を窺ふをさとし、坐をたち門外に出てこれを見るに、這見伊吾なりければ、一聲大に喝て云く、汝伊吾ひそかに我家內をうかゝふは、必相脚頭を見おきて賊をすべき心底ならん、速に走去ずんば、汝が太陽上に痛く拳を中べきぞ、伊吾は老婆に賊するかと詈られ、頗怒を起して云く、我汝が家內を窺しは賈をすべきためなり、豈惡意ならん、しかるに汝我を賊とするはいかに、汝こそ淸天白日に偷をなす徒なれ、老婆これを聞き、大に怒て云く、汝節小猻め何事を曉して胡言亂語をいふや、曾我賊をなしたるおぼえなきぞ、汝若ふたゝび舌をうごかさば決して饒すまじ、我怒の未十分ならざるに乘じて、はやく此を逃去れ、伊吾冷咲て云く、汝節老犬め、汝等が賊をなすは偷人も偷るゝ人も、原來得心の上にて偷むゆゑ、たがひに相歡びて、

或は偷み或は偷まる、何必世間の偷とひとしからんといひて、遂に兩人は爭嚷におよびけり、此ときに角兵衛は門外の鬧しきを聞つけ、何事ぞと籬の内よりうかゞひ居けるが、原來火性短氣の者にて、殊更すこしの酒氣を帶たれば、伊吾が惡口毒舌を聞くにしのびず、そのまゝはしり出で、有无をいはず、相揪へて拳をもちゐ連打にうちて、魚籃をとりて擲つけければ、乾魚は恰も風に秋葉を吹轉すがごとく、四方八面に散てけり、伊吾は切齒咬牙て怒れども、年少ざれば彼等に敵する事あたはず、只頻に哭喊、汝伴賊、などかく我を撲ちぬるや、少停此仇をむくい、後悔をさすべきぞとて、乾魚をひろひあつめ、籃にをさめて尚ひたすら口裡に喃々訥々詈りつゝ立去けり、不在話下、且話、一箇月あまりを過て後、一日夜乃老婆と角兵衛兩人、彼肉を屠る空屋のうちに出會し、頭を交へ耳を接へて低言けるが、乃老婆が云く、奴家情人と恩愛の日ひさしく、たがひにおもひ骨髓にとほりしかば、今更緣を斷んことあたふまじ、此ほど丈夫與一兵衛病にそまりて坐臥安からず、是乃月老の保佑なり、此豈に乘じ、暗に鴆毒をもちゐて彼を殺すべし、さらば他日勘平此に歸來るとも何を把柄に一句の言をなさん、常言を聞ずや初嫁從親、再嫁由身と、たとひ異日奴家情人の家に嫁すとも、何人言三語四といふ者あらん、是草を斬て根を除き、情人と偕老をなすの良計ならずや、角兵衛が云く、いかにも神妙の計なり、宜急にこれをおこなふべし、老婆が云く、さりながらこゝに一事足らざることあり、原來毒藥は容易得がたきものなり、怎生是好、角兵衛がいふ、幸我酒伴に太田了竹と云ふ者あり、彼曾砒霜を貯ふと聞置ぬ、好々我明日乞取て來るべし、如此〳〵這般〳〵すべしといひあはせ、此日は且兩人相別て去けり、扨次の日にいたり、角兵衛砒霜をとり來りて、暗に老婆にあたふ、老婆これを得て懷にかくし、與一兵衛が枕の邊をはなれず、終日看病してありしが、黄昏の頃にいたり、時分よしと彼砒霜を掌中にくだきて細末し、瓶にてもとめおきたる一貼の末藥にませ鍾にうつして白湯をかたむけ入れ、簪をもちゐ攪拌て與一兵衛にあたふ、與一兵衛は此ほど服したる末藥なるべしと、何の思慮もなく一口もちゐていふやう、此藥味前と異にしてはなはだ用ゐがたし、老婆が云く、藥の味いかでか異ならん、病の所爲にて舌の異なるならん、時としてはさる事もあるべし、强てもちゐ給ひなば、漸々に快かるべきにかならず遲々し給ふなとすゝむ、與一兵衛實もとおもひ、ふたゝび第二口を用うるとき老婆勢に乘じて、一鍾の毒藥ことゞく與一兵衛が口中に灌入ければ、與一兵衛は一滴ものこさず都て喉のうちに呑下し忽大に苦みていへらく、惟哉此藥を呑とひとしく五臟六腑迸斷がごとし、苦やな禁がたしと、大に一聲喊びしかば老婆忙く被を把て與一兵衛を蓋ふ、與一兵衛いよ〳〵苦みて云く、汝何ゆゑ斯我を氣欝させしむるや、老婆が云く、此ほど醫師の申さるゝには、褪を厚して汗を發せしめば、早速快からんとなり、しばらく氣欝に勝給へ、與一兵衛益苦喊んとしけれども、老婆尚與一兵衛が上に跨り、力に任て壓へければ、與一兵衛は此皆僅に一聲哎てつひに淫婦が手裡に死し畢ぬ、可憐這老兒不幸にして、個魔頭を娶り、狠計に中りて非命に死す、古人說得好、

黑蝟口中舌、　黄蜂尾上鍼、
兩般猶未毒、　最毒婦人心。

しかるに老婆は與一兵衛が動ざるを窺ひ、乃被を引ひらきて見るに、哀哉與一兵衛は、目口鼻に血を流し、牙を咬てぞ死居たる、さすがの老婆もこれをみてほとんど驚き、あわたゝしく、號の壁を敲きければ、

空屋のうちにかくれ居たる角兵衛馳來りて、老婆をたすけ、兩人屍首を擡起て、面上の血の痕を抹ひ、人の疑をふせがんが爲に、うへに新衣服をおほひおきぬ、斯て次の日にいたり、近邊の人を央て、喪儀を營み其屍を火葬して、背後の山中に葬り、遂に踪跡なくぞなしたりける、原來與一兵衛は箇の親眷もなく、殊に一軒のはなれ家に住めば、四隣ともにある事なく、一人として彼が非命の死を知者あらざりき、正是蓋狗倒來恩人を嚙むとは此事ならん、後人の陳ねたる詩あり、證とす、

老婆邪惡鴆其夫、豈料一朝齧養狐、
誰道武松阿嫂惡、奸心相等不同辜。

斯て後は、彼兩人誰ありてはゞかるべき人なく、益こゝろを安うし、毎日に此家にありて、ほしいまゝに私情を通じ、恰も漆と膠のごとくなりけり、常言に云、人可レ瞞、天不レ可レ瞞と、皇天の羅網、闊君の籌秩、いかでか惡人を脱漏すべけんや、彼等兩人巧計といへども、到頭かならず報あらん、豈能始終無事を保たんや、間話休題、且說、勘平は鎌倉にありて師直をうかゞふといへども、いまだ宿意を遂げず、いたずらに數ケ月をすごしけるが、大星由良京都にありて暗に忠義の武夫をあつむると聞き、ふたゝび又京都に赴き、好門路をもとめ大星にまみえて罪を賠、擅 簒てともに志を遂げばやと意思を決し、乃鎌倉をはなれて道中に馳出けるが、夜々の夢あしく何とやらん心安からざれば、三歩を一歩となして、路をいそぎほどなく京都に着し、已に山崎の村口まで來る所に、對面の樹木叢中にあまたの鴉むらがりて、哇々と叫ぶ、勘平これを看て猛然として、自言自語說意、異哉我公冶長にあらざれば、其啼聲いかなるゆゑをしらざれども、恰も凶信を告るに似たり、可惟〳〵といふ間に、しきりに心頭眺不レ住、しばらく踏住て居たるをりしも、背後に人ありて哥々とよぶ、勘平紐過身て此人を見るに、かねて識認たる乾魚賣の伊吾なり、勘平云く、汝別來恙なかりしや、伊吾云く、小人暗に報知たき事のありて、大哥の歸郷を俟候ひぬ、權且一邊來り給へ、つぶさに說話すべしとて、勘平を請て人なき所に至り、扨彼角兵衛と老婆と姦通の事、僄兒を騙り金子を奪ひたる事、與一兵衛を毒殺したる事、および自己角兵衛に打れて瘡をうけたる事、首より尾に至るまで一五一十をつぶさに告ければ、勘平これを聞くより、且驚且怒、牙を咬み、拳を揑り、身をふるはしてもだえけるが、漸ありて伊吾を謝して云く、若汝が好意にあらずんば、我も又ともに彼等が毒計におちいるべし、我すこやかに泰山の仇を報い、汝が遺恨をもはらさすべき道理あり、かならず此事を人にもらすべからずと封口して伊吾にわかれ、たゞちに與一兵衛が家に來りて、且籬の縫よりうちの動靜をうかがふに、夜乃老婆は獨爐火のほとりに坐して苧を拈て居たり、勘平窺罷内に入て、勘平今日歸來り候ぬと叫ければ、老婆大に慌て、走出で、歡喜女婿なるか、我爾の歸國を俟佗たり、さだめて長路の疲おほからんとて、自己一鍋の湯を脚盆にかたむけ入て足を洗せ、一瓶の茶をあたゝめて飯を喫せしめなどして奔走すること日外に異り、勘平家内を見まはして云く、泰山は恙なくおはすや、今日も營生に出られしや、僄兒は何方へまかりしやとたづぬれば、老婆流水舌頭を轉し、口に信て云やう、僄兒がことは一席に說りつくされず、與一兵衛は彼所に居給ふなり、對面すべしとて、すなはち座を立てやぶれたる紙門をひらきければ、一脚の卓子の上に一の靈牌をまうけ、香華燈燭をそなへて居おきたり、勘平これを見て駭然と驚て云く、扨は泰山は身まかり給ひしか、老婆が云く、偶霍亂の病を發し、良醫百藥のしるしなく、すぎつる六月二十九日の夜遂に死し給ひぬ、我悲歎のくるしさいか